
傍観者-BLACK&WHITE-

零河 時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍観者—BLACK&WHITE—

【Nコード】

N9796P

【作者名】

零河 時

【あらすじ】

傍観者シリーズ第二弾！

《傍観者》と呼ばれる主人公、ひろ嘉とその《不穩》。

誰かの為に生きるとは？

それは“いい”生き方なのか？

【始まり】（前書き）

変化などいらない
望まない
願わない

【始まり】

(……………はあ、またか)

学校に向かうバスを待つバス停で。

まだ若い朝の光を浴びながら私は只黙って立っていた。胸の中にモヤモヤしたものをぶら下げたまま眉を顰めて不快を露わにする。頭痛が酷い頭を傾けて胸の前で腕を組む。

ここ数日こんな調子だ。すっきりしない気分はいつもの事だが、それとはまた別の倦怠感。

それは、それ程気にしなくていいような『ある』事が気に障ってしょうがないからだ。『そんな事もある』と流したいのだが、珍しくそれを流せずにいる故。

なんというか、眠る時に時折どうしても無視出来ない鈴虫の鳴き声のような。どうでもいい筈なのにどうしても気になってしまいう小さな事のような。そんな些細なこと故に私はムカムカする羽目になっている。

その原因は、毎日同じ店から流れている歌にあった。バス停の後ろの花屋。こんな早朝から開店準備を始めていて、そのスピーカーから結構な音量で流されている曲。

なんだそんな事か、ではない。毎日毎日、毎日毎日、タイミングを合わせているのかと思うような絶妙なタイミングで、しかも私がバスを待ったたった数分の出来事。そのタイミングで必ず流れる歌のワンフレーズに、私の苛々の種があった。

『誰かの為に

あなたの為に

何かしたい

なんだってしたい

生きて行きたい』

サビなのだろう、盛り上がるの部分。毎日聴かされたせいとその部分を覚えてしまったくらいだ。

つまりが、自分ではない誰かの為に。

私には分からない感覚で。あまり好きではない考え方だ。

こういう生き方を推奨したり賞賛したり、そういう声を良く聞く。そういう“良い”場合もあるんだろうが、私の周りではそれがプラスになったという事例は殆どない。殆どの場合それが曲がった根性の下に適用され、実行されるからだ。

まして、《復讐》や《報復》といった、永遠に続いて断ち切れそうもない因縁や感情などが絡んでいる場合。そんな場合、『他人の為に』という安易な言葉は負のものしか生み出さない。それどころか《破壊》をもたらすものになる。

先月終焉を迎えたばかりの《不穩》は、それを証明する雛型のよくなものだった。殺された親友の為にと《復讐》劇を演じた《演技者》。その《不穩》自体は終結したものの、あいつの《復讐》は続く。恐らく一生続くだろう。

結局何も生み出さなかった。残ったのは事実と倦怠感だった。

その経験と今までの《不穩》やその他の要素を総合的に客観的に見て、それが良い生き方なのか、疑問だ。それが偽善でないとも言いきれないだろうし、独善的ではなお悪い。純粹に『誰かの為に』生きている人が居るのかも怪しいものだ。

他人の前にまず自分。そうでなければ生きる事さえ不可能だ。私は他人の生き方に一々干渉する程物好きじゃないし、そんなもの興味もない。そんな私がとやかく言うのはおかしいかもしれないが、大多数の人間はその順序が滅茶苦茶になっていると思う。あるいはそれ自体無視しているのかもしれない。

誰かの為に。

自分ではない誰かの為に。

今の私には分からない感覚。理解したいとも思わないが、今はそれでいいだろう。将来の事は分からないが、それでも構わない。今のところ、考え方は変わらない。

私は《傍観者》として此処に居る。

此処に居る。

【相違】（前書き）

約束した

あの人の為に

あの人の為に

【相違】

珍しく早い時間に夕飯も終え、私はリビングのカーペットに座って宿題に着手していた。昨日はサボったのでその分たまっている。宿題にやたら文句を言うクラスメートもいるが、勉強自体は別に苦ではないし、特にやる事もないので教科書やら参考書やらを広げて学生らしい事をしている。

そもそも学校というのは勉強の場所だ。だから宿題が出されたってそれは当然の事だろう。それが嫌なら学校を辞めてしまえばいいだけの話だ。

まあ、私の学校は少し特殊ではあるけど。学校なのに学校である事を超越した学校とでも言うのか。

「嘉^{ひろ}」

私を呼ぶ声がして、私は顔を上げた。なに、と返して声の主に視線を向ける。

キッチンの方で月姫^{つきひめ}が微笑んでいた。見えない青の瞳を、私がいる方向に向けて。

「勉強中だった？紅茶飲むかなと思って。ローズヒップがあるんだけど」

「ああ、うん」

「了解」

悪戯っぽく、しかし艶やかな笑みを浮かべ月姫はキッチンに向いた。

あまつぎ
天月月姫。

数ヶ月前の《不穩》で視力を奪われ、同時期に一緒に住み始めた同級生。父親が外人らしく、金髪に青い瞳を持つ。今は学校には通わず専業主婦をしている。

そして私が初めて手を差し出した人。

「嘉っちゃん嘉っちゃん嘉っちゃん！」

と、突然月姫ではない超がつくハイテンションな声が私の鼓膜を突き刺した。そいつはどっかり私の前に腰を下ろし、次いで身乗り出すように私を覗き込んだ。

「嘉っちゃん、シェラの『YOU』聴いた!？」

「…………お前、余程嫌われたいらしいな」

私は思わずそいつを睨み付けて低く唸った。

こいつは天月^{きな}妃七。月姫の従姉妹で、それをいい事にしょっちゅううちに来る厄介者だ。同い年のファッション&テンションぶっ飛び娘で、私が最も嫌なタイプの奴だ。ちなみにこっちも学校には行っていない。

妃七は首が千切れるんじゃないかと思うくらいに首を横に振った。「違うよ、本当だよ!嫌われない訳ないでしょ!妃七は嘉っちゃんを愛してます!だから相思相愛だよ!」

「お前、地球の言語から学び直せ」

くだらない、と私はぼっさり斬って再び教科書に視線を落とした。今はこいつの相手をしている暇はないしそんな気もない。『今』だけじゃなく、これからそれは同じだけど。

流石にそれが効いたのか、妃七は口を閉じた。そして僅かにトーンダウンさせて口を開く。

「あの、嘉っちゃん。聞いてほしい話があるんですけどっ」

「嫌だ」

「お願い!」

「なんだ、それは必ず今じゃなきゃ駄目なの」

「む、出来れば今がいいな」

「大事な事なの。緊急なもの」

「妃七にとっては大事だし緊急デス。地球滅亡と同じくらい!」

「じゃあ、私にとってはどうでもいい、くだらない、意味のない話って事だな。まして緊急ならこんな無駄な前置きはない筈だし」

「嘉っちゃん!お願い聞いて!」

「五月蠅い奴だな。どうせ聞かないと言っても勝手に喋るだろうが。」

聞き流すから喋るだけ喋ればいいだろ」

「妃七、あまり嘉を困らせない方がいいわよ。あなた、此処に出入り禁止になるわよ。嘉を本気で怒らせるつもり？」

そこで助け船を出すように、キッチンから月姫の叱咤が飛んだ。やんわり言っているが、大小様々な棘が含まれた声色。

「紅茶入ったよ。妃七暇でしょう？持って行ってくれる？」

そして妃七を使う月姫。妃七は唇を尖らせたが、ぱっと立ち上がってキッチンに走った。トレイを手に月姫とリビングに入ってくる。私は一旦教科書やら全て片付けてティーカップを受け取る。

月姫は私の斜め向かいにゆっくり腰を下ろしてにっこり笑った。

「宿題は順調？」

「それなりに」

「そ。良かった」

嬉しそうに微笑んで月姫は紅茶に口を付けた。私はなんとなくそんな月姫を見つめていた。

「嘉っちゃん」

一瞬だけ口をつぐんでいた妃七だが、我慢出来なかったのか、勢い良く私を呼んだ。赤くなった頬を膨らませてクソ餓鬼のように唇を尖らせる。

「なんで月ちゃんにはそんなに優しいの！妃七だってこんなに嘉っちゃんを想っているのに！」

「気持ち悪いんだよ。意味不明な事ばかり口走ってんじゃねえよ」

思い切り眉間に皺を刻んで妃七を睨み付ける。こいつの声は頭に響いてしょうがない。これ以上騒ぐようなら今後一切立ち入り禁止にしようと思つた。

そんな私の殺気を感じたのか、疲れたのか、このタイミングで妃七は不意にテンションをワンランク落とした。ち、あと少しだったのに。

萎れた雑草みたいになっている妃七の雰囲気を感じたのだろう、月姫は小さく笑って妃七に口を開いた。

「で、話すのを忘れるくらい『大事で緊急な話』って何なの？」

「……………あっ」

皮肉入りの台詞に、今思い出したと言わんばかりの表情をする妃七。ほれ見ろ、そんな重要なものではないじゃないか。

妃七はチラリと私の顔を窺い、今のテンションを維持しようと思いつきながら言葉を晒す。

「だから、シェラの新曲！『YOU』っていうの、聴いた？」

「分からないわ。曲を聴いたら分かるかもしれないけど」

「嘉っちゃは？……………嘉っちゃ、聞いている？」

「聞いてほしいならせめて日本語か英語を使ってくれ。出来れば日本語で」

「日本語だよっ。妃七語じゃないよっそんなの無いよっ」

妃七は唇を一字に結んだ。今にも泣き出してしまいそうな表情だ。

一々相手する気などさらさらない私はもうシカトを決めて紅茶に口をつけた。すると慌てて妃七は口を開く。

「あのね、最近すごく人気の曲なの。超大ヒットでね、いい曲なんだ。泣けるんだよ。知らない？『誰かの〜為に〜、あなたの〜為に〜』って歌！」

「……………」

その瞬間、私はピクリと眉が反応するのを抑えきれなかった。胸の渦が再び蠢き始めるような感覚。

それは、例のあの曲だ。

妃七は両手の指を胸の前で絡め、うつとりとどこか宇宙の果てに目を向けた。

「誰かの為に生きるって素敵！特定の『あなた』の為に生きれるって、もっと素敵！素晴らしい！美しい！それこそ人の真髄だよ！人間に与えられた美学！」

まるで大衆の前で演説するように身振り手振りを交えながら力説する妃七。いつの間にか立ち上がって拳を高々と天井に突き上げて

いた。こいつの中では壮大な宇宙が広がっているイメージなのだろう。

本当に、こいつはイタい。あまりにもイタすぎる。お引き取り願いたい。

そんな妃七に、月姫は苦笑い。

「分かった分かった、聴いた事あるわ。この前テレビで歌ってた」
「取り敢えず座って、と促す。妃七は意外に素直に再び座った。しかし口は閉まらない。」

「素敵だよ。もう妃七、この曲チョー好きになっちゃいましたよ。こんな風になれたらなあって。いえ、なりますよ？……あれ、嘉っちゃ、興味ない？」

黙った私に話を振る妃七。私は眉をひそめただけで答えなかった。すると、月姫がうふふ、と笑って口を開いた。

「嘉は歌っている人とかメロディーには興味ないんだと思うわ。もしかしてだけど、この曲のメッセーじが嫌だったりするの？」

「ご名答」

そう返して溜め息。

その答えに驚いたように妃七は目を見開き、しばたかせた。少し考えるように唇に指をあて、間を置いて私を見つめる。

「そっか、そういうケースもあるんだ。もしかして嘉っちは、『誰かの為に』っていうので嫌な経験とかしてきたりした事あった？」

「直接なものではないがな。周りが周りだから。今までこの面の『プラス』は見た事がないもので」

ようやく会話が成立するテンションに落ち着いてきた。私はそれを見計らって、本日初めて正面から言葉を返す。

妃七はにっこりと微笑んだ。

まるで月姫のような。さっきの雰囲気とは別人のような微笑み、そして。

「嘉っちゃんの周りの『世界』は、私の周りとは天と地くらい違うから、しょうがないっていったらしょうがないよね。でもね、嘉っち

や。嘉っちゃんの知らないところには、『利他的』な生き方が『プラス』になっているケースがたくさんあるって事、覚えていて？私は嘉っちゃんにそれを知ってもらいたって、本当に思うの。それは嘉っちゃんに、必ずプラスになるから。嘉っちゃんに《平安》をくれる筈だから。私は嘉っちゃんの幸せを願ってる」

それは真剣に。さっきまでのテンションが嘘のような真面目で真っ直ぐな視線と声色が、私に向けられていた。そうだった。

こいつも、《不穩》の被害者だった。

(…………でも)

私には理解出来ない事があった。

いわゆる《闇》の人間に傷を付けられ負わされたというのに、何故《闇》に浸かっている私の幸を願うのか。何故私のような人間の幸福を祈るのか。

私には理解出来ない。

「私は幸せを願ってもらえる程できた人間じゃない」

私は自然と口にしていた。こんな事言うつもりなど微塵もなかったというのに、考えるより先に口を突いて出てきた。すると

「それは違うわ」

一秒と間が開かないうちに、月姫が言った。それは動かされない決断のような口調だった。

私は月姫に目を向ける。

見えない青い瞳。やや視線のずれた瞳は、力強い信念のようなものが織り込まれていた。

そしてその声色は力強く、しかし優しく。

「嘉は嘉が思っている程、『人間』から離れている訳じゃないわ。嘉は私を助けてくれた。殆ど接触のなかった私の手を掴んでくれた。それだけで十分よ。嘉は誰かに思われるに足る存在なのよ。それは私が保証する」

私の中の何かを溶かしていくように。そしてあたためるように。

「……………そうなのかな」

敢えて否定はせずに私は視線を落とした。

今はまだ頷けない。只月姫がそう思っているなら、それを否定する事も拒絶する事も出来ない。曖昧な答えだが、今はこれが最善の形だ。

いつかははっきりとした答えが出せるだろう。その時までには。
その時までには。

(2)

(……………はあ)

思わず溜め息が漏れた。

なんだかギャアギャアと騒がしい。休み時間というものは、基本的にそういうものだ。テンションが上がっていくクラスメイトと反比例するように、私のテンションは下がっていく。まあ、いつもの光景と言えいつもの光景だ。

異性の噂話やブランドの話など、私には分からない内容ばかりだ。よく盗み聞きをしているが、まるで異国の言葉を聞いているみたいな感じ。脳の中がぐちゃぐちゃに掻き回されてしまうような感覚。

「……………」

何気なく、隣に座る満月^{まづき}に目をやった。

深夜満月。

外はねの色素の薄い髪に、眠そうな二重の瞼。数ヶ月前に《不穏》によって炙り出された《同類》。《傍観者》という種族の《同類》だ。特に何をするわけではなく只そこに居る。

まるで当たり前のように。

こんな当たり前のように誰かが隣に居る。こんな事想像すらしなかったのに。少し前ならあり得ない事だった。それが、今は当たり前のように。

最初は喋る事すら億劫だった。初めての全くの他人という《同類》。あと一人の《鏡の向こう側》とはまた違う種類の《同類》。そのやや苦手なテンションと付き合うのは、正直なところ面倒くさかった。妃七のようなぶっ飛びではないが、地味に堪える高さのテンション。それが苦手だったりした。

それが今、いつの間にかこういう事になっている。

「ん?」

その私の視線に気付いた満月はこちらを向いて首を傾げた。

「どうしたの？」

「……………」

その質問に私は一瞬迷い、結局答える事にした。

「人って変わるもんだな」

「え？それって質問？」

「違う。最近私が気付いたこと」

溜め息をついて私は満月を見つめた。

《同類》。

「あんたと居ても面倒くさいと思わなくなった」

「……………」

ちよつと驚いたように満月は目を丸くして私を見つめた。私の台詞の意味をゆっくり考えるように。

「にゃは」

嬉しそうに笑い、満月は頷いた。《傍観者》の面影を残しつつも

私の知らない表情で、満月は笑う。

笑顔で。

この笑顔は、満月が私の《同族》ではなく《同類》である理由だ。最も近い《同族》でない理由の一つ。根本は同じでも、決定的に違う部分。

深夜満月という存在。

《同類》というあり方。

あるいは生き様。

（……………うーん……………）

それにしても。

そこで私の意識は再びクラスメートの声に捕まった。引っ張られるように騒音が耳にかじりつく。しょうがない、と私は溜め息をついた。

「毎日毎日……………ホント元気だよな、あいつら」

「まあ、一応高校生だから。薔薇色の青春真っ只中ですからね」

「若いよな……………」

「いや、嘉も若いんだよ」

苦笑いする満月。ちなみにあたしもね、と肩を竦める。そしてなにやら騒ぐ輪に目をやって。

「あたしもあんな時期あったかなあ」

「あんな時期ってどんな時期だよ」

「なんだかんだ、くだらない事でギャアギャア騒げた時期」

「私は無いな」

「嘉は無いだろうね。あんまり想像出来ないし。したくないし。あたしもなかった気がするなあ。それ以前に大人数で騒ぐ事がなかったかな」

私の回答に楽しそうに笑う満月。私は溜め息をついて、騒いでいるグループに目を向けた。

もし私が《闇》に居なかったとしたら、あのクラスメート達のように騒いで笑っていたのだろうか。感情に乏しい、笑う事を知らない、『楽しみ』を知らない私とは別の私だったのだろうか。

(…………やめよう)

私は思考を寸断し闇に棄てた。

『もし』などはない得ないのだ。そんな事考えたところでどうにもならないし、変化も期待していない。考えるだけ無駄。あんな風になりたい訳じゃないし、今のところ変わりたいとも思わない。今は変わらないのだろう事は私がよく知っている。

私は《傍観者》なのだから。

私は私でしかないのだから。これまでも、そしてこれからも。

そう頭の中でまとめた時だった。

「あなたのく為に、なんだってしたくいいく♪」

「……………」

あの騒いでいる連中の中から、あの例の歌が聞こえてきた。盛り上がり過ぎてみんなテンションがおかしくなっているのか、いつも以上に騒音がすごい。

しかもよりによってあの歌かよ。

私が黙ってその騒音に耐えていると、満月が顔を覗いてきた。

「嘉、あの歌嫌いでしょ」

「嫌い」

「やっぱり？あれでしょ、特にサビの部分の歌詞」

「特にとうかそこが嫌い」

「だよね。あたしもそうだから、なんとなくそうかなって。『誰かの為に』か。確かに素直に納得は出来ないかも」

満月は遠くを見つめるように呟いて一息を吐いた。

「あたしはそういう、利他的な事はよく分からないから。分からないっていうか、そういう感覚が無いっていうのかな。そういう生き方を批判するつもりはないけど、あたしには今のところ無理だなっと思う。『良い』と思えない。他人は他人、あたしじゃないもの。自分じゃない人の為に生きるってどういう意味なのかよく分からない」

利己的と言われようが、知った事か。満月の口調の裏にはそういう思いが隠されているようだった。ゆるい口調の中に突き刺す棘。

「ま、只の歌詞だからムキになる事はないんだけど」

満月は笑って締めくくった。

他人の為にとか、自分の為にとか。

出来るならば考えたくないジャンルの問いだ。今の私に答えが出せそうな問いではない。

そんな事、どうだっていいじゃないか。

敢えて私に問うのが間違っている。

（もう私は既に、自分の為に生きていないのかもしれないな）
生きているから生きる。

死んでいないから生きる。

取り敢えず生きる。

そんな生き方をしている私が『生き方』について語る事自体間違いないのかもしれない。そんな資格もないかもしれない。

これが私という《傍観者》だから。
それにしても。

「……………」

この胸騒ぎのような吐き気のような感覚は一体何なのだろう。まるで何かの警笛を鳴らすかのように段々強くなってきた。

満月がそんな私の様子に気付いたのか、視線を向けてきた。

「なんか、機嫌と気分が悪そうだね。まだ先月の《不穏》、尾を引いちちゃってたりしてるの？」

「いや、それはない」

「だよね、嘉はそーいう引き摺るタイプではないよね」

「でもなんかすっきりしないんだよね……………」

眉を顰めて溜め息をつく。

胃の辺りがムカムカしている。胃がどうこうなっているというより、なんていうか、感覚的に『予感』に近い。

《不穏》が近いという。

(またかよ……………)

残念ながら、私の『予感』は絶対に外れない。それを願うだけ無駄な事だ。今までの経験がそれを物語っていた。しかもそれは近い。結局、また始まるのか。先月終わったばかりだというのに。

と溜め息をついたその時だった。

「嘉……………あいつ、知ってる？」

満月がそう言って目を向けた先。私も視線を向ける。

「……………知らないな」

私は短く答えてそいつを見つめた。

廊下の少し離れたところから、一人の女子生徒が私達の方をじっと見つめていた。教室の硝子越しに睨み付けているようにも見える。そいつの長い栗色の髪は頭の高い位置で一つに束ねられている。細い狐のような目が（本物の狐の目は見た事ないが）私か満月かに向けられている。

そしてオーラは《闇》。只私達に目を向けているというのとは違

う。確実に私達を敵として見ている。

それは憎悪であり、殺意に近い。少し離れているので（目も細いし）私達のどちらを睨んでいるのか分からないが、向けられている感情は十分に伝わってきた。

こいつが、そうなのか？

《予感》の元凶なのか？

「……………」

やがてそいつは私達が気付くのを待っていたように視線を外し、踵を返してどこかに消えて行った。

「誰だ……………？知らないな」

「見た事ないかも。なんか……………色々と面倒な事持ってきてそうな奴だね」

心底嫌そうな口調で言う満月。私はそれに頷いた。

「間違いないな」

怪しいにおいがする。ほぼ確実にこいつは私達に《不穩》をもたらず。確信に近いものが私の中で固まった。

滅茶苦茶、面倒くさい。

（……………付き合えばいいんだろ、付き合えば）

私は半ばやけくそになって溜め息をついた。

どうせ足掻いたって悪足掻きにしかない。無駄な体力と気力を浪費するだけだ。それなら大人しく待ち構える方が賢い選択だろう。面倒くさいがしょうがない。これは多分私という《傍観者》の宿命だ。

私は再び溜め息をついた。

満月もつられるように溜め息をつき、私達のところだけ重くなった空気を払拭するように話題を変えた。

「最近、夜明遊よあけびに来たりする？」

それは、満月の双子の姉妹の話題だった。私は首を振る。

「忙しいんだろ、何かと。そう聞いているけど」

「そうらしいんだ。風雅義兄さんと色々回らなくちゃいけないんだ

って。忙しかったらいけないと思ってあまり連絡取ってないんだけど。でもね、最近やっと風雅義兄さんの父さんと打ち解けられたとか言ってたな」

「ふうん」

取り敢えず相槌を打つ。

話の内容から少し分かる通り、夜明は既婚者だ。十六で結婚というのは早いという事は私でも知っている。只、まあ、その結婚にも色々あるらしいのだが。

そして夜明は、以前《傍観者》だったらしい。私が夜明に初めて会ったのは先月でその時は既にそれから外れていたの、《傍観者》だった時の夜明は知らない。とても強力な《人格》に攻撃され、『人格形成』の途中だった夜明は《傍観者》から外れてしまったらしい。

それが結婚と関係がある訳ではないみたいだけど。

「上手くやっているならいいんじゃない」

返して満月を見る。すると不意に満月は顔を曇らせた。そして絞り出すように言葉を晒す。

「上手くいつてる、訳ではないみたい」

「……………」

私は黙って満月が続きを話すのを待つ。会話が終わる筈が、少し意外な展開になった。

満月は言葉を選ぶように沈黙を置いた。床を這う視線は、頭の中で言葉を取捨選択しているのを読み取れるものだった。

ようやく満月は結ばれた唇を開いた。

「うんとね。無理矢理簡単に説明しちゃうと、嘉とあたしが嫌いなあの曲の、『あなたの為に』っていう事で苦しんでいる感じ。一生懸命やって試行錯誤して、それでもまだ考えて行動して、それでもなかなかそれが良い方向に行かない。ぬかるみに足を取られた、進みたくても何処に行ったらそこから出られるのか分からなくて、途方に暮れてる、そういう状態なの。ツルツルの壁の向こう側に、道

具も全くない状態で、もう登る術がない、そういう感じ。意味分かる？」

「言いたい事の輪郭は、なんとなく」

抽象的な言い回ししか使わない満月の言葉に頷く。

満月は、具体的に話す感情が高ぶってしまうと判断する時、こういう遠回しな話し方をする。自分の感情をコントロールする為に抽象的な話し方をする。特に兄弟の『辛い』話をする時はあまり具体的に話さない。それはこの数ヶ月で分かっていたので敢えて追求する事もなかった。

いずれにせよ、夜明が苦しんでいる事に変わりはない。それだけは分かった。

「上手く行かないなあ……………」

高い天井を見上げて小さく呟く満月。

《傍観者》の雰囲気が薄くなる瞬間。こうして兄弟の事を悩んでいる満月は、オーラが少し変わる。《傍観者》を棄てる。

満月は夜明の為に『生きている』。必ずしもそれは間違いではない気がする。夜明の『幸』を願っている事がそれに含まれるとしたら。

だからこそ、『誰かの為に』というモノが嫌いなかもしれない。それが唯一の理由ではないとしても。

(……………もういい)

私は再び考えるのを止めた。

自分の嫌いな分野を敢えて考える必要などない。今は答えは出せないのだからと自分に言い聞かせる。

でも。

(暫くはこれが『テーマ』になるんだろうな……………)

呟いて私は窓の外に目をやった。

再び感じる、突き刺さるような『奴』の視線を無視して。

【再会】（前書き）

傷を負った僕ら
冷たい雨はただ
僕らに降り注ぐ

【再会】

『近いうち、会いに行く』

必要と思われる語さえ省かれた、要件だけの短いメール。

(こういうメール打てるようになったんだな)

心の中で呟いて私は携帯をしまった。返信する必要は感じない。

『あいつ』からのメールは随分久しぶりだ。私から連絡する事はないし、『あの事』があつて私達は少し距離を置いていた。だから少し意表を突かれた。

会いに、か。

なんの為に会いに来るのだろうか。私には会う意味も理由もないのだけれど。

「嘉ー」

満月が私を呼びながらぴょんと隣に並んできた。うつすらと口元には笑み。

「嘉が予定空いてたら『indigo』に行かない？ ケーキ新作が出たって。特別に販売前に食べさせてくれるみたいよ」

「んー………」

私は只唸って鞆を掴み、歩き出した。特にその答えを考えているという訳でもない。追及することなく満月も一歩後ろからついてくる。

「そうだ、嘉。昨日のあいつ、あれから何かあった？」

さっきの質問の答えを待たず満月は新しい質問をしてきた。私は首を横に振る。

そういえばそういう事もあった。今満月が言ったので思い出した。昨日のあの睨み付けてきたあいつは一体何だったのだろうか。そも

そも、あの殺意と敵意は私と満月のどちらに向けられたものだったんだろう。

満月も同じ事を考えていたらしく、私の隣に並んで口を尖らせた。「完璧に《闇》の人間だよね。あいつのあの敵意って、あたしと嘉のどっちが標的なんだろ。なんとなく、嘉って感じがするんだけど」いししし、と変な笑い方をして満月は私を見た。私は横目でそれに応えて溜め息をつく。

こうやって笑っていられるうちはまだいい。これが現実になくなったら本当に面倒くさい事になる。余裕がなくなる訳じゃないが、無駄な体力を使う事に変わりはない。

しかも私もそう思っていたところだったのだ。

私が知らなくても相手は私を知っているという事はよくあるパターンだ。というより大半はそうだ。しかもその場合の殆どが《復讐》の為に私の前に現れる。今までも何度もあった。

もし今回もそうだとしたら。

(面倒くさいな………)

再び溜め息をついて私は考えるのをやめた。

ようやく長い長い距離を歩いて、遠くに校門が見えた。この学園は敷地が広すぎて移動が大変だ。校舎の玄関から校門まで庭園が広がり、歩いて十分はかかる。無駄なくらいに広い。これも車で移動したいくらいだ。しかもその先は送迎の車の為の私道になっており、学校の敷地を出るにはその私道沿いをさらに歩く必要がある。全く、面倒くさいこの上ない。

と、ブツブツ心の中で文句を言っている時だった。

「嘉」

満月が私の肩に軽く触れ私を呼んだ。満月に目を向けるとその目は遠くに向けられている。私は眉を顰めてそこに視線をやった。

「……………」

私道への入り口、花が彩る校門。

そこには、私の双子の姉妹、天星織茨姫あませおり いばらぎが、ずっとそこに居たか

のように、そして此処に居るのが当たり前のように立っていた。

表情などは見えないものの、少し離れたこの場所からも、そのオ
ーラが確認できる。

会いに行く、か。

私は茨姫の方に目を向けたまま満月に口を開いた。

「なあ」

「へ？」

「今日は先に帰ってくれ」

「あ、うん」

満月も深くは尋ねず、頷いた。

私は茨姫に向かって歩き出した。

私は茨姫を連れ、満月が言っていた例の喫茶店『indigo』
に向かった。高級店の並ぶビルの最上階にあるこの高級喫茶店は、
先月から何回も来ている為店員と顔見知りになってしまった。しか
も氷鳥ひとりが手配して、あの財閥七強のスイートルームを氷鳥や満月が
いない場合も顔パスで使えるようにしたらしい。

どうしてこんなに私を優遇してくれるのかよく分からないけど。

「……………自分で探したんじゃないよな、この店」

スイートルームに案内され椅子に腰掛けて、茨姫はルーム内をぐるりと見回した。「まさかとは思うけど」というような口調で尋ねてくる。私は眉を顰めた。

「なわけないだろ」

「だよね。しかもここ、スイートルームかなんかだろ」

「私の《同類》の従兄弟が七強の人間だから。その権力使えばこれくらいどうって事ない」

「七強ねえ……………」

感心したというより呆れたように言い、茨姫はもう一度部屋を見回して溜め息をついた。

財閥七強。

財界を牛耳る『二帝』に次いで財界の中で権力を握る七つの財閥。満月の従兄弟、独門氷鳥ひとりもんがその一つの末裔なのだ。ちなみに私が通う河柳学園かわやなぎは、財閥七強の一つ、柳義家りゅうぎが運営する、世界屈指のブルジョア校。もう一つ付け加えれば、氷鳥はその分家の長男だ。と言っても私は財閥とは何の関係もない一般人だけど。

「……………」

そこで考えを遮断する。

私は茨姫に目を向けた。

茨姫も私に目を向けた。

「……………」

「……………」

私達は睨み合うように無感情に見つめ合う。

久し振りの再会。何ヶ月振りになるだろうか。最近会ったような気もするし、随分前に会ったつきりという気もする。そういう不安定な感覚。いずれにせよ、こうして顔を合わせるのは『あの時』以来という事になる。

『あの時』。

数ヶ月前、私達は《壊し合い》をした。兄弟喧嘩では済まされないうい、そういうレベルではない、互いへの《破壊》。何故そうなった

のか不覚ながら覚えていないが、この際そんな事は重要ではない。

そして数時間の精神の《破壊》の抗争の結果深手を負ったのは茨姫だった。私は茨姫にとどめは刺さなかったものの《致命傷》を負わせ、茨姫は《同族》から《同類》になった。《種族》の中で最も近いものではなくなった。

しかし相変わらずその容姿はまるで自分を見ているかのようにそっくりだった。一卵性双生児の私達だが、我ながら本当によく似ていると思う。髪がばっさりと短くなっている事以外は殆ど同じ。各パーツから、輪郭や仕草まで。

まるで《鏡の向こう側》。自分を写し出しているように。自分と向かい合っている気分させられる。

視線だけが飛び交う空間を崩すように、茨姫は口を開いた。

「さっき傍に居たのは《同類》か？」

「ああ」

「オーラが似ていた。《同族》には遠い感じだったけど」
波のない口調。

そこでウェイターがお冷やを持ってきた。ついでにと、満月が言っていた『新作』のケーキと飲み物を注文する。

ドアが閉められたあと、僅かな沈黙。そしてそれを切り裂いたのはやはり茨姫だった。

「最近なのか、一瞬に居るのは」

「ああ、数ヶ月前だ」

「そうだな、私とあんたの空白はつい最近からなんだからな」

そう言っただけで茨姫は意味深な沈黙を置き、意味深な視線を私に向けた。私はそれに答えて視線を返す。茨姫はじっと私に視線を固定させたまま言葉を発した。

「私にも傍に居る人がいる」

「……………」

茨姫の意外な言葉に私は茨姫に視線を這わせた。あの意味深な視線はこういう意味があったらしい。茨姫は肩を竦めて溜め息をつく。

「《同類》や《同族》ではないけれど。嘉でいう『月姫』に近い。……そんなに意外か？ 私は一応あんたの《同類》だ。嘉にそういう存在が居るなら私にいてもおかしくはないだろう？」

「……………」

そうか、と頷いて私はお冷やを喉に流し込んだ。確かにそう言われればそうかもしれない。私に月姫や満月といった『傍に居る』人物がいるのと同じように、茨姫にそういう存在がいたって驚くような事じゃない。むしろ妥当というのか。

それはともかく。

私は視線を茨姫に向けて口を開いた。

「で、今日は何の用」

「兄弟の近況、一応報告までにしようと思って。聞いて損はないだろう」

私がそう尋ねるのを知っていたかのように、茨姫は間を置かず返してきた。私は溜め息をついて茨姫に目を向けた。

「……………聞くだけタダだしな」

「ああ、損はない。一応頭の隅に入れておいた方がいい。特にあんたは『情報』をあまり仕入れようとしないな。《闇》では情報というのがどれぐらい重視されているのか、一応認識していた方がいいけど。まあいい、一番上から順序よく行こうかな。まず……………兄貴」

茨姫は淡々と語り始めた。

「定兄貴は残念ながらあまり詳しい状況は分からない。生きていてってことくらいだ。まあ、今のところあの人は死なないだろ。あの人を殺せるのは《最強》くらいだろうな」

天星織定。

天星織兄弟の一番上の長男で今年二十歳になる。私の生活に関わる全ての金銭の援助者で今は沖繩に住んでいる。この人は《闇》の人間では知らない者はいないという程に有名な人だ。

その冷徹さと冷酷さ、残酷さと残忍は他の誰も模倣出来ない程に。

その圧倒的な強さに。只、私はここ数年直接話したことはないの、兄貴の情報はほぼ全て人づてに聞いたものだ。今はどうなのかまでは分からない。茨姫もあまり分からないようだし。

でも恐らく、あの人は変わっていないだろう。私の中の《傍観者》がそう言っていた。根本は変わらない。

私の唯一の《同族》。

「ああ、只」

茨姫は思い出したというように人差し指をこめかみに当てた。

「ちよくちよく帰ってきているらしい。勿論《不穩》の関係で。この前は、あの狂乱組織の《無数銀河》^{ダスト}を片付けに来たみたいだが……」

「まさか、全滅させたのか」

「ああ。絶滅した。しかも、たかが数日で。あの組織は末端まで数えれば塵粒のような膨大な人数を有していたんだぜ？『銀河』を名乗るだけあって。それを、たった数日で。しかもたった独りで」

「……………」

出来るだけ《敵》には回したくないな。そう思った。一度だけ『そういう風』になった事があるから、もうあんな事には絶対なりたくないと思っただけ。

私は《無数銀河》の事は殆ど全くといっていい程知らない。しかし狂乱組織というものは基本ろくな組織はないし、無数の人間がいるなら、束になって結構な力を生み出す筈だ。唯一聞いたことのある情報によると、一国家程の人数がいたらしいから、それが本当なら、巨大な組織である事が分かる。それをものの見事に数日で片付けてしまったというのだから、いかに兄貴が凄まじい力を持っているのが分かる。

それでも一つ、茨姫の口から出た台詞で気になる事があった。私はそれを口にする。

「あの人が恐ろしい実力の持ち主っていう事は知ってるつもりだ。今改めて感じたしな。でも『《最強》しかあの人を殺せない』って、

そんなにあの人は強いのか」

その私の問いに、お冷やを口に運んで茨姫は肩を竦めた。

「私はそう感じた。実際見た訳じゃないから断言は出来ないけど。確かに《最強》の息子達や、《最強》の直属の《始末屋》みたいに強力な奴らはたくさんいるけど、兄貴を殺せる程ではないと思う。全て憶測だけだな。この『感覚』はあんたなら分かるんじゃないか？ 《同類》」

私をそう呼び、グラスを弄ぶ。

「失礼します」

と、ここでドアがノックされ、ドリンクとケーキが運ばれてきた。シュークリームが二つおまけでついてきた。

ウェイターが下がってドアが閉まるのを確かめ、茨姫はケーキにフォークを入れながら再び話し始めた。

「それから、沢石兄。^{たくし・にい}あの人は……今あの極秘特別施設、《奈落》に収容されてる。何回も脱走しているみたいだけど。あそこはこの『そういう施設』より嚴重に警備されているだろうに。あの《破壊魔》の狂い振りには流石の私でもドン引きだ。出来るだけ関わりたくない」

そして、ケーキを一口。「なかなかだな」ともう一口入れる。

天星織沢石。次男で十九歳。

沢石は《破壊魔》と呼ばれ、恐れられ《敵》どころか味方に付ける事さえ嫌がられる部類の人間だ。否、人間なのかも怪しい。『感情』という感情を何も持っていないというのだ。《破壊》するにも、何をするにも。そんな存在を『人間』と表現する事など出来るだろうか。

私はこの人とは、まともな会話を交わした事はない。只沢石が手の付けようのない《破壊魔》だという事以外知らないと言っても過言ではない。あの極秘収容施設に入れられるくらいだ、本当にヤバい奴なんだろう。

ちなみに先月の《敵》は《案内人》の《案内》の元にその施設に

ぶちこまれた。

私はコーヒークップに手を伸ばして言葉を投げる。

「あの人は……………本当に分からないな。今まで会話を交わした事がないから」

「私もだ。いつも遠くから見ただけだから。今まであの人の《不穩》に巻き込まれなかったのは奇跡としか言い様がないな。これからも遠目で見れるものであってほしいけど」

「同感」

頷く。それは心から同感できた。なんというか、あの人のそれはヤバそうだ。ヤバイジャンルが違うような気がする。とにかく、それに私を招待するような事は是非とも遠慮願いたい。

あいつが『人間』になるという事は、今のところまずないだろう。「それから、来夜兄^{らいや}」

茨姫は続ける。

「兄は、ヤクの影響からは抜け出した。今は学園の近くのコンビニで働いている」

「……………まじかい」

その報告に思わず眩きが漏れた。

十八歳の三男、来夜。

なんて精神力だ。来夜は《破綻者》によって、自分の意思に反してヤク漬けにされた。しかし惑溺性の強いその影響から脱したらしい。大したものだ。敬服に値するのではないだろうか。

私はケーキを食べ進めながら尋ねる。

「《破綻者》との《不穩》の決着がついて、そう経っていないよな。もうヤクは抜けたのか？」

「決着がついたのは一年くらい前か。それからだから、そんなものじゃないか。それでもそれを克服出来た、その精神力はすごいと思うけどな。ただ者じゃない。しかも復活して今も《逆》^{リバース}の名で呼ばれているのだから」

「確かに」

私は同意して返した。

それは一度、酷く悶え苦しむ来夜の姿を見たことがあったから。一度は死を強く意識しながらも。それを望んだ瞬間を乗り越え、来夜は今を生きている。死にたくなる程の苦痛を、胸をかきむしり、強く呪いながら、そしてそれを征服した。

《逆》、か。

来夜はその異名^なの通り、それに恥じない歩みを続けている。

しかも、コンビニでバイトをしているという事だ。来夜も私と同じ河柳に通っているが、バイトをする意味はなんだろうか。必要ないと思うし、ひどく滑稽だ。あの《逆》がバイト？《闇》にどっぷり浸かり、『普通』の《世界》など知らない筈の来夜が。私は《逆》の来夜しか知らない。定兄貴のように――あそこまで冷酷で残酷ではないが――周りを凍らせてしまうようなオーラを纏っていた。

そのバイトの理由は恐らく、来夜に直接尋ねなければ分からない事だろう。私はそう自分を納得させて考えを中断した。分からない事を考えたって無駄なだけだ。

茨姫は少し沈黙を置いて続けた。

「それから、紫幸^{むらさき}。……あいつも河柳にいるんだろ？もしかしたら私よりあんたが詳しいんじゃないか？」

「全然詳しくない。相変わらずっていう事しか知らないな」

「それだけ知っていれば十分だ」

そんな事を言って茨姫は目を細める。

「《崩壊》は相変わらず。聞くとところによれば、凶悪さは増しているとかいないとか。ついこの前も《不穏》ふっかけてな。学園内でのものではないようだから、もしかしたら嘉は知らないかもしれない。周りも巻き込みながら相手を徹底的に《崩壊》させたらしい」

「誰にふっかけてんだ」

「《盗賊》の五言^{ごごん}タウに。ちなみに、ついでにと言わんばかりにその一族も根絶やしだ」

「はあ」

思わず溜め息が出た。

天星織兄弟長女で一つ上の紫幸は《崩壊》という名で知られている。とにかくキレたヤバい奴で、気に入らないものは手当たり次第《崩壊》させる。それが自分より強いと思われる《敵》にも向かっていく。なんというか、理性より本能の方が勝っているかのようだ。理性のない猛獣より酷いかもしれない。獣でも襲う獲物を選ぶくらいはするだろう。

しかも《盗賊》一族を《崩壊》させたのか。なんてクレイジーな奴だ。五言一族と言えど、何年か前にもう一つの《盗賊》の一族を絶滅させた奴らだ。そんな奴らに独りで挑むなんて、こいつは馬鹿なんじゃないだろうか。

只、今まで私は沢石のそれと同様、紫幸の《不穏》に巻き込まれた事はない。こんなに近くにいながら、そして私の『性質』がありながら。それは救いだと思っている。こいつもかなりクレイジーな奴だから、巻き込まれるのは御免だ。出来るだけ私の知らないところで存在してほしいと強く願う。

更に茨姫は続ける。

「最後に、初雨^{はつめ}。こっちも相変わらずだ。今のところ回復の見込みはない」

「……………そうか」

私は特に感情はなく、一つ頷いた。

天星織初雨^{はつめ}。一つ下の妹。

彼女は約二年前《不穏》に巻き込まれ、植物人間になった。それからずっと青柳病院^{せりやうびやう}に入院している。意識の回復は難しく、以前から治る見込みは殆どないと言われていたが、両親の希望で延命治療が続けられているという事だった。

初雨を攻撃した奴らは、本来は初雨がターゲットではなく、定兄貴の《敵》だったと聞いた事がある。それが、たまたま初雨がそこにいて巻き込まれてしまった、とかなんとか。これは誰かから聞いた話だが、信憑性は薄い。ちゃんとした《情報屋》からのものでは

ないので、ここでは敢えて出さない。

誰に狙われたにせよ、初雨を『生きも死にもしない』状態にした輩がいるという事に変わりはない。恐らく初雨は自らを護る術を持たなかったのだろう。瀕死の傷を負い、植物人間になってしまった。私は彼女ともちゃんと会話をした事がない。それどころか顔もよく覚えていない。見舞いにも行った事がないので、今どういう状況なのか全く分からない。他人より他人のような感覚は今に始まった事ではないが、最近は僅かにその感覚にひどく違和感のようなものを覚える。このままではいけないと、私の中の分からない何かが警告を発している。

兄弟だけじゃない。《傍観者》の母親、《殺し屋》の父親。いずれも殆ど家におらず、まともな言葉を交わした事も視線を合わせた事もない。一体何をしているのか、何処にいるのか、全く分からない。情報を入れようと今のところはあまり思わない。

すっかりぬるくなってしまったらうコーヒーを喉に流し込み、茨姫は目を細めた。

「まあ、こんな感じだ。情報という程でもなかったが、近況報告はこれくらいだな。両親も相変わらずだし」

そこまで言って溜め息をつき、茨姫は沈黙を置いた。大きな窓から外の世界を見下ろす。

兄弟、家族とは名ばかりの私達。『普通』の兄弟あるいは家族とはどういうものなのかはよく分からないが、満月の兄弟を見ても他の兄弟を見ても、私達が異様なのは分かっている。

兄弟の何も知らない。他人より他人。私が相対する《敵》達でさえ、兄弟あるいは家族という単位で結束している奴らは多い。庇い合い、助け合い、そうして関係は成り立っている。

何が正しいのか、私には分からない。どれが最善なのかも、益になるのかも。

「で」

と、沈黙していた茨姫が視線を部屋の中に戻した。私に目を向け

て問う。

「あれから《破壊》はしたのか？」

「一応、先月。あんたはどうなんだ」

「私は一人、《破壊》した」

「へえ、深手を負いながらね」

「一応私は《同族》からは外れたが《同類》だからな。そこまで外れた訳じゃないさ」

「ふうん」

「でも……前のようにはいかないものだ。《破壊》するか否か、迷いがあった。以前はそういう事はなかったのにな。まるで呼吸のように行なっていたのに、今は《破壊》の後始末の事まで考えてしまう。それが私とあんたの、《同族》か《同類》かの決定的な違いなんだろうな」

言い、茨姫は不意に表情を暗くした。

それは何か、心のどこかに引っかかった棘があるかのように。落胆しているような、呻いているような表情を無理矢理に堪えているように。

あの《破壊》の後、茨姫は少し変わった。確かにあれから会うのは初めてだ。しかしその変化は一目瞭然だった。

いくら容姿が鏡を見るように酷似していても、その発するオーラは僅かに違う。当然だ。《同族》と《同類》の違いというのは、同じ《種族》だからこそ分かる事で、それには大きな違いがある。《同族》から外れてしまうという事は、かなり大きなダメージを茨姫に与えているようだった。

そして茨姫の口から流れ出た言葉は。

「私と嘉は、暫く離れた方がいいのかもしれない」

意外な言葉ではない、しかし予想まではしていなかった台詞だった。なんとなく心が感じていたとでも言うのか。

それは変わってしまった自分に嫌気がさしてしまうからか
あるいは私を見ると破壊的な衝動が生まれてしまうからか
多分、否確実に両方の理由故の言葉だ。私の中にこいつの感情が
流れ込むように入ってきた。

茨姫の中に、到底言葉として形に出来ない思いが蠢いているのも、
まるで手に取るように。そしてそれが何を意味するのも理解した。
「そうだな」

だから私は答えた。

無理に会う必要もない。理由も動機も意味もない。これが私達の
答えであり、私達の形だ。

今は。

「そういう事で。私は先に失礼するよ」

言い、茨姫は立ち上がった。そして私に背を向ける。伝票を持っ
てそのままドアの方へ向かった。

「……………」

私は茨姫の後ろ姿を見つめていた。

《鏡の向こう側》。

僅かに変わってしまった部分もあったが、それは《同類》になっ
た今も変わらなかった。

もう暫く会う事もない。

（勘定はよかったのにな）

私は一つ溜め息について冷めてしまったコーヒーを流し込んだ。

(2)

もう街は夜を迎える準備をしている。

最近帰りが滅茶苦茶遅いような気がする。寄り道ばかりして真っ直ぐ帰っていない。全くの手ぶらというわけではないので、無意味な道草を喰っているわけではないけど。

しかもさつき毎日恒例の月姫からの電話があった。少し遅いと必ずかかってくる。たまにはその前に帰宅してもいいだろう。明日は早く帰ろう。

そんな事を考えながら私はマンションのエレベーターを出て自分の家のドアの前に立った。

「……………」

と、勝手に鍵の開く音が聞こえ、ドアが開いた。私は眉を顰めてそのドアノブにかかる手を伝ってその人物の顔に目を這わせた。

「おかえりだな、嘉」

「……………なんであんた当たり前のようにドア開けてんだよ」

私はドアを開けて私を出迎えたそいつを睨み付けた。

それは、天星織兄弟三男、《逆》の来夜だった。穏やかに私を見つめる漆黒の瞳には、私の知らない来夜があった。

一体どうなっているんだ？何かの《不穏》なのか？月姫を巻き込んだのか？何故私の家に来た？

そんな私の怪訝の表情を読み取ったのか、来夜は薄く唇を開いた。笑った、とまではいかない表情を作って言う。

「驚かせたな。取り敢えず、入れよ」

「……………」

私が此処に住んでいるんだけど。そう思ったがそれは言わなかった。ひどく違和感のようなものを感じながら（当然だ、今までこうやって接した事など皆無に限りなく近いのだから）私は中に入る。

そして先に奥へ進む来夜の背中を睨み付ける。

本当に何しに来たんだ、あんた。ていうか、一体何がどうなっているんだ？

「やあ、嘉。お邪魔しているよ」

私がリビングに入ると、もう一人月姫ではない人物が私を出迎えた。私はそいつをじろじろと睨み付けて溜め息をつく。

天月^{あまつぎ}夜空。私の同居人、月姫の兄だ。月姫と同じ青い瞳が穏やかに微笑んでいる。来夜とは同級生で、最近からつるんでいるんだとこの前月姫が言っていた。

「お帰りなさい、嘉」

キッチンに立つ月姫が私の方に向き直って微笑んだ。この雰囲気だと、面倒な事を持ってきたという訳ではないようだ。少し安心した。

しかしそれにしても、突然訪問して来るなんて予想していなかった。頭の隅に上る事すらなかった。まさか、こんな気軽に遊びに来る感覚で来るなんて。

今までこんな風に来た事なんてなかったのに。一体何がどうなっそうになったのだろうか。

「今日はパーティーでもやるのか」

私は私の反応を楽しんでいる月姫に目を向けた。月姫は只ニコニコニコニコと微笑んでいる。

「たまにはいいじゃない？ 兄弟も入れて食事。滅多にないでしょう？」

艶やかに微笑み、月姫は言った。その綺麗な笑みを見て私は何も言えなくなる。只黙って俯いた。

兄弟入れて食事、か。実は初めてだったりする。

「まさか追い出したりしないよね？」

視線を床に這わせた私の様子を見て悪戯っぽく夜空が笑った。月姫と同じ青い瞳が悪戯っぽく楽しそうに笑っている。

私は一瞬だけその碧と目を合わせ、すぐに逸らしてまた溜め息を

ついた。

「出て行けって言ったってどうせ出て行かないんだろ」

「サンキュ。やったね、来夜」

夜空は微笑み、来夜は小さくニヤリと笑った。突然の訪問者のくせに。なんだか物凄く向こうのいいように流されているような気がする。

(……………まあいいか)

私の人生なんて大概そんなものだ。

考えるのが面倒になった私はそれを放棄して自分の部屋に向かった。

「なんでつるんでるんだ」

食卓を囲んでの食事。

その途中、私は前置きも何も置かずに夜空に短く尋ねた。それは、来夜の過去を知って尚そうしているのか、という意味を含んでいた。そんな唐突な質問に驚く事もなく、夜空は意味深な表情を浮かべて口を開いた。

「奴らがまた来夜を襲いに来ないとも限らないからね。俺、友達に《闇》の組織の奴が居るから、俺が傍に居たら来夜の《敵》にある程度の圧力をかけられるだろ？だからさ」

「《闇》の知り合い？」

「ああ。風守最団^{なぐすも}。知ってる？」

「知ってるも何も、《地獄の案内人》だろ。……………そんな奴らに知り合いが居るのかよ」

ちよつと意表を突かれた。

風守最団は通称《案内人》。組織も大きく、《闇》にもそれなりに影響を及ぼしている。月姫の兄である夜空がそんなネットワークを持っているというのは意外だった。

ちなみに、先月の《不穩》の元凶、《透視者》を氷鳥と一緒にあの特別な収容施設《奈落》に《案内》したのは、この風守最の人間の一人だ。うーん、世の中かなり狭い。

私は箸を動かしながら再び問う。

「じゃあ、結構あんたと風守最の関係は表に出ているという事か」

「そういう事だね」

「成る程ね」

私は頷き、何気なく来夜に目をやった。

「……………」

来夜は押し黙り、じっと私達の話を聞いていた。その表情は——意識して暗い色を出さないようにしているもの——微かに曇っていた。何か余程胸につつかえるものがあるのだろうか。残念ながら私にはそこまでは読めなかった。

まるで『人間』のような表情と。

「……………あら、誰かしら」

チャイムが鳴った。月姫がチャイムに反応し、こんな時間に誰だと思いつながら立ち上がろうと私は腰を浮かせる。すると来夜が、俺が出るよ、と立ち上がった。私は黙って再び腰を下ろす。

数十秒して、来夜は戻ってきた。その手には、あの『indigo』の袋が下がっていた。

「差し入れ。外はねの髪の子から」

「ああ、満月ね。今回は何買ってくれたんだろ。後でお礼言わなきゃ」

月姫は答えて微笑んだ。『外はねの女の子』でこの家に来るのと言えば満月くらいしかない。そして満月が持ってくるものと言え

ば向こうのスイーツしかないというのを月姫は分かっているようだ。
「『indigo』という事はデザートだな。食事終わってから出
そうな。冷蔵庫入れとくよ」

来夜は言い（『indigo』を知っているようだ）、そのまま
冷蔵庫にそれをしまった。うん、最早誰の家か分からない。

と、その時誰かの携帯が鳴った。私はそのメロディーを聞いた瞬
間、脱力してしまった。

それは、あの例の歌だった。

犯人は来夜だったようだ。黒いウエストポーチを探って携帯を取
り出し、なにやらキーボードを押している。私はそんな来夜に尋ね
る。

「その歌好きなのか」

「ん？まあなんとなく。あ、嘉歌詞が気に入らないんだな？」

「……………なんで分かるんだ」

「少しは分かるんだよ、お前の事」

「……………」

府に落ちない何かはあったが私は黙って来夜を見た。

どうしても気にしないようにする事が出来なくて、いい加減嫌に
なってしまっていた私は肩を竦めてそれに答える。来夜はなにやら
楽しそうに薄く笑っている。

来夜が、笑っている。

「まあ嘉みしたいな考え方もあるんだろうけど、俺も『そう』だった
し」

言い、携帯をしまって来夜はニヤリと唇を歪ませた。

「人間はみんな、そうやって生きているんだと思うぜ」

「あんたはそうなのか？」

私はそんな来夜に問い返した。今なお《逆》と呼ばれる来夜はど
う答えるのか、とても興味を引かれた。

すると来夜はうっすら微笑んだ。不敵な、というより、信念に満
ち溢れた力強い笑みで、まるで『人間』のように。

「ああ」

そう答えた口調も、強い決意のようなものが溢れていた。

私には出来ない表情。分からない表情。その答えを見付けた人しか出来ないだろう表情だった。

そうか。

来夜も変わったんだ。

私はそう来夜の確かな瞳を見つめていた。

「明日バイト？来夜」

明日早いらしく先に帰る支度をしていた夜空が、来夜に尋ねた。

洗われた食器を片付けていた来夜は手を止め、夜空に視線を向けた。

「いや、違う」

「なら、ちょっと遊びに行かないか？」

「いいぜ」

「学校も早く抜け出しちゃったりして。たまにはいいじゃん？」

「おう」

「じゃ、また明日」

「おう」

夜空は淡い笑みを残し、少し名残惜しそうにしながらも帰って行った。ボタンと玄関のドアの閉まる音。来夜は再び片付けを始めた。最後のコップを棚に戻して棚のドアを閉める。来夜が片付けか、と思いながら私はその様子を見ていた。

私が実家に居る時、一度でもこういう来夜を見た事があっただろ

うか？ こういう事をする来夜を想像出来ただろうか？ それどころか親しげに誰かと話しているのを見た事があっただろうか。こんなに穏やかな来夜を見た事があっただろうか。

来夜は本当に変化したんだと感じた。その変化は恐らく、良い方向への変化だ。『人間』に近付いている証拠。少し前のあの《鬼人》に近い来夜しか知らなかった私にとって今の来夜は別人だ。衝撃ともいう。大地を揺るがしてもまだ足りない程の激震だ。漫画のように頭でも打って突然人格が変化したのかと思う程の変わり様。

あの《逆》が。

ここまで人格が変化しても、《逆》のままでいられるのか。オン・オフのように切り替えているという事なのだろう。《不穏》の時と、そうではない時と。《逆》の名を護っているという事はそういう事だ。

私には分からない。

「ん、どうした？」

私の視線に気付き、来夜は尋ねてきた。《闇》に濡れながらも微かな光の影が見える瞳はまるで私を包み込むように。

「なんでもない」

私は返し、溜め息をついて視線を外した。こういう、私の全てを受け入れるような視線にはまだ慣れない。というより耐えられない。ましてそれが『兄弟』から向けられたものだから尚更そうなのだろう。ひどく落ち着かない気分になる。

「あら、兄さん帰ったのね」

その時丁度風呂からあがった月姫はそう私達に尋ねた。金色の波打つ長い髪をタオルで拭きながら一つ欠伸する。そして私と来夜に体を向けて微笑んだ。

「嘉、今日はちょっと疲れたから先に寝るね。来夜さん、お先に失礼します。お皿もありがとうございます。ゆっくりしていいですね」

「ありがとう」

来夜もそれに応えて笑みを返した。

【理由】（前書き）

護られたくはなかった
本当は一緒に闘いたかった

【理由】

「本当は護って欲しい訳じゃないんだ」

月姫も就寝し、しん、と静まり返った部屋の中、来夜が静かに話を切り出した。

ソファに背中をどかっと預けて天井を仰ぐ来夜。瞼を閉じ、短く溜め息をつく。何か告白するようなやや重い口調。私はそんな来夜をじっと見つめていた。

「……………」

あの食事の時の曇った表情の理由が、なんとなくが分かった気がした。

来夜はそのままの体勢で続ける。

「俺は本当は、そんな理由でつるむのは嫌なんだ。そういうのじゃなくて、なんていうか、もっとシンプルに付き合いたいんだ。どうせなら、そういう、ごちゃごちゃした理由はなしで」

一気に言い切つて息を吸う来夜。

悩んでいるんだな。私は来夜を見つめ、投げ出された膝の上に無造作に置かれた腕に目をやった。

左右の手首に残る、幾筋もの斬り傷や刺し傷。晒す事も隠す事もなく、只現実としてそこにある。それは来夜が死を意識しながらもそれに勝利した事を証ししていた。

と同時に《闇》に居る証。

「……………」

来夜も今まで、自分の傍に居させた人間はいない。多分夜空が初めてだ。だから戸惑いや躊躇いなどがあって、感情が立ち往生しているのだろう。あるいは自分の中に生まれた感情が良く理解出来ないのかもしれない。もどかしくて、歯痒くて、何をどうしたらいいか分からない。そういう感じだ。私も、そういうのを経験している

から、なんとなく分かる。

《逆》という《闇》の名を持つ来夜。あまりの変わりように一瞬忘れそうになるが、この人の《世界》も広がり始めたばかりなのだ。戸惑いや躊躇い、それがあって当然だ。葛藤があって当たり前。でも。

「私にはそう見えないけどな」

私は右手で頬杖をつき来夜を見つめた。さっきの夜空の様子や、来夜に対する接し方などを見て私が感じた事を率直に。

「あんたを護るのは、別にあいつじゃなくても可能だろ。もし《不穩》をふっかけられた時に動くか否かは別にして、あんたの後ろにはあの兄貴がいるんだし。それにあんたは、あいつに護ってもらう程弱くない筈だろ」

「俺も自分が弱いとは思ってねえけど。あいつ言ってたじゃねえかよ、奴らを牽制する為に居るんだって」

溜め息について言う来夜。その口調は淡々として、何か空虚のような色が滲んでいた。

私は一瞬間を置いた。来夜は夜空の言葉を鵜呑みにしている。仕方ないと言えば仕方ない。でも私は、あの夜空の言葉が只の理由付けという事に気付いていた。夜空が来夜と居るのは、そういうことやごちゃした理由じゃなく、本当にシンプルな理由からだと思っただ。感じた。

「表向きはそうかもしれないけどな。あいつ、あんたの傍に当たり前のように居るじゃないか」

「単純に只居るって訳じゃないかもしれないだろ」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でもな、兄貴」
「…………お、おう？」

私が初めて『兄貴』と呼んだ事に驚きながらも来夜は頷いた。目を何度もしばたかせて私を見つめる。

私は口を開いた。

「あんたが考えているより、あいつは感情を持った人間だ。あいつを見て思う。あいつはあんたを『友』として見ている。案外単純な事なんだぜ」

「……………」

一瞬の間。

夜空にとって来夜の存在は、只の《協定者》ではない。もし只《同盟》を結んでいるだけなら、先月の《不穩》の時に氷鳥が《演技者》の素直にやったようにする筈。《不穩》やそれに類する事以外では全く付き合わない筈だ。まして遊びになど誘わない。

いくら月姫の兄だからといって、そして来夜が私の兄だからって、一緒に私の家にこうして来ない筈。

「……………だといいいけどな」

言い、来夜は曇った表情を隠すように笑った。その表情は複雑でひどく悲しそうだった。

初めて見る来夜の表情。そんな露骨なものではなかったが、見た事がない分それを見た時胸の辺りが、針に刺されたようにチクリとした。

「……………」

でもそんな来夜に、私はかけてやる言葉を見つけられず、只来夜の伏せられた瞼の辺りをなんとなく見ていた。

《破壊》の言葉なら考えなくても余るくらい出てくるのに。私には癒す言の葉はない。

言葉というものは、本当に役に立たない。私は齒痒い思いを隠すように来夜から視線を外した。

(2)

「昨日学園に来てたのって、嘉の双子さん？」

その次の日。

校内レストランでの食事中、なんの前置きもなく満月が尋ねてきた。私は目を上げて満月を見つめる。

満月はランチの魚をつつきながら続けた。

「実はね、嘉の兄弟ってみんな有名だから、あたし少し知っているんだ。氷鳥が情報に通じてるって事もあるけど。名前は茨姫っていうんでしょ？あと、嘉の《同族》だって聞いた」

「今は違う」

「……………違う？」

私の答えに満月は疑問符を飛ばした。そこまでは知らなかったらしい。というより、『意味が分からない』という感じだ。

私は紅茶を喉に流し込んで一つ溜め息をつき、満月に再び目を向けて説明を加えた。

「少し前までは、そうだった。でも数ヶ月前に《壊し合い》をした。あいつは深手を負い、《同族》を外れた。今は《同類》だ」

「……………」

驚いたように目を見開いて固まっている満月。私は眉を顰めて怪訝を露わにした。

「なんか変な事言ったか」

「……………姉妹で《破壊》し合ったの？」

「そうだけど。姉妹だろうが他人だろ。そういう事があってもおかしくはない」

「そうかもしれないけど……………。え、どうして？喧嘩が巨大化したの？戦争になっちゃったの？」

「さあ。残念ながらそこだけ覚えていない。でも《破壊》するくらいだ、『なんとなく』ではない。ちゃんと理由はある」

覚えていないから説得力はないが。しかしいくら私でも無差別的な事は間違えてもしない。だからそれなりの理由があった筈だ。否、思い出せないが、理由はある。

そんな無駄に体力使うことに、相応の理由なしに労力を費やしたりはしない。

「……………そうなんだ」

言い、満月は黙り込んだ。何か思案しているような複雑な表情。

私は黙って満月の何か言いたそうな表情を見ていた。

やがて満月は言葉を選ぶようにして口を開いた。

「あれだね。兄弟のあり方っていうか、兄弟の定義みたいなものが、嘉達は特殊で独特なのかもしれないね。あたし達とだいぶ、なんていうか、違う。先月から思っていたけど……………その辺もあたし達の違いなんだろうね」

「あんたら兄弟は仲良いからな。そっちの方が私には分からないんだけど」

羨ましいとまでは言わない。どっちがいいのか分からない。でもなんとなく、満月の兄弟の方が、雰囲気は良い。

本当の兄弟の姿というのは、満月達の方が断然それに近いのだろう。なんとなくそう思った。私達の兄弟が異常なのかもしれない。血を分けている事も意味を持たない程に。無意味だと一蹴するかの如く。

そんな空気を払拭するように、満月はニンマリと笑って再び尋ねてきた。

「そうだ、昨日嘉ん家にいたあのお兄さん誰？」

「ああ……………彼氏」

「○×☆△□#!?」

冗談にしては少々キツすぎたようだ。何メートルもぶっ飛んでしまいそうな程満月は驚き、目を見開いて私を見つめた。口をパクパク言わせて言葉を失っている。めちゃくちゃリアクションがでかい。私の口から出たジョークだからだろう。

私は溜め息をついて続けた。

「……………冗談だよ。兄貴だ。天星織兄弟、三男の兄貴」

「ああ……………へえ、彼が三男さん」

「ああ。この学園の三年。《逆》^{リバース}って異名もある」

「ああ、聞いた事あるよ」

満月はそう言って頷いた。

「なんか、結構大きめの《不穩》の中にいなかった？」

「ああ。二年くらい前にちよつと厄介な《不穩》に巻き込まれてな。私もあまり詳しくは知らないんだが、《破綻者》とその一味と戦っていたらしい。で、拘束されてヤク漬けにされた」

「……………マジですか」

「あいつも弱くはないが、あの頃はまだまだ力不足だった。しかも相手の数が多すぎた。あいつ独り対組織だったからな、いくらあいつでも無理だったみたいだ。面白半分で無理矢理ヤク漬けにされた」

「でも、昨日会った時普通だったよ」

「ああ。一年前によくその《不穩》に決着がついて、敵から解放された。ヤク漬けのままなんとか勝利したらしい。それからまた地獄さ。ヤクを身体から抜く為に必死に禁断症状にひたすら耐えた。死を意識しながらな。で、今に至るわけだ」

「嘉、だいぶ略したね」

「ちよつとな。でも私が知っているあいつの情報といったらこれくらいだから。本当に詳しい事は知らないんだ」

「大変だったんだね」

「らしいな」

まるで他人事のように私は返した。なんだか滑稽で違和感のある返事だったが、本当に知らないのだからしょうがない。

満月は尖らせていた唇を横に引き、笑顔のような表情を作った。信念のようなものが織り込まれた表情だった。

「嘉の兄弟は」

穏やかな口調で言葉を晒す。

「きっとみんなずば抜けて精神力が強いんだね。《闇》の中で一番大事な、そこで生き抜く為に一番重要なものを持っているんだ。それを強く抱いている。だから揺るがされそうになっても、倒れずに立ち続ける事が出来るんだ。……三男さんも嘉も他の兄弟もそうだと思うけど、そこまで強く信念を曲げずに生きているって事は、もう既に答えを持っているのかもしれないね。誰かの為、あるいは何かの為の『生きる為の理由』の答えを」

「……………」

「あたしにも、なんとなくだけ見えてきた気がするよ」

何か堅く決意したような満月の表情は、力強く確信に満ちていた。誰にも譲らない、何にも変え難い、そういう信念を呼び込んだものだった。それが何なのかまでは分からないが。

私は満月から視線を外し、小さく溜め息をついた。

「あんたの兄弟達もそうだろ」

「嘉達程じゃないよ。確かに満夜兄ちゃんみちやはハンパないけど。でも……………あたしはまだまだなあ」

やや影を落とした声色。何を思い描いてそう言っているのか分からないが、何か特定の感情を消化出来ないような口調だった。胸の中で何かが揺らいでいるようだった。

「でも」

それを払拭するように満月は顔を上げた。その表情は自分を奮い立たせているようだった。

「もしその答えが見つかった方があたしにとってプラスになるのなら、あたしは頑張ってみつけるよ。それがあたしという《傍観者》を強くしてくれるのなら、ちゃんとした『形』としてね」

「……………」

私はそれに答えなかった。

私にはまだ分からない。どうするべきなのか。それを探して、本当にどうにかなるものなのか。

今のところは。

(……………今は考えないでおこう)

私は考えるのをやめて小さく溜め息をついた。最近こうして思考を中断させるのが多いような気がする。多分それだけ無意味な事を思い巡らせているという事だろう。無意識のうちに私の意識は、何かに対する答えを探そうとしている。

何かを求めている。

以前はこういう事はなかったのに。

「嘉」

と、満月が私を呼んだ。私は満月に目を向ける。満月は困ったような表情で私を見ていた。

「すごい恐い顔してる」

「ああ……………妄想族なもので」

溜め息をついて返す。忘れていたメインディッシュの最後の一口を片付けてフォークを置く。満月もそれに倣った。食事は終わりだ。立ち上がってテーブルを後にする。

昼ご飯は面倒だ。食べなくていいのなら食べたくない。金銭面で援助している兄貴の命令があるので、わざわざ校内レストランにまで行って食事をしているだけで、本当の事を言えば、あまり動きたくない。

取り敢えず教室に向かう。なかなか距離があるのでゆっくり私達は歩いていった。廊下を掃除しているおばさんの隣を通り過ぎて階段をおりる。

ふと思ったのだが、この学園にはエレベーターがありそうでない。業務用のものはあるが、生徒のものはない。要望はあったのだが理事長が却下したとかいう話を聞いた事がある。そこまでする必要はなさそうだし、どれだけ怠惰なんだって話だ。いくら私でも校内でその必要性はないと思う。

「ねえ、嘉。さっき妄想族になってた時、何を考えていたの？」

歩きながら満月が尋ねてきた。うっすら口元に浮かべられた笑みは《傍観者》。私が『そういう』類の話をすると予測しているよう

なものだった。

私は前を見つめたまま口を開いた。

「色々、考えるんだ。最近」

「ふうん。色々？」

「色々。今まで考えないようにしてた、あるいは考えた事なんかないような事を、無意識のうちに模索しようとしている。答えを探そうとしている、そんな感じだ」

「あ、言いたい事分かるかも」

満月は、うんうんと何度も頷き、一つ息を吸った。外はねの癖毛が揺れる。

「あたしもそうなんだ。どうしてだろうね。あたしの《世界》が広がったからなのかな。最近特にひどいの。なんだか………やっぱ『人間』なんだなって思う事があるんだ。嫌とか、そんなんじゃないんだけど、なんだか違和感だらけって感じ。今までのあたしじゃないんだもん」

一気に言って、溜め息。私に顔を向けて淡く笑った。

「でも、多分嘉程ではないと思うけどね。その戸惑いとか歯痒さとか、そういうもののレベルは。嘉はあたしより『人間』から遠い気がする。確かにこの問題って、自分ではどうにもならない気もするけど、どうにか出来るのは自分しかないんだよね。この矛盾した感じがまた腹立つんだな」

そして苦笑い。

私は溜め息をつく。

ごちゃごちゃ考えるのは決して嫌いではない。自分の持論を思い巡らし修正し整理するのは私の常だ。それでも最近それが億劫に思えたりするのは、それが『整理』から『模索』という形にとって変わろうとしているから。

頭の中でいくら考えたって分からない事はある。いくら解明しようとう奮闘したところで、それは実を結ばない。分からないものは分からない。私が模索しようとしている事は、多分そういうものだ。

それなのにそれを無意識に探そうとするから疲れてしまうのだ。

それは徒労に終わり

結局螺旋は普段のまま。同じ場所を上ったり下りたりしているだけ。

《傍観者》がそれを模索しようとする事はきっと、無駄な事なのだ。空を掴むようなものなのだろう。きっと《傍観者》の私では見つけられないものなのだ。

そう自分に言い聞かせながらも、またそれを繰り返す。

結局私はまだ此処に居る。

「結局、結論が先送りになるだけなんだけどな」

小さく呟いて私は考えるのを止めた。そうしないと、今度こそ頭の回線がショートしてしまいそうだった。

「しょうがないよね」

満月はそう答え、私の感情を悟ったのか、それ以上話を続ける事はしなかった。

そうこうしているうちに、教室についた。もう清掃も終わったようだ。私は当然のように自分の机に向かった。

と。

(……………)

私の机の上に、折り畳まれた白い紙。飛ばされないように重石が置いてある。赤でも黒でもなく、白い紙というのが逆に怪しい。不審に思いながらゆっくりつまみ上げ、棄てようか一瞬迷って開いてみた。

「……………」

「……………」

一瞬の間。

「……………ふうん？」

一緒にそれを覗き込んだ満月がそう頷き、気に食わないというように眉をひそめた。

『kill you』。

赤いインクで只それだけ書かれた紙。敢えて英語で書いた意味は分からないが、しかしその一文だけでこいつが何が言いたいのか、何をするつもりなのか、それが全て分かった。

どういう奴なのかは全く分からないが、私を抹殺しようとしている事だけは分かった。間違いという事もあり得るが、今のところその可能性は限りなく零に近いだろう。敢えて警告してくれるとは、ご丁寧にも、という感じだ。

警告したって、私はどうもしないけれど。

「……………嘉」

満月が私を呼んだ。私は紙から目を上げて満月が目で指す方を見た。

そこには、奴。あの殺気の女子生徒。敵意を少しも隠さずに私達を睨み付ける吊り目の奴が、少し離れた廊下の向こう側からじっとこちらを睨み付けていた。

それは、確かな殺気。

満月はいいつを睨むように見つめながら口を開いた。

「またあいつ見てる。やっぱり変だよ、あいつ。ていうか、この紙あいつでしょ」

「奴以外いないだろうな」

「という事はあいつの目的は嘉って事だよな」

「そうなるな」

なんとなくそういう感じはしていたけれど。

「……………」

「……………」

暫く睨み合い、奴は踵を返して去って行った。私がこの警告を見るのを確認したかったのだろうか。

（……………慎重派だな）

慎重というか、臆病というか、なんていうか。こんな奴は珍しい。色々と延ばし過ぎのような気もする。自信がないのか、本当に慎重な奴なのか。敢えてこういう形を取る意味はなんなのだろうか。

まあ、どうでもいい。慎重だろうがなんだろうが、いずれは面倒くさい事を持つてくるのには変わらない。

《不穩》を持つてくる事にならない。

私はその紙をぐちゃぐちゃに握り潰した。

あいつの警告など、私にとって意味はない。何の影響もない。

どこからでもかかってこい。

私は逃げない。此処に居る。

【願い】（前書き）

自由の中の束縛

それは矛盾に満ちた

〈絆〉という束縛だった

【願い】

『お前、何故生きている』

奴は尋ねる。

不機嫌そうに。

『何故生きる。お前にとって『生きる』事は只呼吸している事にすぎないんだろ。それは『生きる』とは言わない。なら何故生きる』
「生きているから生きる。死なないから生きる。只それだけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

『それがお前の答えか。お前の持論は理解し難い』

「お前に訊かれたから答えただけだ。理解してもらいたいとは思わない。理解してもらおう為の持論じゃない。私という《傍観者》を堅く保つ為の持論だ。お前に理解されてたまるか」

『ムカつく女だな。お前見てると腸が煮え繰り返るんだ。お前みたいな奴がのうと生きているのは不愉快だ』

「そんなこと知ったことか。なら見なければいい。お前の台詞は押し付けがましいんだよ。逆に訊くが、私みたいな奴とはどんな奴だ？」

『お前みたいに、自分の思うままに対象を《破壊》するような奴だ』
「随分とアバウトな回答だな。お前、自分の中で考えがまとまっていないんだろ。無理矢理私に合わせなくていい」

『合わせてなどいない。《破壊》をするお前のような奴は最低だ。お前にそんな事をする権利はあるのか？どうなんだよ』

「権利？くだらない。誰にその権利を承認する権威が与えられているというんだ。お前、《闇》をちゃんと理解出来ているのか？いや、そうであればこんなくだらない質問はしない筈だ。《闇》は表の《世界》の法など届かない場所で、権利などが通用する場所じゃない。常識など無いだろう」

『五月蠅いっ。お前はどんな権威を与えられてこういう事をする？
「権威とか権利とかは無関係だ。お前、私が言った事を聞いていなかったのか？それに固執するのは利口なやり方じゃない。《闇》と
いうのはそれが殆ど通用しない。私はそんなものの元に《破壊》し
ている訳じゃないしな』

『本当に理解に苦しむな。じゃあ、何の元にお前は《破壊》をして
いるんだ？』

「愚問だな。お前、少しは考えて喋れよ。《破壊》は私にとって唯
一の武器であり、只一つの抵抗する手段だ。お前に『武器』はない
のか？あるいは一々他人の武器にいちやもんを付けるのか？攻撃す
る手段は様々だろう。それをお前に否定される筋合いはない」

『自分を正当化するなよ』

「そういうつもりはないけどな。私は自分が正しいと主張している
訳じゃない。私がどう言おうと、私の《敵》になる奴はなるしな。
正しいか誤りか。それは問うに足りない質問だと私は思うがな」

『そういう奴なのか、お前は』

「これだけの会話で理解される程自分が単純だとは思っていないん
だけどな。お前まるで私を分かったみたいと言っているが……な
んだ、お前。一体何が言いたい？何が目的だ？過去に私に《破壊》
された誰かの《復讐》でもしに來たのか？」

『そうだ。お前は生かしておくにはあまりに危険すぎる。害しか生
み出さない。私はお前に《復讐》する。――の《復讐》を』

「勝手にしろ。一つ言うが、お前ごときに私は殺せない。私の『言
の葉』に乗せられる奴が、私に勝利出来る筈などないのだからな」

「……………疲れた……………」

目が覚めた。

細かい装飾の施された白い天井を見上げて、暫く思考停止。眠っていたというのに、身体中の体力を全て絞り取られたような気分だ。脳が暫く強制的に停止させられ、自分が保健室でベッドに眠っていると思ひ出したのは目を覚まして暫く経ってからの事だった。

(……………)

ベッドの横にある棚の上に置いてある携帯電話の待受画面で時間を確かめる。

頭痛と倦怠感があまりにも酷くて保健室に来たのだが、本日最後の授業二時間丸々眠ってしまったようだ。もうホームルームも終わってしまったている時間だ。

しかしその間もしょっちゅう目が覚めたのであまり寝た気がしない。変な夢を見たせいもあって、逆に疲れた感じがする。私は静かな空間の中横になりながらゆっくり思考を再開させ始めた。

この体調不良も、このムカつく夢もほぼ確実に奴のせいだ。しかし、声も知らないのによく夢の中で声を再現出来たものだ。交わされた会話も、今まで相対した《敵》の台詞を凝縮して抜粋した感じだった。なんだか妙にリアルで、身に迫るものだった。

それは全て奴の。

ファーストコンタクトから、奴は何度となく私の視界と意識の中に入り込んで来た。私の神経をすり減らそうとしているのか、圧力をかけようとしているのか、ストレスを与えているつもりなのか。直接話す事も相対する事も今のところないが、確実にあいつは私に近付いて来ている。地道で地味な嫌がらせみたいな感じだろうか。

(……………まあ、あり得ないくらいに慎重な奴なんだろうな。面倒くさい奴だな、マジで)

やるならさっさと来てほしいのだが。一体何に対して慎重なんだか。別に私の神経はあいつごときにすり減る訳がないんだし、只の

時間稼ぎもどきだ。そう、実際は時間稼ぎにすらなっていない。

そんな事を考えていると、私が居る小部屋のドアがノックされた。

「嘉一。入るよ」

そんな台詞とほぼ同時に入ってきたのは、保健医の銀斧ぎんおのねがい願だった。オレンジ色の髪と瞳を持つ中性的な教師で、私の担任と親友らしく、いつもスマイリーな人だ。

「気分どう？ ちょっとは楽になった？」

「さっきよりはだいぶ」

溜め息をついてゆっくり起き上がる。相変わらず頭は重いが、少し気分はよくなっているようだ。私の場合倦怠感や疲労感などが完全に抜ける事はないので、まあこんなものだろう。

願はにっこり微笑む。

「まだだるいかな。応接間でティーでも飲んで。入れてあげるよ」

そう促されるまま私は立ち上がり、ゆっくり小部屋を出た。保健室内の廊下を通ってリビングのようになってる応接間（ここは一応保健室だろ？）へ入る。この河柳学園の保健室は滅茶苦茶広く、ベッドのある小部屋がいくつもあり、応接間や保健医の書斎、キッチンからなる。実際はもつとあるかもしれないが私はこれだけしか知らない。しかしこれだけでも十分広い。

「あ、天星織おはよう。気分はどう？」

ながれぼしりゅうせい

と、応接間のソファに座っていた流星流星が声をかけてきた。生徒会顧問で数学教師。この人と担任と願いつも三人でつるんでいる。柔らかい笑顔は、この学園一のモテる教師というのを裏付けるようだった（私には関係ない事だが）。

「…………一応は」

溜め息について髪をかき上げ、流星の隣の空いているスペースに腰を下ろす。すぐに願が温かいカモミール&ローズヒップのティーを入れてくれた。洒落たティーカップは大人な雰囲気醸し出していた。

うーん、此処は喫茶店なのか？

「あれだね、嘉の頭痛はストレス性っていうか、疲労から来てる感じだね。ずっとすっきりしないのを引き摺っている感じかな」

向かい側のソファにストンと腰を下ろして願は口を開いた。オレンジ色の瞳が私を心配している。

「根本的なものは多分それだと思うんだ。本当はずっとキツイんじゃない？頭痛だったり疲労感だったり倦怠感だったり」

「そうですね」

取り敢えずそう返して紅茶を喉に流し込む。温かいティーはゆっくりじんわりと胸の中で広がった。緊張の糸をほぐしていくようだ。思わず深く息を吐く。

隣の流星も、ティーポットを片手に会話に加わってきた。

「^{てつる}哲留も心配してたよ。最近特に疲れてる感じがするって。天星織、何も言わないから。訊いてもあまり答ええないし」

「……………担任が？」

「うん。哲留、よく見てるよ。自分の生徒の事。クールだからそんな風に見られないけど、かなり生徒思いなんだよ」

そんな事を言っただけでこり微笑む流星。私は視線をティーカップに向けてその言葉を聞いていた。

なんだか二人の言葉を聞いていると、私が特殊な《世界》に居るのをなんとなくが気付いているような感じがした。気付いているというよりも、第六感で感じているとでもいうのだろうか。

はつきりは分からないけど。

とその時、保健室の入り口のドアが開いた。中に居る三人で一斉にそこに目を向ける。

流星が入って来た人物に、にっこりと微笑んだ。

「あ、哲留。遅かったね」

「少し用があつてな」

入って来たのは、噂の担任・^{りんあんが}臨安我哲留だった。すらりと長身で、スタイリッシュなスーツをさらりと着こなしている。二十四歳にしてこの学園で絶大な権限を持つ教師で、現場の教師を統括するとい

うポストについているらしい。理事長に絶大な信頼を寄せられ、校長より権力があるとか。生徒からも慕われるのと同じくらい恐れられているという事も聞いた事がある。

担任は相変わらずのポーカーフェイスで私達を見回してドアを閉める。何も言わず願の隣に座った。

そして漆黒の瞳が私を見つめる。

「ホームルームにも来なかったから此処に居るだろうと思ってな。まだ顔色が悪いな。まあ、嘉の顔色がいいというのは見た事ないがな」

「……………」

放っておいてくれ。私は心の中で突っ込む。

担任は飄々とそんな事を言って、願が入れたティーを飲んだ。まるで何もかもを見透かしているようなオーラすら放っている。

流星や願はとにかく、この人は知っているかもしれない。《闇》の世界の存在やそこに私が居る事を。

「で」

ティーから視線を外し再び私に目を向けて担任は口を開いた。

「少しは良くなったか？」

「……………はい」

「そうか」

頷いて再びティーを喉に流す担任。その表情からは感情はよく読み取れない。その落ち着いたオーラは新人教師を遥かに凌駕している。この人、年齢を詐称しているんじゃないだろうか？と思う程だ。

「あ、ちよっと待ってて」

そこで願が立ち上がった。奥の部屋に入ってなにやらごそそしている。何をしているのだろうか？流星はニコニコして願を待っている。

暫くして願が戻って来た。その手にはトレイ。

「はい、瀬斗^{せと}から差し入れがあったんだ」

そう言って一人一人の前に置いたのは、洒落たマロン・モンブラ

ンだった。見た事がある。これは『indigo』のモンブラン、しかも一日五個限定のプレミアムモンブランだ。満月がしょっちゅう『indigo』の話をするので覚えてしまった。

「やった。すごいね。瀬斗にお礼言わなきゃな」

流星はそう言って皿を手前に寄せた。担任も黙ってケーキに手を伸ばす。私もそれに倣った。

実は食べてみたかったりした。

願もソファの担任の隣に腰を下ろした。モンブランの上に乗るマロンを口に放り込み、口を開いた。

「さっき『indigo』から届いたんだ。本当は予約出来ないんだけど、特別にやってくれてね。瀬斗が頼んだみたい」

「人は見た目によらず、て言葉がぴったりなんだよね。あの子。天星織は知ってる？ 護代瀬斗ごだい」

不意に流星が私に話を振ってきた。私は首を横に振る。

流星はモンブランを食べ進めながら続ける。

「同じ一年だよ。体育科でね、陸上部」

「陸上部……………」

陸上部といえば、満月の双子の姉妹・夜明の旦那も陸上部だった気がする。

私の呟きに流星は頷く。

「そ。毎朝走ってるだろ？ 多分顔見たら分かると思う。すごくクールで真面目な生徒でね、冷たそうなんだけど優しいんだ。彼自身は全くの健康体だけど、よく保健室にお茶しに来るんだよ。願のお茶に付き合いに」

「そうなんだ」

流星の台詞に、にっこりと願。なんだか女の子みたいに見えるのは私だけだろうか？

「それにしても」

流星は前置きのよう言い、静かに私達の会話を聞いていた担任に目を向けた。

「最近哲留は忙しそうだね。人事関係で何かあるの？」

「ああ。ちよつとまたこれから理事長のところに行かないとならない。五時の約束なんだが」

担任は腕時計に視線を落として、願にティーのおかわりを頼んだ。私も壁にかかる時計に目をやる。五時まではあと半時間はある。ギリギリまで此処に居るつもりのようなのだ。

「……………」

それにしても、この三人組の中に居るのはなんだか違和感を感じる。変な感じだ。さっさと図書室にでも行ってしまうおう。残っているモンブランを口に入れる。

「じゃ、私は行きますので」

私はそう言って立ち上がった。大丈夫？と訊く願に頷いてドアの方に向かう。

「嘉」

そんな私の背中に、担任が声をかけた。私は立ち止まり、振り返る。そこには、相変わらずのポーカーフェイス。

「あまり無理するな。キツイ時は休めばいい。大事な時に備えて」

そして、全て把握しているかのような台詞。言いたい事を凝縮した言葉。その瞳の奥に見えるものは。

多分この人は。

「……………はい」

私は答えて保健室をあとにした。

「……………ふう」

ドアを閉じてもたれる。起きたばかりだというのになんだか疲れてしまった。体力がないのかなんなのか。全く使えない身体だ。

只、あのティーとケーキは有り難かった。なんというか、少し氣力を回復できた、そんな感じがする。束の間の休息ではあるけど。

「お、嘉。グッドなタイミング」

その時満月が向こう側から小走りしながら近付いてきた。私の前でピタリと止まり、ニンマリと唇だけ笑わせている。

「丁度迎えに来たんだ。はい、鞆。ラッシュが過ぎるまで図書室にいるでしょ？……あれ、気分悪い？顔色相当悪いけど。血の気がないよ」

「…………心配する程のものじゃない。平気だ」

覗き込む満月から逃げるように私は歩き出した。満月は早足で私の隣に並ぶ。

「気を付けてね。あまり無理しないでよ？今から終焉を迎えなきゃいけないんだから、今はパワーためとかなきゃ」

「担任にも同じような事言われた。自分の限界くらいわきまえているつもりなだけだな」

「あらら、哲留さんにも言われたの」

「そんなにヒドイのか？全く」

「しょうがないよ。だって、相当悪そうだもん」

苦笑いする満月。そして不意に笑みを消し、「そういえば」と話題を変える。

「ついさっきなんだけど、またあいつ教室覗きに来てたよ。嘉探してたみたいだけど、いなかったからか消えちゃった。そのまま嘉探しに行ったのかと思ったんだけど、じゃなかったんだね」

「らしいな」

「でもあいつ、挙動不審だよ。ストーカーで訴えよ」

「…………まだ何もされてないが」

「そっか。ま、そういうものじゃないしね。でもね、殺気がハンパなく強くなったよ。本当にそろそろだって。…………あ、ちよっと待ってね」

言い、満月はポケットから震える携帯を取り出した。着信が入ったようだ、一步離れて耳に当てる。

「はい。…………え？なに？」

満月は不意に表情を消し、驚いたように声をもらして立ち止まった。その目は見開かれている。

「……………分かった、今行く」

満月は終話ボタンを押して私に目を向けた。そして怯えにも似た声色で意外な言葉を晒した。

「……………夜明が倒れたって」

浦風夜明、旧姓深夜夜明。うらかぜ よあけ満月の双子の姉妹で元《傍観者》。色々あって数ヶ月前に浦風家の長男と結婚したらしい。ちなみに旦那も河柳学園の三年生だ。

満月曰く『色々あって』という事で、あまり上手くはいっていないらしいという事は前にも少し聞いていた。今回の事もそれに関係しているのだろうか、と思いつつ私は満月の強い要望と一緒に青柳病院に向かった。せいろゅう

この青柳病院は財閥の頂点に君臨する『二帝』の一つ、青柳家の病院で、滅茶苦茶広い。迷子になってしまいうだ。どんな大きな大学病院その他の病院をも凌駕する設備や技術を持つ、最先端の病院。案内係に案内してもらい、私達は夜明の居る場所に辿り着いた。案内された先のナースセンターの前に、見慣れた人影を見付けた。満月は走ってその人物の元に行く。

「兄ちゃん、夜明は」

満月はすぐに夜明の状態をその人物に尋ねた。その人は満月を落ち着けるようにゆっくり頷いた。

「大丈夫だ、心配ない」

静かな声で言う。

浦風満夜、旧姓深夜満夜。うらかぜ みちや満月の兄で《断罪者》《欺きを欺く螺旋》と呼ばれる、河柳学園の三年生。彼も夜明と同時期に、浦風家の長女と結婚し入り婿になっている。こっちも純粹に結婚した訳じゃないらしい。因みに先月の《不穩》で少し関わった。

「さっき出先から帰ってきてすぐ倒れてな。精神的なストレスと過労が原因らしい。疲労回復するまで暫く入院するみたいだ。休んで

いれば問題はない」

満夜は説明しながら私達を病室に案内した。ホテルのような長い廊下をゆっくり歩く。そしてだいぶ進んだ奥の方の個室のドアの前で止まる。壁のボタンを押すとドアは静かにスライドした。

ホテルの一室のような病室。そのベッドの上で夜明は眠っていた。約一ヶ月振りに見るが、幾分やつれているようにも見える。何より、顔に血の気がない。死人に近い表情だ。相当なストレスを受けていたのだろうと推測される。

「……………」

と、ベッドの横に見慣れない人物が立っていた。ストレートのシヤギーの入った漆黒の髪、ややつり目気味の二重。夜明に向けていた目を入れて来た私達に向ける。

誰？

そんな私の疑問を読み取ったのだろう、満夜はその人物の隣に立つと私に目を向けた。

「妻の風綾だ」
ふうりん

満夜が短く私に紹介した。彼女は軽く頭を下げる。

成る程、この人物が満夜の妻で、夜明の旦那の双子の妹という事になるわけだ。

「風雅は今向かっている。さっき連絡を入れた」

満夜が誰にともなく言った。

風雅は陸上部の部員だと以前聞いた。だから時間的に今はまだ部活中の筈だ。結構ハードな練習らしいが、こういう場合は抜けてくれるのだろう。

思ひ空間。

一瞬の間が生じた、次の瞬間。

「悪いね、満月」

不意に風綾が呟くように言った。その視線は夜明に固定されている。唇を噛み締めて少し間を置き再び口を開いた。

「夜明が倒れたのは多分風雅のせいなんだと思う。あたしもちゃん

とフォローしてあげられなくてね」

「風綾さんのせいじゃないですよ。夜明は風綾さんは仲良くしてくれるって、よく言っているから」

「いや、あたしはずっと夜明を見ているから。……風雅も夜明を嫌っている訳じゃないんだよ。あいつ、基本的に人付き合い自体が下手だから。いや、あいつの肩を持っている訳じゃないんだけどね。どうあろうと夜明が倒れているのは事実だから」

「……………」

満月は黙って俯いた。風綾は視線を床に這わせた。

「夜明は風雅の為によくやってくれているよ。風雅が応えなくても一生懸命ね。だからあとは風雅がそれを理解するまで待つしかないのかな。時間がかかるのかもしれない」

「……………」

満月はそれを黙って聞いていた。

それから暫くして私と満月は病室から出、少し離れた談話室に向かった。そのソファに腰掛けて満月は疲れたように溜め息をつく。そしてぐったりとソファに身を委ね、何かを思い出すような口調でゆっくりと言葉を並べ始めた。

「やっぱりね、恋愛結婚じゃないし、策略結婚みたいなものだから、上手く行かないよね。しかも二人ともまだ高校生だしね。…………無理矢理にでもあたしが代わりになるべきだったのかな」

「……………」

「浦風家は財界の中で上・中で分かれる中流階級の家でね、風雅義兄さんはその跡継ぎなんだ。それで色々大変みたい。環境も今までと全く違うし、夜明は《傍観者》じゃなくなってから、結構神経質になったから」

「財界の家だったら余計神経使うだろうな。ある意味別世界だから

な」

しかも全く今まで知らなかった人達と暮らさなきゃならないのだ。その上曰く付きの結婚をして。満夜と違って、夜明は何事にも首尾良く対処出来る程の精神力を持ち合わせていない。まだそれ程精神力が安定している訳ではないのだ。

満月はテーブルにぼうつと視線を置き再び溜め息をついた。

「風綾さんは本当によくやってくれてるよ。満夜兄ちゃんともまあまあ上手くやっているし、夜明とも仲良くしてくれているしね。結構友達みたいでいい感じみたいだし。だけどやっぱりそれだけじゃ駄目なんだよ。その一生懸命に、風雅義兄さんが応えなきゃ、意味がない」

そんな単純な話でもないだろうし、それが出来るなら既にやっている筈だ。それに私は夜明でも風雅でもない。そこには私には分からない感情が関係している。

夜明は。

私は俯く満月に問い掛けた。

「…………旦那の事、好きなのか？」

「夜明？…………分かんない。でも多分そうだと思うよ。他人の為にあれだけ夜明が奮闘しているんだもん」

満月は沈んだ表情のまま返してきた。目が虚ろになっている。普段の満月とあまりにギャップがあって私は少し意外に思っていた。

こんな満月もいるんだな、と。

そして思う。

やはり『誰かの為に』という生き方はあまり好きにはなれないと。その時。

「…………風雅義兄さん」

丁度顔を上げて廊下の向こうに何気なく視線を向けたその時、おもむろに満月は口の中で呟いた。私はその満月の視線の先に目を這わせる。そこには人。

(…………こいつが)

夜明の旦那、浦風風雅。

うらかぜ ふうが

涼しげなストレートの短い髪、細身の身体。やはり部活中だったようだ、ジャージ姿のままだ。特にこれといった表情の無い目。なんというか、取っ付きにくい雰囲気纏っている。朝練の陸上部の部員の中にいたようないなかったような。颯爽と二人の男を従えてこちらに歩いてきた。

「……………」

風雅は数歩先で立ち止まり、無表情のまま満月に目を向けてきた。どうやら夜明の部屋の場所を訊いているようだ。

それを察知した満月は立ち上がり、風雅に近付いた。夜明の病室を告げると風雅は小さく頷き、変わらないポーカークフェイスで病室に向かった。私は何気なくその後ろ姿を見送る。

満月は風雅の背中から視線を外し、戻ってソファに腰を落とした。そしてゆっくりと言葉を晒した。

「さっき聞いたんだけど、義兄さん、来るの渋っていたんだって。命に別状ないなら大丈夫なんじゃないかって。風綾義姉さんと部員の人が押して押して、やっと向かう事になったみたい。義兄さんにとって夜明はきつと、どうでもいい存在なんだ」

歯を食い縛り、感情をぐっと堪える満月。今の満月は《傍観者》ではない。その表情は、夜明を大切にしてほしいという切なる思いが滲み出ているものだった。

私は満月の言葉を耳に入れながら風雅の後ろ姿に視線を向けていた。ゆっくりと、そして颯爽と歩く風雅。その後ろ姿から、私は満月が見ているのとは違う風雅の様子を感じ取っていた。

「……………なあ、私はあんたが思っている程あいつは冷たくないと思うぜ」

そのままそれを言葉にする。

満月は、え？と顔を上げた。思いにもよらない台詞だったのだろう、今にも崩れそうな表情はとても固い。

私は一つ小さく息を吐き出し、腕を組んだ。

「あの様子からしたら、学校から直行だろ？この時間ならまだ部活中だろうしな。そんなに心配はしていないとしても、一応来てるじゃないか。命に別状はなくても来てるだろ。本当に冷たい奴なら来ない筈だ。本当に大切にしていないなら、何を言われたってわざわざ来たりしない。あんたが思う程ぞんざいな扱いを受けている訳じゃないんじゃないのか？」

愛されるというところまで行っていないけども、妻だと思われていなくても。今のところ、存在の否定はされていない。風雅の意識の中から締め出され退けられている訳ではない。

夜明が大きなストレスを感じているのに変わりはないが、満月が思う程ひどい扱いを受けている訳でもない。

大袈裟でなく、今は風雅の為に生きている夜明。ただ、それを風雅が理解するまでもう少し待たなければならぬけれど。

「……そうだといけれど」

満月は曇った表情のまま、只小さく呟いた。

と、そこで満夜と風綾が談話室に入って来た。風雅と入れ替えて出て来たのだろうか。

「ちょっと座るよ」

風綾は言い、満月の隣に腰掛けた。満夜はその斜め向かいに腰を下ろす。

そして沈黙。私は沈黙に慣れているが、この沈黙は重い。それぞれがそれぞれの胸につかえる感情を抱えてそれが蠢いている。そしてその根本は繋がっている。あの満夜のオーラですら、人間の感情を厚く纏って。

夜明と風雅の事を心配して。

どうにかならないかと模索して。

なんだかこの場に私がいるのは場違いな感じがするけど。

そんな重い沈黙が暫く続き、それを切り裂くように風綾が口を開いた。

「一応風雅に少し強く言っておいたよ。もう少し考えてくれって。」

少しは考えてくれると思う。珍しく素直に『分かった』って言ったから」

「……………そうですか」

満月は小さな声で返し、俯いたままだった。下唇を噛みしめて、何度か頷く。重くのし掛かる自らの感情をなんとか払拭しようとしているようだった。

そしてその場の雰囲気を変えようとするように話題を変えた。

「でも良かったです、風綾義姉さんがいてくれて。夜明もあたしもありがとうございます。……………そういえば風綾さん、今日部活は」

「休学中なんだよ。来年から通信科にするつもり」

「え、どうしてですか？」

「うん？妊娠中だから」

「ええ！？」

突然の『妊娠』宣言に、後ろにぶっ飛んでしまいそうなくらい驚き、満月は満夜に目を向けた。実際身体はソファにのけ反るようになっていた。満夜は無言で満月から視線を外し、風綾は苦笑した。まさかまさかだろう。私もそれは驚いていた。全くの予想外だ。こういう展開もありなのか、という感じだ。

満月は暫く口を開いたままフリーズし、ようやく戻ってきた。あり得ないというような口調で満夜に言葉を投げる。

「そんなめでたい事、どうして黙ってたの？」

「黙っていたつもりはない」

「言いにくかったんだ？」

「タイミングが掴めなかった」

肩を竦めて溜め息と共に返す満夜。ずっと視線は外したままだ。無表情は変わらないが、照れているか恥ずかしがっているようにも見える。

満月は風綾に目を向けた。

「わぁ、おめでとうございます！」

「やだな、恥ずかしいって」

ペコリと頭を下げた満月に苦笑し、風綾は小さく手を振った。満月はまだまだ追求する。

「女の子？男の子？」

「まだ内緒。満夜は生まれてからの楽しみにするんだってさ」

ちらっと満夜を窺う風綾。満夜は知らん顔を決め込み、聞かない振りをしている。いじられるのは嫌いなようだ。

そしてこの話は終わりというように立ち上がった。

「そろそろ解散しようか。満月、今晚付き添い出来るか？風雅も含めて俺達はちよつと夜は無理なんだ」

「大丈夫だよ」

「なら頼む。八時に来てくれ」

「分かった」

頷く満月。

すると不意に満夜は満月をじっと見つめた。満月の心の内を見透かしているような視線。

そして波のない口調で。

「夜明はそんなに心配しなくてもいい。お前も分かっているだろう」

「うん。夜明が重荷にならない程度に、でしょ」

「ああ。あいつも過度に心配されたくないだろうしな」

「うん、分かってる。……………分かってる」

自分に言い聞かせるように繰り返し、満月は何度も頷いた。自分の中の感情をコントロールしようとしているのが読み取れる仕草だった。

「……………」

私はそんなやりとりを只黙って聞いていた。

私達兄弟とは全く違うな。そう思いながら。

【約束】（前書き）

リスク
危険を負っても

『自分らしく生きたい』
そう思った

【約束】

「……………」

私はぼうつと、中庭の木陰のベンチで紅茶を飲んでいた。最近の図書室より此処がお気に入りだった。指定席になりつつあるベンチが丁度日だまりになっていて、なんだか良い感じなのだ。とても静かで落ち着く。最近校内での独りになれる時間が少ないので、久しぶりの『独り』に安堵の溜め息をついた。

満月は今日休んでいる。夜付き添いをするという事だから、多分そのまま夜明の傍に居るのだろう。連絡はないが、昨日の様子を見ればそう考えるのが妥当だし、一晩中付き添いしていたら今日学校に出て来るのはまず無理だろう。

(……………ふう)

もう一度溜め息をついて、葉の間から零れる日の光を、目を細めて見上げる。

満月でもあやって姉妹を心配するんだと発見した。《同類》の新たな一面を。それなりに仲がいい事は知っていたが、これ程とは思わなかった。『一般』では当たり前なのかもしれないが、それは私と満月の決定的な違いを証明するようだった。

家族、という単位。

兄弟、という単位。

その単位は私にとって何の意味も持たない。血が繋がっているようがいまいが、自分でない他人は他人。敢えて関わる事も、無理に知ろうと思う事も、今まで一度もない。そんな必要を全く感じなかったし、それが異常だと思った事もない。それが私達の『普通』だ。

それが私達のあり方だった。正解や間違いではなく、解答はそれしかなかった。私の中に答えはそれ以外なかった。あるいはそれだけだと思い込んでいた。そう、それ以前の問題だったのだ。

衝撃。ある意味で満月の兄弟達は私に静かに衝撃を与えた。『兄弟』の意味を改めて考えさせるように、私の固定観念を覆そうとするように。

血を分けているとは一体どういう事なのか。
何故他人でありながらも他人ではないのか。

それを切々と私に問い掛けた。もう一度考え直すようにと促すように。別の答えに導くように。

「……………ふう」

それは少しずつ私の意識を変えている。私の潜在意識は『兄弟』を少しずつ意識し始めている。意識の中にそれを織り込み始めている。そしてそれを拒否しない私がいた。

知っていいこうとする私が。

それを願う事すらしようとする私が。

(まあいい)

私はそれを受け入れて紅茶で喉を潤した。

今は急ぐ必要はない。私が私であり続けるなら、それは必ず答えを出すだろう。少しずつでも、ゆっくりでも。

私が《傍観者》であり続ける事が出来るのであれば、それを探しているこ。

そう小さく溜め息をついた時だった。

「よお、嘉」

私を呼ぶ低い声がした。こんな風に私を呼ぶ人間は学園内にそう多くない。私は目だけその人物に向けた。そして口の中で呟く。

「《制裁者》」

私の視線の先に立っていたのは、ひとりもん ひとり独門氷鳥。

主に《制裁者》として《闇》で名を馳せている同い年。財閥七強の一つ・柳義家りゅうぎぎの分家、独門家の長男だ。満月の従兄弟にあたる。短く立たせた色素の薄い髪、細い一重、不敵な笑み。シャツの胸には、財閥七強の人間である事を証しするバッジが輝いていた。

ちなみに、こいつとはいわゆる幼馴染みというヤツだ。エスカレ

ター校の河柳学園で、物心ついた頃には互いの存在を知っていた。親しい訳ではないが、先月同じ《闇》の住人として同じ《不穩》に関わったばかりだった。

氷鳥はニヤリと唇の片方だけ笑わせて、私の座るベンチの反対の端に腰を下ろした。ウェイターの持ってきた紅茶を受け取って私に目を向ける。

「先月の《不穩》以来だな。どうだ、肩は治ったか？」

「ああ」

「そうか。………そういえば昨日、夜明のところ行ってくれたらしいな」

「ああ………行っただけだけど」

「満月、なかなか崩れないけど、兄弟の事になったら急に脆くなったりするんだよ。嘉もそれは感じただろ？だからお前居てくれて良かったよ。それだけである程度抑制効くからな」

そう言って氷鳥は紅茶を口にした。足を組んで遠くをぼんやりした表情で見つめている。流れるのは沈黙。私は話題を探す事もなく只座って空を眺めていた。

空は快晴からは程遠い、八分くらい厚い雲に覆われた曇り。ゆっくりと重く流れる雲は、薄い水色の空を晒しては隠していく。

本当に静かだ。

このまま只時間が過ぎていけばいい。私はそんな事をなんとなく思っていた。『何もない人生』なんてあり得ないし、願いもしないでも、僅かでもいい、そういう一瞬があっただけいい。何もかもを忘れられるような、無視出来るような時間があったっていい筈だ。

どうせ《不穩》は放っておいてくれないのだから。そんな一瞬があっても。

ぼんやり考える私と同じベンチに腰掛ける氷鳥の間に、一つ風が過ぎて行った。止まる時間を流すように木の枝や葉を揺らしながら。只自然の声が唄う。

そうやって暫く沈黙した後。

黙っていた氷鳥が口を開いた。

「最近、お前の周りをウロウロしている奴が居るんだ」
そして奴の事に触れる。

「ああ………知ってる」

「心当たりは？」

「ありすぎてどれなんだか………」

「はは」

曖昧に返した私に、氷鳥は苦笑いした。『相変わらず悠長だな』と溜め息。私は肩を竦めてティーカップに唇をつけた。

無差別に攻撃してくる《敵》なのか、私に恨みを持つ《復讐者》なのか。そのどちらかだ。実際相対した訳ではないが、恐らく後者の方だろうと私は予想していた。

あのオーラは、そういう感情を放っていた。何か私に対して怨みを抱いている、そういう強い感情。只対象にしているというのとは違う雰囲気は奴からは放たれていた。

（一体どれの《復讐》なんだか）

思い当たる事が多すぎてどの事なんだか検討もつかない。『これこれの《復讐》をしに来た』と言われても、果たしてその昔の《不穏》を覚えているかと訊かれれば、覚えていない可能性が高い。実際それらしきものを今思い出そうとしても無理だった。

私の《破壊》は、数えられるようなものではないから。

と、携帯が振動した。いつもの月姫からの電話だろうか？私はポケットからそれを取り出す。

「……………」

画面に点滅する番号は『非通知』。かなり怪しい。たまに妃七が悪戯をしたりするのでそれかもしれないが、そういうものではないと私の第六感が言っている。

「うーん……………」

どうしようか迷いに迷いに迷い、結局出る事にした。

「……………」

通話ボタンを押して耳に当てる。無言のまま電話の向こう側の反応を待つ。

向こう側は、何かよく分からないノイズが入っていた。人の声なのか、何かの音なのか、それすら判断しかねる雑音。はっきりしたものは聞こえてこない。

しかし異様な雰囲気だけは伝わってきた。それは背筋に悪寒を走らせるような、吐き出したくなるような、そういうムカムカするものだった。

まるでそいつが目の前にいるように。

そこまでリアルに感じられる程のオーラ。なんというか、執着というより粘着という感じだ。そういうべったりした雰囲気が電話越しに『見えた』。

「……………」

『……………』

私は黙ってその沈黙に付き合った。

こうやって私を追い込み、潰そうというのか？

甘いんだよ。

そう、電話を切ろうとした時

『……………、……………』

電話の向こう側に微かな反応があった。私は取り敢えず終話ボタンを押そうとした指を離す。

再びノイズが大きくなり、そして次の瞬間

『……………カナラズ、ツブス』

そのノイズにかき消されるか否かくらいの声色で、しかしはっきりとそう言ったのが聞こえた。男か女か、子供か大人か、それすら判断出来ない声色だったが、言葉だけははっきり伝わった。

必ず、潰す。

それは宣言。私に対する宣戦布告だ。

そして僅かな沈黙を置き、電話はプツリと切れた。

「……………」

何故私の番号を知っていたのかとか、自分の言いたい事だけ言いやがって畜生とか、言いたい事は幾つかある。しかし言ったってどうにもならないので私はそれを飲み込み、携帯をポケットにしまった。

というより、あいつが私を潰そうとしている事はもう分かっているのだ。それなのにここまで直接相対するのを伸ばすのは何故なのだろう。私の出鼻をくじこうとしているのか？私に逃げる時間を与えているのか？

いずれにせよ、私には大してプラスにもマイナスにもなっていないような気がする。

(……さて)

私は考える。

恐らく、今回の《不穩》は何かに対する《復讐》で間違いないだろう。基本、《復讐》というのは延々と続くものだ。《復讐》が《復讐》を呼び、半永久的に繰り返されていく。それを終わらせる方法は一つしかない。

面倒くさい事はなるべく早く終わらせたい。火種は小さいうちに消すのが効率良い賢い行動と言えよう。

その為には、奴の情報が要る。そして丁度隣に、こいつがいる。

私は口を開いた。

「ちょっと頼んでいいか」

「お？おう」

突然そう切り出した私に、少し驚いたように返す氷鳥。私は、驚き私の言葉を待つ氷鳥に目を向ける。

「あんたの信頼する《情報屋》に奴を調べさせてくれないか」

「……………」

一瞬氷鳥は固まった。私から頼み事をされた事に対する驚き。まさか私がそういう事を依頼するとは思っていなかったのだろう。

しかしこれが早く終わらせる為の最短の方法だ。私には《情報屋》の知り合いはいない。氷鳥にはよく情報を仕入れてくる、信頼出

来る《情報屋》が居ると聞いている。

出来るなら信頼出来る情報を入れたいし。

やがて氷鳥はニヤリとシニカルに笑った。

「いいぜ。俺がいつも仕入れてる《情報屋》知っているか？」

「いや」

私が首を横に振ると、氷鳥は話し始めた。

「一応《情報》の出どころは知っていた方が安心だろ？ その《情報屋》、《侵略》^{クラッカー}って呼ばれてて、名前は逆誓悟^{さかさせいご}っていう」

「……逆」

「ああ。あの逆だ」

頷く氷鳥の顔を見つめて私は記憶を引っ張り出した。

逆。財閥最上位に君臨する二帝の一つ。絶対的な権力を持ち財界を牛耳るあの逆一族。二帝のもう一つ、青柳財閥の兄貴分らしいから、実質上権力的には一番かもしれない。

なんだか頭がパンクしてしまいそうだ。私には分からない世界なので、考え過ぎると気分が悪くなりそうだ。

氷鳥は続ける。

「逆本家の末裔で俺達と同年。ちょっと特殊な『性質』があつてね。独りで外出が出来ないんだ。自閉症とかそういうものとは違うが。先天性の脅迫観念に近いらしい。そういう”ハンディ”の代わりではないけど、史上最悪のハッカー・クラッカーって言われる腕を持つてる。あいつの異名にもそれは表れている。回線の繋がれた《世界》は全てあいつのものっていうくらいだ。誓悟の元に集まらない情報はないと言われている。どの《情報屋》より信頼出来るし
確実だ」

「……成る程ね」

「ちなみに、《俊光》^{スピード}と呼ばれる北斗七星と北斗奏が一緒に《仕事》をしている。奴らは兄妹で、戦闘系だな。回線がないいわゆる『アナログ』のエリアの《情報》を集める。だからどの角度からの情報も扱ってる」

「死角はないって感じだな」

私は溜め息をついて目を閉じた。

その《情報屋》がどんな相手でも信頼するに足る。私はそう信じていた。氷鳥が信頼しているのだ、疑う必要は全くない。

「お前が信頼している人間が居るっていうのも珍しいよな」

「ああ。少ないけどな。俺が信頼している奴の情報だ。間違いない」私の率直な言葉に笑って返す氷鳥。そして少し表情を引き締めて口を開いた。そして予想外の事を探ねてきた。

「どうせなら、今から誓悟の所に行ってみるか？」

「……………今から？」

「ああ。あいつは滅多に外出はしないし、アポ無しでも基本時間を作ってくれる。俺が居れば嘉にもすぐ会ってくれる筈だ。それに、一応自分で《情報》を入れる方がいいだろ？他人から又聞きするよりは」

「……………」

私は少し考える。

氷鳥の言う事も一理ある。大した《敵》ではなさそうだが、《情報》を入れないよりは入れた方がいいに決まっている。そうすればある程度対応出来る。全くの無知よりは上手く。

たまには直接《情報屋》から聞いてもいいかもしれない。

「じゃあそうする」

私は答え、氷鳥を見上げるように目を上げた。すると氷鳥は何故か安心したようにふっと笑んだ。

「よし、じゃあ向かうか」

「……………ん、ここ」

氷鳥を迎えに来た車で逆邸に向かうその窓から見覚えのある建物を見つけ、私は呟いた。堂々とそびえ立つそれは、夜明が入院している青柳病院だった。ついでに夜明の見舞いに来たのだろうか？そう思いながら氷鳥を見やると氷鳥は薄く笑った。

「この病院の北側に逆邸があるんだ。丁度建物の向こう側になるな。敷地は別だけど、地下の渡り廊下で繋がってる」

「何故？」

「青柳病院の最高権威、青柳一義いちぎが誓悟に雇われているから。一義専用の渡り廊下で、何かあったらそれで逆邸に向かうんだ。因みに、横にスライドするエレベーターでな」

「はあ」

「いつも角度的に見えないもんな、逆邸は。あの先曲がったらもう見える」

そう言って氷鳥は前に顔を向けた。私も同じ場所に視線を向けて車の行く先に目をやる。

車が前のカーブを曲がった。

「……………うげ」

私は思わずそう呟いた。

デカイ。

でかいってものじゃない。確実に病院よりでかい。まるで要塞だ。大きすぎて建物の全体が見えないくらいだ。

氷鳥はニヤリと笑んだ。

「因みに、両親は別だぜ。これはあいつの家なんだ」

「……………あり得ない」

財閥の家長のいる家なら分かるサイズだが、その子供が所有するには大きすぎる。七強の屋敷もすごいではあるが、ここは比にならない。しかも同じ年だろ？

それから車は逆邸の敷地沿いの道を暫く進み、巨大な門の前で止まった。今気付いたが、どうやらこの道も逆の所有物らしい。

私達は車を降り、門の前に立つ。すると突然その門がゆっくり開き出した。少しずつ敷地が見えてくる。

と、その門の先に、メイド服を来た女の人とスーツ姿の女の人が立っていた。二人の後ろには高そうな車が停められている。二人は氷鳥が近づくと一礼し、淡く微笑んだ。

「お待ちしておりました、独門氷鳥様、天星織嘉様」

メイド服の女の人が恭しく言い、再び頭を下げる。スーツの女の人のは車のドアを開け、手を差した。

「では、お屋敷へご案内致します。どうぞ」

「嘉、行こうか」

氷鳥に促されるままに車に乗り込む。何故乗る必要があるのか分からなかったのだが、乗ってやっと理解した。屋敷自体が門からかなり距離がある場所にあるのだ。色々と面倒くさいな、敷地が広いというのは。

と、私はこの二人が私達が来るのを知っていたというのが気になる、隣に座る氷鳥に口を開いた。

「アポ取ったのか？」

「一応、メールだけ入れた。お前も行くってな」

「それで」

この対応なのか、と納得。溜め息をついて窓の外へ目をやる。

まるで広い公園のような庭園。隅々まで手入れが行き届いている様子が伝わってくるようだった。花畑が広がり、青々とした芝生が広がり、木々は風に揺れている。ここからははっきり見えないが、どうやら池もあるようだ。外のコンクリートジャングルとは全く違う世界に迷い込んだのかと思う程の自然。

そんな自然の中、まるで西洋のどこかの国を連想させる屋敷がそびえ立っている。この庭園といい屋敷といい、ここが日本である事を疑わせるような光景だ。

逆邸を眺めている間に、ようやく屋敷の前に到着した。す、と静かに車は止まり、メイド服の女の人が私の方のドアを開ける。あま

りこういう事をされた事のない私は、変な感じがしながら車を降りた。

そして豪邸の豪華な玄関をくぐり、いざ中へ。

「……………」

予想を裏切らないというかそれ以上の豪華さ。壮麗とでもいうのだろうか。敢えて細かく言及する事はしないが、私の感覚とはあまりにかけ離れていた。これ程のものを管理するというのは並大抵の事ではないだろう。私の理解を遥かに超えている事だけは確かだ。

しかも廊下が幾つもあり、更にそれが枝分かれしているようだった。まるで迷宮だ。地図なしでは歩けまい。

「迷子になりそうだろう？」

慣れた感じで歩く氷鳥は、キョロキョロ周りを見ている私に声をかけてきた。私は溜め息と同時に頷く。

「なんていうか……………移動が面倒くさそうだな」

「だな。俺も他のところは行った事なくてな。あいつの部屋に行くルート以外は分からないんだな」

唇を一方だけ笑わせて氷鳥は言った。

「まあ、住人は結構いるがな。これだけ広いとそれだけ管理する為に人間も必要だろ」

「だろうね」

こんなにならないだろ。というのが私の正直な感想だ。まあ、逆の人間とは考え方が全く違うんだだろうけど。

そしてエレベーターで上の階へ。最上階で止まり、案内の元再び長い廊下を歩き出す。

とそこで、至るところに監視カメラがついているのに気が付いた。そりゃ警備だって固いだろうな、と私はドーム型のそれを見ていた。同じものに視線を向けて氷鳥が口を開く。

「あのカメラはダミーらしい」

「ダミー？」

「本物のカメラは違う場所に隠されてる。誓悟はあらゆるメカの専

門だからな。このカメラも誓悟が作ったらしい」

「ああ、ダミーは敢えて付けているわけだ。警報器とかもあるんだな。これだけ警備を固めているのに特にチェックもなくスムーズに入れたのか。余程信頼されているんだな、あんた」

「そうだな。初めはやっぱり厳しかったけど。いつまで経っても直接会う事のない奴もいるし。信頼を築くのは容易じゃない。特に俺達の居る《世界》は」

「そうだろう？」とシニカルに笑う氷鳥。

『信頼』。

最近まであまり考えた事がなかったジャンルのものだ。元々私は人間関係があまりなかった。だからそこまで行った事がないのだ。

『信頼に足る存在を大切にしろ』。

先月のその《案内人》の言葉は、そんな私の『今まで』を覆した。

氷鳥は、信頼に足る存在だと。

「……………」

否定は、出来ないかもしれない。物心つく前から近くにいながら、ちゃんと相對したのはほんの少し前だが、それでもその短い中で氷鳥が私を裏切った事はなかった。信頼出来るという事を十二分に示してくれた。

つまりがそういう事なのかもしれない。私が思うよりもずっと。

ずっと近い場所にあるのかもしれない。

「お、着いたぞ」

氷鳥の声で顔を上げる。案内していたスーツの女の人がドアを開けた。そして私達を振り返り一礼。

「では、ごゆっくり。後程お飲み物をお持ちします」

「おう、サンキュ」

氷鳥は軽く手を上げて礼を言い、私を先に通した。私はゆっくり中に入る。

と、その時。

「七星、風呂っ」
ななせ

「うにー、面倒くさいよ」

「駄目！」

何やら飛び交う言葉。何かと立ち止まると、一人の青年が少女を担いで姿を現した。二人とも、水色の髪と瞳を持っている。少女の髪の毛は、少女の身長と同じくらいあるだろうか、メチャメチャ長い。

青年は一瞬緊迫を纏って動きを止め、しかし私の隣の氷鳥に目を向けてそれを解き薄く笑った。

「ああ、氷鳥」

「相変わらずだな」

「氷鳥君、助けてー」

抱えられた少女は屈託ない笑顔を氷鳥に向けて腕を伸ばした。悪戯っぽく指を伸ばしたり曲げたりしている。

青年は少女を担ぎ直して口を開いた。

「誓悟は今奥で取り込み中だから、少し待っててくれ」

「分かった」

そう姿を消した青年の後ろ姿を見送り、氷鳥は部屋の奥に向かった。部屋というより、まるで家のような。まだ幾つも奥に部屋があるようだ、ここは『奥』のうちにはいないのだろう。この部屋だけで、私の家より広い。

それにしても。

「なんだ、今の」

ソファに座るように促されて腰掛け私は氷鳥に尋ねた。向かいのソファにどっしり座って氷鳥は返してくる。

「あれが《俊光》^{スピード}の北斗兄妹だ。兄の奏に妹の七星^{かなで}^{ななせ}」

「……………へえ、あれが」

「思ったより餓鬼っぽかったか？一応七星は十五歳だからな。確かに子供っぽいしな。奏は十八か」

「妹は十二、三にしか見えなかったけど……………ちょっと見間違えたら十歳くらいだ」

「はは。でも《仕事》になったら人相変わるんだな。動きも俊敏でな、異名（呼び名）の通り。別人かと思うくらいオンとオフの差が激しいんだよ。で、面倒くさがりで風呂入れるのが一苦勞。兄貴が無理矢理風呂に突っ込んでくるんだ。いつもあんな感じで」

「色んな人がいるんだな」

溜め息。

その時、さっきのメイドが入ってきた。ワゴンを押して私達の元へ。

「お飲み物をお持ちしました。独門様、コーラでございます」

「サンキュ。いつも無理言って悪い」

「とんでもありません。おかわりの方はあちらの冷蔵庫の中にございます」

にっこりと微笑んでメイドは私に目を向けた。

「天星織様は、コーヒーかティーか、どちらがよろしいでしょうか？それともコーラにされますか？」

「いや、ティーで」

「かしこまりました。種類は何がよろしいでしょうか？」

「ん、ダージリンを」

「かしこまりました」

メイドはティーポットに紅茶の葉を入れて湯を注ぎ、カップと共にテーブルに置いた。そして何やらお菓子の乗せられた豪華そうな皿も置いた。

「ご用がありましたらお呼びください。それでは、失礼致します」

そしてメイドは出て行った。

そのメイドと入れ違うように、奥から奏が入って来た。まくし上げていた袖を戻しながら歩いて来る彼を氷鳥が迎える。

「お疲れ。相変わらずの面倒くさい病だな」

「面倒というより風呂嫌いだな、あれは。でも入るの嫌がるが一旦入ったら今度はなかなか出て来ないんだな。次は出すのが大変だ」

「そうか。奏、紹介しておこう。天星織嘉、《傍観者》だ。知って

いるだろ？」

そこで氷鳥は私を紹介した。奏は私に水色の目を向けてじっと凝視した。

「知っている。《情報》として、だが。そうか、彼女があの《傍観者》《全駆者^{ぜんくしゃ}》の妹か」

そう言っで頷く。

奏は兄貴を知っているようだ。ああ、《闇》の人間で兄貴を知らない人の方が珍しいか。そしてどれくらいかは分からないが、私の事も知っているらしい。

そして氷鳥が私に奏を紹介しようとした時、奥からずっと一人の人物が姿を現した。そこに目を向けた氷鳥は薄く笑って声をかけた。

「よ、誓悟」

「……………」

その人物は目を細め、それに答えた。

逆誓悟。

雪のように白い肌、前髪に隠れそうな二重のややつり上がった目の瞳の色は、鶯色^{うぐいす}だった。あまり表情はない。身長は私と同じくらいで百六十前後。藍色のちゃんちゃんこに、ジーンズ。なんだか拍子抜けするような姿だった。格好は一般人と殆ど変わらない。というより、一般人でもこういう服装をする人はあまりいない。あ、実はこのちゃんちゃんこことジーンズ、メチャメチャ高いのかもしれない。

二帝の逆の末裔だもんな。

誓悟は口を開く。

「久し振りだな、氷鳥」

（あ……………女だ）

声を聞いて私は気付いた。中性的な声色。しかしその声色は、間違はなく女だった。

てっきり名前を聞いて男とばかり思っていた。容姿も中性的だし。氷鳥は立ち上がって握手を交わした。そして私に手を向ける。

「紹介しよう。《傍観者》天星織嘉だ」

「ああ。逆誓悟だ」

誓悟は私に目を向けてそう名乗った。私は一つ頷く。

私から視線を外し、誓悟は再び氷鳥に目を向けた。

「すまない、もう少しだけ待っていてくれないか。先に片付けたい《依頼》があるんだ」

「ああ、突然来たからな。気にしないでくれ。ゆっくりでいいぞ」

「悪いな」

そう言って誓悟は再び奥に消えた。取り込み中だがわざわざ出て来てくれたようだ。律義な人物らしい。

ソファに戻り、氷鳥は口を開いた。

「誓悟、本名は愛姫^{あいぎ}っていうんだ。だけどそれがメチャメチャ嫌いでな。今は誓悟を名乗ってる。間違えて愛姫って呼ぼうものならとんでもない事になるぜ。『女』をあまりに強要され過ぎてな、その反動が来てるんだ。だからなかなか女っぽい格好はしない。あと、ちょっと前までは、一人称は『俺』だったな」

「それじゃあまるつきり男だな。過去形か？」

「ああ。今は『私』だな。恋人が出来て、少しずつ変わった」

「……………へえ」

「彼氏はかなり有名な奴だから嘉も知ってるんじゃないかな。歌手の『Active』ってグループの滝って奴だ」

「ああ、知ってる」

知ってるというかなんというか。月姫が好きなアーティストじゃないか。何度か一緒にCDも買いに行った事があるから覚えてしまった。滝といったら、そのグループのリーダーだろ？

そんな繋がりがあったとは。この世界も狭いものだ。

氷鳥はうつすら微笑んで続ける。

「滝と会って、誓悟はだいぶ人間らしくなったよ。まだまだ前進を始めたばかりだけど、前より感情も表情も豊かになった。多分あの二人は出逢うべくして出逢ったんだな。……………おっと」

その時誓悟が入って来て、氷鳥は口を閉じた。誓悟はこの部屋に入る辺りで立ち止まり、小さく肩を竦めた。

「お待たせ。どうぞ」

「サンキュ。嘉、いこうぜ」

立ち上がり、親指をくつと向こう側へ向ける氷鳥。私はそれに続いて立ち上がり、氷鳥の背中が続いた。

誓悟が私達を案内したのは、それから更に奥の奥の奥だった。幾つも部屋や廊下を抜け、入り組んだその先。

突然空間が開けた。そこにあったのは、コの字型テーブルの上に、パソコンが三台、リクライニングチェア、そして壁にかけられた大きなテレビ、ソファ。至ってシンプルな部屋だった。ここが《仕事》部屋らしい。

「今日、滝は仕事か？」

氷鳥はさっき話した『恋人』に触れた。誓悟は頷く。

「収録があるらしい」

短く答えてソファを私達に勧め、誓悟はリクライニングチェアにゆったり腰掛けた。くると回して私達と向かい合い、口を開く。

「で、今回はどういう《情報》がほしいんだ」

驚色が私と氷鳥を交互に見つめる。

氷鳥に目をやると、頷き返してきた。私は誓悟に視線を戻し、言葉をもとめて奴の事を出す。

「最近、私につきまといっている奴がいて。私に対して何か憎しみのようなものを抱いているようだ。そいつの《情報》を」

「成る程。性別と容姿は」

その誓悟の質問に答え、それから幾つか尋ねられた質問に返すと、誓悟は頷いて一つ溜め息をついた。

「丁度最近、河柳に転入した《闇》の住人がいる。今聞く限りではそいつかもしれないな。ちょっと待ってくれ」

くるとチェアを回してパソコンに向かう誓悟。巨大なテレビの電源を入れて、パソコンのキーボードを忙しく叩く。暫くその音が

響き、そして突然テレビの画面に画像が現れた。

それは、奴の写真だった。

「こいつか？」

私を振り向いて誓悟は問う。私が頷くと再びパソコンに向かい、操作を続ける。私は写真の奴を睨み付けて続きを待つ。

誓悟はパソコンを見つめて暫く動かず、それから不意に私に体を向けた。

「こいつの名前は、空風^{からかぜ}いなさ。河柳学園の一年、あんた達とタメだ。クラスは二組、理数系だ。ま、ここまではどうでもいい情報だがな、こっちから重要だ。こいつ、《刺客》空風くずさ・いぜなの妹なんだ」

「……………」

私はそれを聞いて記憶にフラッシュが光り、黙り込む。氷鳥はそんな私を覗き込み、言葉を晒した。

「お、珍しく覚えていたのか、前に相對した《敵》の名称」

「残念ながら」

私は返して溜め息をついた。

また面倒な事になった。これもあの《不穩》の副産物なのか。《復讐》という膿みなのか。

誓悟は眉間に一瞬シワを刻み溜め息をついた。

「もうここまで言ったら分かるな」

「……………逆恨みってところだろ。奴らの言い方を借りれば《復讐》か」

面倒くさいな、と私は深く溜め息をついた。

空風。

賊と呼べる程ではないが、少しずつ規模を大きく、そして根を深く張り始めている《刺客》一族。ここ最近《闇》の世界に進出し始めていた一族だ。

そして、空風くずさ・いぜな。

この二人は月姫を《迫害》した連中を束ね指揮していた奴らだ。

あれは中学も終わりに差し掛かる頃だった。奴らは只の『学生の苛め』ではない、《闇》の《迫害》で月姫に攻撃を仕掛けた。《不穩》をふっかけた。

そして私は奴らを《破壊》した。

再起不能なまでに、二度と回復しないまでに、ズタズタに粉々に粉碎し玉砕し、消滅させた。

奴らの思考と精神を。もう奴らは普通に生活する事すら出来ない。私がそのように《破壊》した。

生きる屍として。

相対した殆どの《敵》を覚えていないのに奴らを覚えているというのは、本当に奇跡だ。月姫が関係している《不穩》で相対したからだろうか。最近は前と違って記憶するようになっていくようだ。

《刺客》、空風。

「……………はあ」

一族として、妹として、その《復讐》をするつもりなのか。その最高のタイミングを探っているのか。私の意識の中に意図的に入り込んで来ているという事はつまりそういう事なのだろう。

やっぱりそういう事らしい。私は深く溜め息をついた。

「面倒くさいな……………」

「確かに。しかもこいつはじっくり時間をかけるタイプだ。それに加え、あんたに対する復讐心は強力だ。だからその憎しみは増幅を続けている」

淡々と、誓悟は続ける。キーボードを幾つか叩き、テレビに映し出される写真を変えた。その写真は、《刺客》を背後から捉えたもので、肩から斜めに、そして腰に、何重にも鎖が巻かれたものだった。ファッションにしては奇抜過ぎる。しかしその様に違和感を覚える事はない。それがどんな用途の為のものか分かっている。

誓悟はテレビを向き、腕を組んだ。

「奴の武器はこの鎖だ。普段は身に付けていないか一本忍ばせているかだが、決戦の時はこういう感じになる」

「分かりやすいな」

「ああ。この鎖は只の鎖だが、これを武器として極めている。だからあんたは気をつけた方がいいだろうな。肉弾戦は出来ないんだろ」

「まあ」

誓悟の問いに頷く。

そう。私は大袈裟じゃなく肉弾戦が全く出来ない。こんな《世界》に住んでいるから本当は私も護身術くらいは出来た方がいいんだけど。

だけど面倒くさいし、どうにかなる。なるようにしかない。死ぬ時は死ぬし、生きる時は生きる。

奴の写真から視線を外し、誓悟は目を閉じた。

「だが、心理戦に関しては素人と思ってもらっていい。心理戦に持つていく事が出来れば、百パーセントあんたの勝利になる。只あいつはあんたの『言の葉』を封じようとするだろう。それはなんとか回避した方がいい」

「成る程ね」

「あいつの前の《不穏》の内容は聞くか？参考になるかもしれないし、ならないかもしれないが」

「ああ……………いい」

「そうか。まあそこまで危険な奴ではないしな」

誓悟はそう言うと言再びパソコンに向き直り、操作してフェードアウトさせた。取り敢えず必要最低限の《情報》は仕入れた。これだけあれば十分だ。

「もう大丈夫か？」

氷鳥が尋ねてきた。私は頷く。それを確かめて氷鳥は立ち上がった。誓悟と握手してニヤリと微笑む。

「サンキューな、誓悟。『報酬』は何がいい」

「今回はいらない。只一つ、天星織嘉に力を貸してやってくれ。《敵》は一人ではないかもしれないからな」

「おう」

氷鳥は即答した。

私は一人首を傾げた。何故そんな事を誓悟が氷鳥に頼むのか分からない。私と誓悟は《同盟者》という程ではないし、誓悟が私を気にかける理由はない筈だ。

誓悟は私に目を向け、私のその思いを悟ったように薄く唇を引いて笑った。

「あんたは、全てが『これから』なんだ。私と同じように。あんたは私と同じ『色』が見える。だからあんたに味方しようと思う」

「……………」

同じ『色』。

それは無感情の色だろうか。それをこれから知る者としてという事だろうか。

私は目を細めてそれに答えた。

それを拒否する事はない。

「じゃあ、また機会があったら」

そう言葉を残して私達はそこを後にした。

「やっぱり面倒くさい事になるんだな」

堪えきれず、私は吐き棄てるように呟いた。

ある程度予想していた事とはいえ、溜め息は禁じ得ない。一抹の希望を信じていた訳ではないが、全身の脱力感はひどい。今から《不穩》に立ち向かわなければいけないというのに、全くやる気が見られない。この身体、棄ててしまおうか。

「確かに。《復讐》はなかなか終わらないからな。それどころか螺旋のように続く。素直がいい例だ。そう、《敵》の身内を全て排除

しない限り。……そうだ、空風の他の人間はどうするんだ？」

氷鳥が腕を組み尋ねてきた。

「奴らは決して結束しているわけではないが、『復讐』は必ず遂行する。執念深くて、そういう意味でも面倒な奴らだ。お前、空風いなさも『破壊』するつもりなんだろ」

「……………あー……………」

そうだった、奴は『一族』の一員だった。誓悟が言っていたのは、一族の事か。すっかり忘れていた。

「俺が一族絶滅させるか？」

氷鳥が思いにもよらない事を提案してきた。私は怪訝の表情で氷鳥を見つめる。

すると氷鳥は肩を竦め、不敵な笑みを唇に浮かべて続けた。

「先月の借りを返すんだよ。ま、あれは俺の『不穏』じゃねえが、巻き込まれてくれたからな。素直の『同盟者』として、まあ借りが返せる程のものじゃないが、代わりに雑用でもやろうかってな。早く終わるだろ、その方が。お前一人じゃキツイだろうし、俺、今は暇を持て余しているから」

その氷鳥の言葉に少し考え、私は尋ね返した。

「……………もし私があいつを壊せば、奴らは確実に『復讐』に来るのか？」

「ああ。それは確かだ。一族同士普段はそんなに関わらないのに、ちよっかい出されるのは嫌らしい。いぜな、くずさ、いなさと『破壊』されちゃな。次は一族でお前を消しにかかる。中途半端な奴らだよ」

「奴らは肉弾戦だよな」

「そうだな」

「それなら私に勝ち目はないな」

「肉弾戦だと、そうなるな。心理戦に持っていくのもだいぶ苦労すると思うぜ」

「なら、頼んだ」

私はそう言って氷鳥を見上げた。

そこには、自信に満ち溢れた表情。氷鳥は大胆不敵な笑みを浮かべて私を見つめていた。

「頼まれた」

そう腕を組んで小さく息を吐く。大胆不敵な笑みとは一変して、心配そうな表情を浮かべて。

そして心配そうな声色で。

「奴と相對する事になっても無理するなよ。いなさ自身も肉弾戦を仕掛けて来る可能性は大だからな。否、ほぼ確実だ」

「私がいつ無理をした」

「無理はしていないつもりかもしれないが、結構無茶はしてる。頼むぜ?」

「……………分かっている」

「頼むぜ」

もう一度言って氷鳥は片目を細めた。唇の片方だけ笑わせている。「嘉の《性質》を知っていてもやっぱりハラハラするんだよ。満月もそうだが、お前は特にギリギリのところまで行くからな。平気そうな顔して。……………護身術くらいは身につけた方がいいような気がするけどな」

「面倒くさい。どうにかなるだろ」

「今までそうだったんだろ? 一応は。まあ、とにかく気を付けてくれ」

「分かってる」

心配そうな色を滲ませる氷鳥から視線を外し、私は遠くに目を向けて頷いた。

先月もこうだった。私が無理をするのではないかと心配された。何故こんなに私を心配するのか私には分からない。

(まあいい)

情報も入った。あとは奴が仕掛けてくるのを待つだけだ。私から動く事はない。いつでも、どこからでもかかって来い。

さあ。

私は此処に居る。

(2)

「おかえり嘉っちゃー!!」

家のドアを開けるなり、脳天を甲高い声が直撃した。私は心底うんざりしながらその声の主を思い切り睨み付けた。

「……………学習しろよ、お前。同じ事何回も言わせんな」

「いやあん、嘉っちゃ今日も機嫌悪いっ!」

そいつは腕を胸の前でクロスさせ、恐いっ!とジャンプした。全くもって意味の分からない動作だった。私はそいつを手で払って中に入った。

妃七。また今日も来やがった。

溜め息をついてリビングに向かう。するとキッチンに立っていた月姫が振り返り、見えない瞳を微笑ませた。

「おかえりなさい、嘉。疲れているみたいね」

「疲れている上にあのやかましい奴に体力吸われた」

「あらま」

月姫が困ったというように苦笑した。それと同時に妃七が目を見くする。

「ヒドイ! 妃七を仲間外れにするなんてっ!」

「仲間外れじゃない。邪魔者扱いだ」

「余計ヒドイじゃない……………」

「当然の扱いだと私は思うが」

シュンとなる妃七に言い放って私は自分の部屋に入った。鞆を置いてリビングに戻る。今日は夕飯を済ませてから風呂に入ろう。

椅子に座る私に、月姫が忙しそうに手を動かしながら話しかける。

「今日は雑炊にしたの。どうしても食べなくなっちゃって」

「そうなのー☆」

妃七も無駄にどでかい声を張り上げてニツカリ笑った。さっき一瞬シュンとなったのはなんだったんだ。私は妃七の台詞はスルーす

る。

手を動かしながら月姫は続ける。

「あと、兄さんと来夜さんがホッケを持ってきてくれたの。バイト先の先輩がくれたんですって。大量にもらったらしくてね、いっぱいくれたの」

「へえ」

来夜がね、と私は相槌をうって一つ溜め息をついた。色々とツツコミたい事は山程否それ以上にあるが、敢えてツツコまない事にする。

もうそのツツコミが意味を成す事はない。来夜はもう私が知っていた過去の来夜ではないのだから。

今の来夜は、今の来夜だ。

「はい、出来た。妃七、テーブルに持っていきましょ」

月姫が火を止め、妃七を呼んだ。皿を出していた妃七は作業を中止して鍋つかみを取った。

「私が雑炊は持っていくよ。月ちゃんはお皿お願いね」

「分かったわ。絶対転ばないですよ」

「大丈夫大丈夫」

楽しそうに食事の支度を進める二人。私は邪魔にならないように椅子に座ったまま待っていた。あれよあれよという間に手際良く夕飯の支度は整った。月姫は私の向かいに、妃七はその隣に腰を下ろした。

「じゃ、いただきますしよるか」

「いっただきまーす！」

「……………いただきます」

早速食事に着手する。

「どう？学校。上手くやってる？」

雑炊をふうふうと冷ましながら月姫が尋ねてきた。そういえば月姫は猫舌だったつけ。隣で流し込むように雑炊をすする妃七とはえらい違いだ。

「ああ、まあ、ぼちぼち」

ホッケをつつきながら答える。どう、と訊かれたらなんと答えるべきか考えてしまう。

そんな曖昧な返事に月姫は笑った。

「嘉ったら。特に何もなかったのね」

「えー？何もないって事ないでしょう！。何もない人生はないよ！」

「…………面倒くさい奴だな」

口を挟んできた妃七に眉をひそめて溜め息をつく。ついついすこむように言ってしまった。しかし本当に絡みにくい奴だ。

「…………だって、嘉の周りに『日常』はないじゃない」

私がこの上ないくらいうんざりしているのが分かったのだろう、妃七は少し声のトーンを落として私を見つめた。以前は絶対にテンションを下げなかったが、少しは空気を読むようになったらしい。読めるなら初めからそうしてほしかった。

意味深な台詞を吐いて妃七は唇を尖らせた。

「私、嘉っちゃんが『日常』の中に居るなんて一度も聞いた事ないよ。今のところあり得なさそうだったし。いつも嘉っちゃんの周りにそれは転がっているから、今現在も進行形でそうなのかなって思ったんだ」

「……………」

私は真剣な目でじっと私を見ている妃七を見つめた。

こいつも、いわゆる《不穩》の犠牲になった事がある。だから月姫程とは言わないが、そういう事に敏感に反応する。

ぶっ飛びテンションの狭間に時折見せる影。どうしてもふとした拍子にそれは顔を覗かせる。忘れそうになるが、こいつもいわゆる『犠牲者』なのだ。

「…………なんだ、普通に会話出来るじゃねえか。異星人じゃなかったんだな」

「ひ、ヒドイ！！…………よく言われるけど違うんデス……………」

敢えて問いをはぐらかし妃七のテンションを狂わせるように言う

と、妃七は口をモゴモゴ言わせた。

よく言われるんかい。

一旦会話は途切れ、私達は食事を再開した。暫く沈黙が続き、カチャカチャという静かな音が響く。

そんな中、不意に月姫が箸を止めた。そしてゆっくりと私に目を向けた。

見えない瞳が私を捉える。

「でも私、一つ心配なことがあるの」

「…………ふうん？」

私は先を促すように頷いた。

月姫は箸を弄びながら言葉を綴る。

「ずっと気になっている事なんだけど……………嘉が私を助ける為に《破壊》した人達が居るでしょう？その人達の為に復讐をしに来る人が居るんじゃないかって。ずっと気掛かりなの」

「いゝ？それってヤバくない？」

月姫の言葉に妃七が顔を引きつらせ、目を見開いて私を見つめた。
「かなりヤバくない？ヤバイよ、嘉っちゃん。超ーキケンだよ。絶対絶命大ピンチだよ」

「別にあんたが危ない訳じゃないだろ。しかもそんなピンチじゃないし」

大袈裟だ、と眉をひそめて溜め息。月姫は口を結んだままじっと私の答えを待っていた。

私は少し考える。

最善の言葉を考える。

「確かにあり得ない話ではないけど」

私は月姫に言葉を返す。

多くは並べない。でもちゃんと伝わるように。心配する必要はないと。

私は。

「もし《復讐》を受けても、私は揺るがない」

私は宣言するように言った。

今は奴の《不穩》の事は伏せておく。無駄な心配はさせたくない。《不穩》に異常な程に敏感な彼女だからこそ、それを知るのはギリギリまで避けておきたい。

もし既に薄々気付いているとしても今は。

月姫はその一言に頷き、淡く微笑んだ。本当に綺麗な笑顔で笑う。

「そうよね、嘉だもの。きっと上手く対処出来るわよね」

それは優しい笑顔で。私に向けられるにはあまりに勿体無い。

私という存在の全てを信じているというように。

私は視線を落として言葉を返す。

「反応変わったな」

「ええ。どんなことが起きても、例えばそれが酷い《ゲーム》でも嘉はそれを上手く乗り越えていけるってこと、この数ヶ月で知ったから。だからあまり心配しないことにしたの。嘉に迷惑かけたくないし、嘉は私が居なくてもやっていける。私はただ此処で嘉を待っていたらいいかって。ほんとには心配だけど。」

だから嘉。あまり無理はしないでね」

確認するように。

願い祈るように。

一ヶ月前にも同じことを言われたような気がする。お節介を聞いて、と優しい声で。

私は一ヶ月前と同じように答えた。

「分かった。無理はしない」

気休めでなくその通りにしようと心から思った。

【接触】（前書き）

季節が来ても
裸のままの桜
憐憫な姿

【接触】

「だるいなあ……」

本日何度目かになる台詞を呟いて満月はテーブルにうつ伏していた。図書室のいつもの席に座り、私はそんな満月をただ見つめる。

昨日休んでいた満月は今日はちゃんと登校してきた。夜明はもう大丈夫らしい。暫く入院はするものの、それなりに元気だという事だった。

しかしいつも以上に眠そうな満月。只眠いという事ではなく、疲れているようだった。外はねの髪が寝癖に見える。先からずっとテーブルに上体を倒してダラダラしている。みつともないが、まあ今回は許してあげよう。

私はナメクジのようになっていて満月に声を投げた。

「昨晚も遅くまで付き添いしていたのか？」

「んー？」

テーブルに上体を伸ばしたまま私を見上げる満月。なんだか力が抜けてしまいそうな表情だった。

満月は不可解で複雑な笑みを浮かべ、ゆっくり身体を起こした。そのまま溶けて液体になってしまいそうなくらいだ。

同じようなダラダラした口調で満月は言う。

「付き添いっていうかー、色々話してた。愚痴言ったり聞いたりー。意見言ったり聞いたりー」

「成る程」

ダルそうな口調にちよつと面倒になった私は無理矢理台詞を切つて頷いた。満月は苦笑いして頬杖をつく。

「面倒くさいって思ったでしょ、嘉。ま、しょうがないかー。分かんないでもない。……でも色々夜明と話せたから良かった。夜明ね、風雅義兄さんと話し合ったんだって」

「…………へえ」

台詞の途中から突然普通の口調に戻り、満月は私にすっかり視線を固定していた。酔っ払いが突然素面の状態に戻った感じだ。私はその意外な言葉に頷いて続きを待った。

満月はうつすらと穏やかな表情を浮かべた。

「ほら夜明が倒れたあの日、あたし達の後に風雅義兄さん来たでしょ？ 義兄さんが病室に行ったあの時、夜明丁度起きてね。色々話しかったんだって。初めて正面から向き合ってたね。まだ『知り合う』段階だけど、取り敢えず慌てずにゆっくり行こうって」

「大進歩だな」

「本当だよ。病院に向かってる時に風綾さんが義兄さんに電話してね、ちよっとは考えた方がいいって言ってくれたみたいなんだ。さすがに倒れたらね」

「成る程ね。…………しかしよく会話が出来たな。基礎も何もないのに」

「そうだよ。最初は何をどう言ったらいいか分からなくて、とても大変だったみたいだけど。互いに何をどう思っているのか、率直に話し合ってたんだって。それで取り敢えず相手を知る事から始めようって結論になったみたいだけど。あまり風雅義兄さんも他人に興味がない人だから、努力しないと知り合いにすらなれないんだ。やっぱり難しいところも多いだろうし、まだまだだけど、これから前進出来てるって信じたい」

少し悲しげな表情。満月は口を結んで儂げに笑った。

大進展だ。

あれほどコミュニケーションが取れないとっていた二人。他人というより、一緒に居ながら無関係だった二人。夜明は風雅を想いつつ水面下で苦しみ、そして遂に我慢は極限を超えた。それほどまで追い詰められていた夜明。

それが、状況は急変した。人生というものはどう動くか分からない。それを証明する事例になった。

これからどう変わっていくのか、誰にも分からない。それでも信じたいと願っているだろう。少しずつでも光に向かっていているのだと。誰かの為に生きる。その正しい答えを探して。それが正しいのかどうか、『幸せ』になれるのかどうかを。

夜明なら答えをその手に握りしめる事ができるだろう。いつの日か、必ず。

「そういえば、進展あった？」

ナメクジからはすっかり脱皮した満月は、話題を変える質問を投げてきた。今度は《傍観者》のオーラを纏い、口元には《不穏》を迎え撃つ笑み。

私は首を傾げて肩を竦めた。

「見てまんまだ。未だ動きは無し。慎重なのか何なのか分からないけど」

「ここまでくると臆病なのかなって感じもするけどね。こんなに長引かせる必要ないじゃない。あんな脅迫文まで出しながらさ。ビビっているんじゃないの？」

「いずれ相対しなきゃならないならさっさと終わらせたいんだがな」

「誰なのか検討もつかないの？」

「いや、誰かは分かった」

私は目をしばたかせる満月に頷いて足を組み直した。

「《復讐》を受けてもおかしくない《不穏》が無数にあってな。その一つ一つを覚えていないどころかほぼ全部忘れているから、どいつなのか予想すら出来なかったけど。……一応情報くらいはあった方がいいと思って、あんたの従兄弟に頼んだよ。昨日《情報屋》のところに連れて行ってもらって情報を聞いて来た」

「え、そうなの？」

すごい、というように目を見開く満月。私をしっかりと見つめて。

「もしかして、《侵略》に直接会ったの？」

「会ったけど」

「へえ。なかなか会ってくれないって聞いた事あるよ。仕事柄、ね。」

余程信頼されているんだね」

唇を尖らせて頷く満月。そして横に唇を引く。

「で、なんだって？」

そいつは一体何なの？と満月。『何』と尋ねているあたり、かなり奴を卑下しているのが伝わった。

私は溜め息を一つ床に落とした。

「《刺客》一族の一人らしい」

「あ、知ってるよ。《刺客》」

満月は人差し指をピンと空に向ける。

「最近ちよつとずつ有名なってるよね。組織でありながらそれぞれ孤立している、微妙な一族なんだとか。実力はそれなりにあるんですよ？………ん？確か、月姫を襲撃して嘉に《破壊》されたのは、

《刺客》空風くずさ・いぜなじゃなかった？もしかして、その《復讐》？」

「ご名答」

「あ、妹か何か？」

「妹らしい」

「そうだったんだ。そこまでは知らなかったな………へえ、あいっだったんだ」

椅子の背もたれに身体を預け、吹き抜けの天井を見上げる。その態勢のまま溜め息をつき、顔を戻して再び私に目を向けた。

「厄介だね」

「ああ」

眉をひそめて溜め息。

《復讐》。

あいつらからすれば正当なものなんだろうが、私からすれば本当に面倒くさい事だ。無意味にさえ思える。自分がまいた種だとしても私にとってそれはよく理解出来ない感情であり、方法だ。

そんな方法で、『誰かの為に』生きるという事は。

(まあいい)

私がなんだかんだ言ったところでどうにもならないし、奴らには奴らの考え方がある筈だ。異議を唱えるのはこの辺にしておこう。

「それにしても」

満月は大きく溜め息をついてまた天井を見上げた。吹き抜けになっている空間にぶら下がる巨大なシャンデリアを眩しそうに見上げて。

そして今の話と何の関係もない事を口から溢した。

「なんだか面倒くさい性格してますね、あたし達」

脈絡ない台詞。何故今この場面でこの問いが出てくるのかとツツコミを入れられそうな言葉。

しかし私にはその言葉の真意が分かっていた。何が言いたいのか、何を思っているのか。何故今でなければいけなかったのか。

それは《傍観者》だから分かる事で

《同類》にしか分からない事だった。

胸の混沌としたものだったり

混濁した思いだったり

蠢く《闇》だったり。

言葉では到底表現出来ない、巨大な、爆発寸前の胸の何か。今にも飛び散ってしまいそうな何か。それを抑えるように、爆発を遅らせるように、それを不完全ながら形にして問う。

満月はうっすらと《傍観者》の笑みを浮かべた。

「あまりにも面倒くさすぎて、生きることを全部放棄したくなるよ」

「すれば」

「しない。約束だから」

満月は私の言葉に即答し、自分に言い聞かせるように一つ頷いた。瞳に真剣な色を呼び込む。

私は目を細めて尋ねた。

「約束」

「そ、約束。何があっても生きる事を棄てないって約束したの。それが人生放棄しないように繋いでる。ま、それが無くてもやめたりはしないけど」

満月は一つ息を吐いて私を見つめる。

それは誓うように。

まるで願うように。

「だって、答えが見つからないから生きるのを辞めるっておかしいじゃん。見つからないなら見つかるまでもがけばいいんだよ。誰の為に生きるのか、何の為に生きるのか。そうでしょ？そんな簡単に解明出来るものじゃないんだと思うんだ、生きる意味とか価値とか。それが有るのか無いのか、見つかるのか見つからないのか、そんなのあたし達が決める事じゃないでしょ」

「……………そうかもしれないな」

私は頷いた。

実際その答えを見つけれられるのか、それは誰にも分からない。でも模索して探しているうちは必ず可能性がある。見つかる可能性を棄てなければ、それは残されている。

あると信じたい。

『何故』に対する答えはあるのだと、信じたい。

誰の為に何の為に、そして何故生きるのか。明確で納得出来る答えは見つけられるのだと。やっぱり信じていたい。私は一体何なのかも。

それが儚い願いでも。

私はそれを知りたい。

私は何故此処に生きているのかを。

(2)

最近毎日の日課に、『中庭でぼう々とタイム』が加わった。いわゆる『マイブーム』というヤツだ。すっかりそれは予定に定着しつつあり、長休みは、日だまりが気持ちいいあのベンチに当たり前のように座っている私がいた。

「……………ふう」

短く息を吐いて空を見上げる。今日も雲がだいぶ多い。青い色は殆ど見えないし、無駄に紫外線が強い。最近はずっとこんな調子だ。中庭に視線を移す。結構な広さの中庭内には、これまた洒落たテーブルと椅子がたくさん並んでいる。そして咲き誇る花と生い茂る緑。逆邸もそうだったが、ここもなんだか異世界だ。

点在するテーブルに、思い思いに腰掛け長休みを過ごす生徒達。此処は静かにするというのが暗黙のうちのマナーらしく、教室のような騒がしい騒音とは無縁だ。静かに時間を過ごす事が出来る。

「……………」

と、ポケットの中の携帯が振動した。私は取り出して画面に目を向ける。それは月姫からのメールだった。

『きょう、らいやさんとにいさんが、うちにくるそうです。』

短い、平仮名だけのメール。見えないのによく打てるよな、と思いつつ携帯をしまう。

しかし、あの二人、家に来すぎだろ。どんだけ気に入ってるんだって話だ。まるで昔からこんな風に付き合いがあったかのようだ。別に悪くはないけど。

(無関係って感じだったけどな……………)

なんとなく、溜め息。

これまで交流は全くなかったのに、こんなに当たり前のように付き合いが続こうとしている。今までとのギャップが大きすぎて違和

感だらけだ。

でも、他人との関わりも似たようなものかもしれない。満月との始まりも、小さな事から始まって、今当たり前のように傍に居る。だから多分、これは自然な事なのだろう。あるいは必然的な事。

多分こうやって、私の《世界》は広がっていく。これから、少しずつ。かなり限定的だった私の《世界》は、他人と関わっていく事によって大きくなっていく。縮小していく事は、まずない。

それでも構わない。

私の存在の意義や意味を、その答えを見つけられるのなら。これが正の方向に私を導いてくれるのなら、それを拒否する必要はない。受け入れる価値はあると思う。

例えば今回のこの《不穏》。

決して大きなものではない。しかし情報を自分で入れたり、その《敵》の味方を片付ける事など、私独りでは出来ない事も多々ある。それは関わっていく人間と提携しなければ完成する事が出来ない事だ。

どんなに他人を拒否しようが、独りで生きていける人間はいない。最近ようやくそれを否定する事の無意味さを受け入れる事が出来た。私は独りでは生きられないという事を肯定した瞬間、私の《世界》は広がり始めた。そして全てが少しずつ開けてきたように感じる。

だから多分これは間違いではない。この選択は間違いではないと信じたい。

出来る事ならばそうであってほしいと願う。

(……………さて)

そろそろ教室に戻ろうか。

真剣に物思いに耽ってしまった。やがて授業が始まる。移動時間を考えて、ゆとりを持って動くにはもう行った方がよさそうだ。

私は立ち上がり、庭園のベンチをあとにした。後ろの木の生い茂る道を通って教室を目指す。この道はなかなか人が少ないので苛々せずに歩けるのだ。

しかし、今回はそれが間違いだった。

突然

(……………っ！)

異様な気配を感じた次の瞬間、背後から何かで喉を絞め付けられた。冷たい感触、ギリギリと首を絞めていく。酸素は遮断され、頭がぼうつとし始める。

畜生、油断した。

「……………っ……………」

喉を絞めるそれに触ってみる。どうやら鎖で間違いなさそうだ。という事は、ヤツという事だ。

って、こんな悠長に分析している場合じゃねえんだよ。

(……………こりゃまずいな……………)

しかし私は抵抗しない。したところでどうにもならない。だからされるがままに私は立っていた。段々酸素不足になり、視界が歪んで霞んでいく。

殺すなら殺せ。殺せるものならやってみろ。

そして意識が朦朧とし、闇に完全に墜ちそうになったまさにその時だった。

「嘉っ！」

そんな叫び声が私の意識を切り裂き、覚醒させた。その瞬間鎖が緩み、突然空気が肺に入ってきた。目眩で一瞬意識が飛んだ。

「嘉、大丈夫か？」

私の意識をとどめるように氷鳥は私の名を呼び、膝をついた私の隣に屈んだ。手を貸そうとする氷鳥を断り、私は取り敢えず木の根本に背中を預けた。瞼を閉じてゆっくり息を吸う。

「平気か、嘉」

心配そうに私を呼ぶ氷鳥。私は瞼を開いて氷鳥に目を向けた。

「こんな事は初めてじゃない」

「そうだろうけど……………痕が残ってるな」

苦笑を浮かべて溜め息をつく氷鳥。何故か私より危機感を感じ、

私より安堵を抱いているような気がする。一体どうしたというのだろう。

「……………」

でも、氷鳥のおかげで助かった。誓悟に言われた通り、私の近くでヤツからの攻撃に反撃しようと待ち構えていたのだろうか。

氷鳥は不意に顔を上げて遠くに目をやった。軽く細めて睨み付けるようにそこにじっと視点を定めて。

「《刺客》空風いなさで間違いない。本気で嘉を殺すつもりのようなだ」

低く言う。

今気付いたが、私は自分の首を絞めたヤツの顔を見ていなかった。私の代わりに氷鳥がちゃんと見ていたらしい。

やる気あるのか、私。自分にツツコミを入れてみた。

（やる気ないな……………）

やる気のない結論を心の中で呟き、再び目を閉じる。瞼の裏の闇に、目障りな光が漂う。頭痛と目眩が少しずつ強くなってきた。

「保健室で休むか？」

そんな私に気付いたのか、氷鳥が声をかけてきた。私は短く『いい』とだけ答えてもう一つ溜め息をついた。首を振ったら吐き気がしそうだったのだ。氷鳥は、そうか、と返して何も言わなかった。

（……………さて）

私は考えを巡らせる。

少し距離を置いて私を威圧しようとしていたのが、こうして直接的な攻撃に変わったという事は。

（更に近付いた、ってか）

ふう、と息を吐く。

つまりが、そういう事でしかないのだ。希望も期待もしていないが、『終焉』を避けられる訳ではないのだから。もし避けられるのなら、この《世界》は恐らく崩壊する。跡形もなく消え去る。

回避不可能。

只それだけの事。

(それまで体力温存しなきゃな………無駄遣いは厳禁だ)
そんな事を考えて私は目を開いた。

【氣病み】（前書き）

激しい雨に打たれながら

『少しでも安らぎがほしい』

そう願って頬に幾筋もの跡

【氣病み】

《破壊》。

それは殺人とは違う。人を殺すのではなく、精神を殺す。人間を殺すことに限りなく近いが、全く違う。似て非なるとでもいうのか。いつ頃から《破壊》をするようになったのか全く覚えていない。

何人《破壊》したのかも覚えていないし分からない。多分、物心ついた頃には既に《破壊》をしていたのだろう。《破壊》という言葉を知る前から、意識的に、ある時には無意識に。

呼吸と同じように。

それ故に何度も批判され、危険だと言われ続けてきた。もつと言え、排除しようとする勢力に攻撃される事も度々あった。何度もそれに晒された。

私が此処に居るという事はそれがことごとく失敗に終わっているという事だが、私の存在は疎まれながらここまで来たようなものだ。いつも紙一重で生き延びてきた。誰か、あるいは何かに影響を与えながら自分は《傍観者》のまま。

そんな私が、生きる理由を己に問うている。誰かの為に生きているのかと問うている。

矛盾。ひどく矛盾し歪んでいるような感覚がずっと付きまとっている。その問いを意識したその瞬間から、気分が悪くなる程のむかつきと違和感が胸を搔き回している。

《破壊》という行為をまるで呼吸をするのと同じような感覚で行ないながら、自分は生きる意味を探すのかと。恐らくこの答えが出るまでこの胸のむかつきは消えないだろう。

だからそれがどうした。

私は胸の中に沸き上がった問いを一蹴して無に葬り去った。

この問いに対する答えを出すか出さないかで、《復讐者》とどう相對するかが変わってくるだろう。優位に立てるか立てないか、それを大きく左右する。私はいつになく持論を徹底的に黙想していた。人の人格を《破壊》する行為。それは卑劣なやり方かもしれないが私のやり方であり、私そのものといっても過言ではない。私が《闇》に生きるのにそれは必須であり、私はそれ以外に自分を護る術を持たない。私が《闇》で生き残るには、それを棄てる訳にはいかないし、棄てようとも思わない。

それを放棄する事は私にとって死を意味する。生きることには執着はないが無駄死にするつもりはない、故に私はそれを貫く。

だから、多分それとこれとは別問題だと、そう答えるだろう。

私が《破壊》をしていても、生きる意味を模索するのは間違った事ではない筈だ。誰の為に、あるいは何の為に。それは誰もが探す権利を持っている筈だ。どんな殺人鬼でも狂人でも人生の意味を考える自由くらいは与えられているのと同じ。無数に《破壊》してきた私にも、それくらいの自由はある筈だ。

《傍観者》でも。

どう否定しようがどうしようが、私が人間である事に変わりはない。

私が私である事に変わりはない。

だからその答えを欲する。

何故、という問いを自らに。

「嘉一」

「……………」

と、来夜の声が私の思考を切り裂いた。すっかり自分の世界に入っていた私は床に這わせていた視線を来夜に向けた。唇を歪ませる来夜は片目を細める。

「眉間にすごいシワ寄ってた。考え中だったのか？」

「…………妄想族なもんで」

溜め息について、私を見つめる夜空とニコニコと笑っている月姫に目をやる。なんだか滅茶苦茶楽しそうだ。私は私を見ている来夜、夜空、月姫を順に見回して口を開く。

「…………何かするのか？」

「うん。ジャンケンで負けた人が皿洗いしようって話になったんだ。勿論嘉もジャンケンやるよね」

穏やかにしかし有無を言わさない口調で言い、艶やかに微笑む夜空。なんだかやり方が月姫にそっくりなんだが、気のせいだろうか？断ろうと思えば出来ない事もないが、なんだかそんな氣力を削いでしまうような口調だ。

私は溜め息をついた。

「訊いたところで私に選択権はないんだろ」

「まあね。一応確認取っただけだよ」

にっこりと、夜空。

やっぱりそういう事だったらしい。拒否するだけ無駄なので私はそれに加わる事にした。負けた人がやる、という事は罰ゲームという事か。

実はここだけの話、私はつい最近まで『ジャンケン』というものを知らなかった。断じて冗談ではない。誓ってふざけている訳でもない。

それを月姫や夜空が知った時、暫く冗談だと言って信じてくれなかった。それくらい異常だったようだ。夜空曰く『日本人で知らない人がいたなんて』らしい。

何故知らなかったのかは敢えて言うような事ではないが、私はそれを月姫と夜空に初めて教わり最近それを知った。

どうでもいい事だけど。

「やろうぜ。一本勝負な。もし三人負けたら三人でやるんだぜ」

ニヤリと笑い、腕まくりする来夜。何だかよく分からないが面白そうだ。たまにはこういうのも悪くない。

「やろっ♪」

月姫も身を乗り出して嬉しそうに笑う。夜空は頷いて拳を出した。

「いくよ？ ジャンケン、ポン！」

「どうなった？」

「お、嘉と夜空の負けだー」

月姫の問いに、楽しそうな来夜の言葉。私は眉を顰め、負けそうな気がしながらも自分が出した『チョキ』を見つめた。夜空も困った表情を浮かべて舌打ちした。

来夜はニヤリと私と夜空を見つめる。

「二人、皿洗いした事あるか？」

「……………ない」

「……………俺は一応あるよ」

夜空は経験者らしい。私は当然の如く初挑戦だ。普段キッチンに立つ事も全くと言っていい程ないし、今まで全くやった事はない。

「じゃあ、さっさとやりますか。負けた者同士」

別に苦ではないしね、と立ち上げる夜空。挑戦するのも悪くない。私もそれに続いて立ち上がり、流し台に向かった。

「嘉。月姫を《迫害》した奴らを《破壊》したこと、後悔したりしてないの？」

夜空が洗剤で皿を洗い、私が水でゆすぐ。そんな感じで二人並んで皿を洗いながら。

ずっと考えていた言葉を晒すように、不意に夜空が尋ねてきた。

かなり抑えられた、ずっしりと重い口調。月姫が風呂に入ったのを確かめて問われたその問いに私は横目を向けた。

夜空は蒼い瞳を伏せ、手を動かしながら次の言葉を探しているようだった。一つ小さく唸った後に躊躇いながらも一度口を開く。

「やっぱり、俺としては今でも時々考えるんだ。いくら妹の為にしてくれた事と言っても、《破壊》だろ？あの時嘉はそんなに月姫と親しかった訳じゃなかったし、しかも、その《破壊》の『程度』を一番重度にしたじゃないか。あんな事を嘉にさせて良かったのかって思ったりするんだ」

「……………あんたに頼まれた訳じゃないし、させられたって訳でもないけど」

「まあ、そうだけど」

私の返事に苦笑する夜空。

兄貴は兄貴でそういう心配を抱いているらしい。よく分からないが、妹の事は色々心配のようだ。そして何故か私の事も気にかけているようだった。

私は変わらない口調で返す。

「私は誰かに《破壊》するように強制された訳じゃないし、それは私自身が決めた事だ。必然的な事でもあったし。別にあんたが気を揉むような事じゃないんじゃないの」

「そうなんだろうけど……………俺も少しではあるけど《闇》に足を突っ込んでいるから、ちょっとは分かるんだ。そういうものには《復讐》がつきものだろ？勿論嘉にも言える事だろ、それは。だからそれから続いていくだろう事はある程度予測出来るしね。……………面倒くさい事に首突っ込んでしまったって思わなかったの？」

「それは思わなかった。確かにそういう《復讐》の危険が無いと言えは嘘になる。でもな、私はずっとこの《世界》に住んでいるんだ。そういう事は生活の一部であって一部でしかない。私には《不穏》は日常だ。だからそれが一つや二つ増えたって大して変わらないし、誰のせいにもしない。只一つ言えるのは

もし《復讐》があっても私は揺るがない。

それだけだ。そんな事でぐらついてしまうような《種族》じゃない。今までがそうだったし、これからもうそういう予定だ。それに、あんなの妹はそれをよく理解している」

自分ではどうしようもない《世界》がある。

避けられない《不穩》がある。

やがて来る《復讐》がある。

だから私は逃げないし、回り道もしない。自分から向かっていく事は滅多にないが、私に向けられる《不穩》を避けたり無視したりはしない。それがどんなものでも受け入れ、そして立ち向かう。それは私の『生きる』事の一部になっているから。

だから夜空が気を病む事じゃない。私は只当たり前の時間を当たり前に生きているだけなのだから。

夜空は私の言葉を反芻するように頷いた。そして思いを打ち消すようにふっと息を吐いて私に一瞬笑みを向けた。

「憑き物なんだね」

「……………幽霊みたいに言うなよ」

似たようなものだけど、と最後の皿を受け取ってゆすぐ。四人分なのでそんなに多くはなかった。夜空からタオルを受け取って手を拭く。

そのままリビングに行くと、ソファでのんびりしていた来夜が私達を迎えた。にっこりと、笑み。

「おー、お疲れ。どうだった、嘉。初めての皿洗いは」

「悪くなかった」

返してカーペットの上に座る。夜空は来夜の向かいのソファに腰を下ろした。

そして静寂。

「……………」

私は二人に交互に目を向け、何故か違和感のない沈黙に首を傾げた。

今まで殆ど関わりのなかった私達。それが当たり前のように同じ空間に腰を下ろし、沈黙まで共有している。それなのに全く違和感もなく、居心地が悪いという事もない。

これが『兄弟』なのか？

やはり私の中のどこかは、あるいは何かは、それを感じているのだろうか？本能的な部分か、あるいは内奥の感情は、それを知っているのだろうか。

まだ、私には理解できそうにない。

でも、感覚は共鳴のようなものに影響されているようだった。

よっぽど難しい表情をしていたのか、私の顔を見た来夜が首を傾げて口を開いた。

「何か考え中か？」

「……………ああ」

私はおもむろに顔を上げ、少し迷ってあまり関係のない事を尋ねる事にした。

「暇なのか？」

「は？」

「いや、しょっちゅう来るから」

「迷惑か？」

「ではないけど」

返して来夜に目をやる。来夜はその意味を悟ったのか、頷いて唇を横に引いた。

「此処、居心地いいんだよな。今日はバイト休みだったからお邪魔したんだ。昨日はバイトだったけどな」

「バイトって、コンビニ」

「そ。覚える仕事たくさんあって面白いぞ。ワケわからん人も来るし、たまに強盗とかも」

「強盗？」

たまに来る客みたいな感覚の口調に私は眉を顰めて来夜を見た。

来夜は、うん、と当たり前のように軽く頷く。

「何回か来たぜ？変装してたりしてなかったりだけど。うーん、俺が入っている時に三回来たな。みんな違う奴だけど」

「……………どんだけ好かれてんだよ。で、どうしたんだ」

「おう、刃物突き付けられたからそれ叩き飛ばして、レジカウンタ―飛び越えて組み伏せた。あとは、銃持ってる奴らが二回来たが、同じように仕留めた。で、御用。みんな動きが鈍くてな、どのケースも十秒かからなかったな」

「そんな奴らを武器もなくあっさり撃退したわけだ」

「あれは只の気休めさ」

「普通は怖がるか驚いて抵抗した場合が多いんだろうけどね。ま、来夜は『普通』じゃないから」

来夜の台詞に夜空が続いた。

まあ、来夜を刃物や銃で脅した時点でそいつの運命は決まっていたようなものだ。そのままあの世逝きにならなかっただけマシと言える。そいつらは知らなかったとはいえ、こいつは《闇》で名の通った《逆》^{リバーズ}だ。

少しブランクはあっても、来夜に敵う筈などない。

「で、三回もやつつけてしまったから、店長がお礼って一万円くれた。ラッキー」

そんなお気楽な台詞を言って来夜はニヤリと笑った。私はそんな来夜から視線を外して溜め息をついた。

そして、この前から訊いてみたかった事に触れた。

「でも、なんでバイトなんてしてるんだ？学費なんか困っているわけでもあるまいし。わざわざそんな事しなくてもいいんだろ、本当は」

「何事も経験だぜ、嘉。《闇》から逃げられなくても、そのギリギリの境界線で『普通』の事を色々知る事が出来る。それも悪くない」
そう言った来夜の表情は、確信に溢れていた。しっかりとした信

念を抱いている、そんな表情だった。

しっかりと、自分を持って。

それはまるで、答えを見いだし始めているようなオーラすら放つて。

「ああ、そうだ」

不意に来夜は何かを思い出したようにそう声を発した。その顔は私を向いて。

「最近、茨姫が近くに来てたみたいだ」

それは私の《鏡の向こう側》の話題だった。ついこの間『i n d i g o』で話したばかりだ。

私は頷く。

「来てたな」

「ん？会ったのか？」

「ああ。兄弟の情報を持ってきた。別に請求したわけじゃないんだけど」

「成る程。お前に会う理由付けが欲しかったんだな。あいつはお前を結構思っているからな」

そんな事を言って来夜は薄く笑った。私はそんな来夜を只見つめていた。

今来夜は当たり前のように私の前で笑っているが、これは決して当たり前ではない。あまりに当然のように座っているが、こうして此処に居る事自体が不自然で不可解なのだ。一言で言ってしまうば『有り得ない』。私達はつい最近まで、兄弟とは名ばかりの関係だったのだから。

それなのに、今までもこうしてきたかのように。

私は一つ溜め息をつき、口を開いた。

「すぐ変わったな、あんた」

「俺も人間だからな。絶対じゃないから変化もする。確かにかなり変わったからよく驚かれるけどな」

「そうだろうね」

もう一度溜め息をついて私は来夜から視線を外した。

変わったところの話じゃない。まるで来夜にそっくりな別の人間が目の前にいるみたいだ。

何がここまで来夜を変えたのか。敢えて尋ねる事はしないし、来夜も自分からそれを晒す事はきつとない。しかし何らかの外的要因があるのは確かだ。以前の『人格』が覆われてしまう程に来夜は変化を遂げていた。

それでも《逆》として。

それは変わらず此処に居る。

「でも」

そう前置きし来夜は軽く目を細めた。

「お前も『人間』に近付いているじゃねえか。少しずつだけど」「そう？」

「ああ。月姫が傍に居る事自体、以前じゃ考えられないだろ。それに、俺や夜空がこうして同じ空間に居て、しかもこうして会話する事も拒んでいない。こんな事、前だったら有り得ない。劇的な変化だ」

「……………」

そうかもしれない。私は心の中で呟いた。

来夜程ではないけれど、私も変化している。それは私自身も感じていた。『こんな事昔なら有り得ない』と思う事がとても多くなった。

「多分それは一番嘉が分かって感じているんじゃないか？」

そう言って来夜はテーブルの上の水差しに手を伸ばした。自分のグラスに水を注ぎ、ついでに私と夜空の分も注ぐ。

こういう小さな行動にも、来夜の変化が鮮やかなまでに表れていた。

グラスの水を一気に飲み干し、来夜は淡い笑みを浮かべて再び口を開いた。

「この水だって、小さな原子の集合体だ。それが集まって水を構成

している。同じように自分も『人間』という集合体の一部だという事に気付いたんだ。一人の《人間》だという事にな。それだけのとき。自分が『人間』だったという事を理解した。そしたら、今まで心臓に重くのしかかっていたものが少しずつ軽くなっていった」「のしかかっていたもの」

「ああ。嘉にもそれはある筈だ。処理できない何か。形はないが確かにそこにある、心臓を鷲掴みにするような、押しつぶしてしまおうとするような。雁字搦めにして窒素させようとしているような。表現しようのない、晒しようのない、そんな感情とも表現できない『何か』」

「……………確かに」

私は素直に頷く。

それは否定しようがなかった。私も、そういう感覚を知っている。それはずつとまとわりつき、これからもずっと私を縛り付けるのだろうと思っていた。解放されることはない。

それが軽くなってきているという事は、無くなるかもしれないというのだろうか？ そう思った瞬間、私は無意識に口を開いていた。

「それが軽くなったのか？」

「ああ。まず、それが無意識に俺が抱いている無数の『問い』だという事に気付いたんだ。この前少し話した『誰の為あるのは何の為に生きるのか』というのもその一つさ。そういうものが積み重なり積もり積もって俺を拘束していた。……………それがちよつとずつだけ、楽になった」

「『人間』だって事を理解したから？」

「ああ。そしてそれを受け入れた。変わっていく自分を否定せず、ありのままをな。新しく分かった『感情』のせいで苦しくなることもあるが、あの胸の絞め付けに比べたらこんなの痛みにならない」

「……………そうなんだ」

私は視線を床に這わせ、相槌を打った。来夜の言葉はゆっくり私の心に染み込んでいくようだった。静かな水面に穏やかな波紋を広

げるように、ゆっくりゆつくりと。

結局、私次第なのだ。楽になるにも、苦しいままでいるのも。今まではどうにもならないと思っていたが、これに関してそれは当てはまらないように感じる。私でもできそうな気がする。

来夜は柔らかく微笑んだ。

「俺も嘉も、始まったばかりなんだ。これからも続いている。《不穩》から逃げられないとしても、この“道”はきつと『光』に向かつてる」

「……………」

私はそんな来夜を、只じつと見つめていた。

今はまだ決定的な答えは出せない。でももう少ししたら、出せるような気がする。出せると信じたい。

だから、その時まで。

(2)

「ああー、生き返ったわー」

月姫が風呂から上がって来たのは、来夜達が帰って一時間経ってからだった。単純計算、一時間半は入っていた事になる。もしかしたら二時間以上入っていたかもしれない。一体何をしていたらこんなに時間がかかるのだろうか？

月姫は肩にかけたタオルで髪を拭きながら冷蔵庫を開けた。風呂上がりの牛乳は月姫の日課だ。コップに注いで美味しそうに一気飲み。まるで見えているかのような動きだ。

そして私の居る方向に目を向けて。

「嘉、飲む？」

「いや、いい」

そう？と月姫は並々と注がれた二杯目も一気に飲み干した。私は呆氣にとられてその様子を見ていた。しかも私がリビングに居るのを分かったらしい。なんで分かったんだろう？

月姫はなんと三杯目の牛乳を注いでしかも牛乳パックも持っておりビングに入ってきた。私の向かいに腰を下ろして『うふふ』と微笑む(全部飲む気らしい……)。

「嘉、宿題でもしてるの？」

「一応」

「あ、そういえば宿題結構あったわよね、河柳。エスカレーター校だから学力低下防止の為とかなんとかだったっけ。難しい？」

「いや、別に。授業出れば出来るだろ、これくらい」

「嘉らしいわ」

うふふ、と再び笑って月姫は頬杖をついた。ニコニコニコニコと笑っているが、牛乳で酔っているって事ないよな？

私は広げたノートと教材に再び目を向けた。明日までに仕上げなきゃならない宿題だったがすっかり忘れていた。一応これは任意の

宿題だが、特にする事もなかったしやらない理由もないので仕上げ
てしまおうと勉強道具を広げていたのだ。

「嘉、結構宿題ってやる方よね」

「やらない方ではないな。他にする事もない暇人だし、やらない理
由もない」

「勉強嫌いじゃないのね。席次、いいんじゃない？」

「悪くはない」

「そうだろうねー。でも、河柳の中で『悪くない』っていうのは『
良い』って事なんだと思うわー。ブルジョア&エリート校だものね、
凄いわ」

「特に何かしてる訳じゃないけど」

また褒め殺しが始まりそうだったので私はそう言葉を挟んだ。シ
ヤーペンをノートの上に走らせながら小さく溜め息。

何かにつけて私を褒める月姫。私を褒めたって何も出てこないの
に月姫はそうする。しかもそれが嘘偽りを全く含まない本当の感情
から紡がれたものなので、私は毎回戸惑ってしまう。慣れていない
ので、なんだか居心地が悪く感じるのだ。

私は、褒められるようなものは一つも持ち合わせていない。

「嘉って、褒められるの苦手だよ」

そんな私の気持ちを読み取ったように月姫は言った。私は月姫に
目を向ける。

「……………」

「……………」

まるで視線を交わしているかのような瞬間。

見えない瞳に私が映る。

私がそこにある。

「しょうがないって言ったらそれで終わりだけど。一応私達でも恥
ずかしかったりするけどね。でも嘉。嘉はいいところいっぱいある
んだよ。嘉は無意識に自分を卑下しているところがあるけど。でも
私、本当に嘉が大好きなのよ」

「……………」

とても綺麗な笑顔。

吸い込まれてしまいそうな蒼い瞳。私という存在を包み込んでしまいうな。

こんな私を。

「……………」

返す言葉が見付からず私は俯き、再びシャーペンを走らせた。

月姫も無理に会話を続ける事なく牛乳に注意を置いた。やっぱり今晚で全部飲んでしまいうつもりだ。

沈黙した空間に、シャーペンが紙の上を滑る小さな音。私達はその沈黙を只共有していた。まるで沈黙が会話の一つであるように。

私はノートに字を埋めながらふと考えた。

《刺客》の空風くずさ・いぜなが月姫を標的にしたあの《不穩》。

ターゲット

そもそもあの時、私が月姫を助ける義理などなかったのだ。私は月姫という存在を知らなかった。只私の近くで《不穩》が起こっていた事は知っていたが、月姫が巻き込まれているものだとは知らなかったし、私は全くの無関係だった。いつもの如く《不穩》には出来るだけ関わりたくないと思っていた。

その矢先、月姫と接触があった。

その《不穩》が終焉に向かっている頃、丁度いたぶられ酷く扱われ放置された月姫に——その時点で月姫は失明していた——遭遇した。その時、月姫は一言私に言った。

助けて、と。

いつもならそれを当然のように無視して通り過ぎ、全くの無関係を貫いていただろう。しかしその時の私は違った。

無視出来ない何か。その何かが私の中に突如生まれた。それは一気に膨れ上がり、私の中に強い信念に似たものを植え付けた。

そして私は、月姫の手を掴んだ。くずさといぜなの《敵》となった。

その後《刺客》のくずさ・いぜなと私は直接相対し、私は二人を

再起不能なまでに《破壊》した。只、月姫には『月姫に二度と近付かないようにした』という風にしか説明していないから、月姫は奴らの詳しい状態は分らない。

全てが終わった後、病院に入院している月姫の元に行くと、月姫は私を強く抱き締めた。それから涙を堪えるような声色で小さく言った。

傍に居て、と。

そして今に至る。

私が伸ばされた手を掴んだ、唯一の人物。助けた只一人の人。

何故助けたのか、今でも分からない。でも、その答えは一つしかないだろう。

そう、それは

「……………嘉？」

と、月姫が不意に口を開いた。私は記憶を振り返り思案するのを中断して月姫に目を向けた。走り始めていたシャーペンも止める。

月姫の表情はどこかぎこちない。何か不安になっているような、淋しげな表情。私はこの表情を知っている。何か確信がほしい、そういう時月姫はこういう表情をする。

私は黙って続きを待つ。私には月姫の心の内を聞き出す術はない。だから月姫が口を開くまで、じっと待つ。

やがて唇を噛んでいた月姫は唇を開いた。

とても、とても静かな声色で。

それと同時に消えそうな声色で。

「どうして嘉は私を受け入れたの？」

それは予想外という訳ではなく

予想していた訳でもない問いだった。

月姫は同じ口調で続ける。

「私を助けてくれたあの頃の嘉は誰も、本当に誰も自分に近付けな

かったでしょう？まして私のような《被害者》は論外だった筈でしょう？助けを求めたのは私の方だけど、誰とも関わらず徹底的に拒んでいた嘉がどうして私を助けてくれたんだろうって不意に思う事があるの」

そう問う見えない瞳は、様々な感情が渦巻き蠢いていた。

まるで私の心を透視出来るのかと思うようなタイミング。まさに私が考えていた事だった。

「……………」

私は月姫を見つめた。

月姫の傷はまだ深い。いつも笑顔で隠しているものの、やはり完全に吹っ切れていない。

あれから、まだ数ヶ月しかたっていない。

もう随分遠い昔の話のような気がするが、つい最近終焉を迎えたばかりなのだ。《不穩》自体は終わっても、月姫の記憶や感情はまだそれに縛られている。忘れる方が逆に無理だろう。

そして私に問うた。

自分の存在価値を、その意義と意味を。自分は受け入れられるに足る存在なのかと。

私は目を細めて口を開いた。

月姫に伝う、言の葉を。

「あんただったから」

私は言い、続ける。

偽りのない、真実の言の葉を。

「あんたは自分から行動した。待つんじゃないで、自分で助けを求めた。あんたの目の奥に堅い信念が見えた。だから今も此処に居る。あんた以外の奴だったら助けていない。あんただったから、私は助けた」

『月姫だったから』。

繰り返し、私は月姫の反応を待った。

月姫は少し考えるような表情をしていたが、やがて笑顔をこぼし

た。照れているような、はにかんだ笑顔。そのいつもの微笑みを浮かべた瞳は、瞳が揺れる程の雫で潤んでいた。

そして月姫は眩しいくらいの微笑みで私に言った。

「大好きよ、嘉」

【終焉】（前書き）

孤独の星

絶望しか見えなくても

忘れないで

僕は此処に居る

【終焉】

（疲れた……………）

心臓がバクバクと鼓動している。この感覚が嫌いな私は壁にもたれて溜め息をついた。それを抑えようと深く息を吸う。

私は今、体育の授業中だ。近々ある『河柳高等部・ダンスパーティー』のダンスの練習をしている。これは毎年恒例の行事らしく、しかも結構大々的に行われるようだ。わざわざ授業でやるくらいだから、かなり力を入れているのだろう。

なんだか面倒くさい事この上ないのだが、月姫にダンスパーティーの事を話すと羨ましがられた。さすがに中等部ではこういうのはなかったから、一度は参加してみたかったらしい。私の代わりに出てくれないだろうか？

「……………ふう」

もう一つ溜め息をついて、熱心にステップを踏むクラスメートをなんとなく見つめる。パーティーでは賞も準備されているらしく、みんな真剣に取り組んでいる。本格的だな、と私はそれを第三者的に見ていた。まあ、強制参加だからやらなきゃいけないんだけど。

と、そんな私に気付いて走り寄ってくる人物。小走りで私のところに真っ直ぐ向かい、隣に並ぶ。

そしてにっこりと満月は微笑んだ。

「疲れちゃった？ 嘉」

「面倒になった」

「はは。基本嘉は動く事自体嫌いだもんね。でも嘉、ステップ上手いね、さっき見てたけど。もう練習しなくていいんじゃない？」

「上手いかどうかはともかく、しなくていいならもうやらない」

「基本は終わったからもういいかもよ。あ、そういえば嘉のパートナー誰？」

「さあ」

「わお、知らないの？フリータイム以外はその人と踊らなきゃいけないんでしょう？」

「らしいね」

一つ溜め息。

パートナーもこの前決まったが、どこの誰だったか全く覚えていない。というより覚える気はなかった。まあ、当日になればどうにかなるだろう。別にどうにかならなくてもいい。

満月は更に尋ねてくる。

「ドレスは？もしかしてないんじゃない？氷鳥にお願いしようか？」

「いや、いい。一応ある」

答えて私は視線を満月から外した。

ドレスは既に購入済みだ。妃七がメチャクチャ張り切って（何故あいつが張り切るのだろう？）、ダンスパーティーの話を聞くや否や、どこからか買ってきたのだ。呆れてしまったが、どうせ使うのだからと家に置いてある。

「そっか。じゃあ心配いらないね」

そう微笑み、一瞬何か言いたそうな表情を浮かべた満月。しかし言葉を飲み込むように顎を引き、正面に目を向けた。

「……………」

恐らく満月は、《刺客》の事を話題にするつもりだったのだろう。一瞬間を覗かせた《傍観者》の表情からそう読み取れた。しかし結局それは秘しておく事にしたようだ。

それは多分、それが『近い』から。《終焉》が近いと感じているからこそその反応だった。どうせ話題に上る事。だから敢えて今話す必要はないと。話さなければならぬ時まで黙っていようと。それまでは触れないでおこうと。

その判断は有り難かった。私自身奴の話をするのはあまり好きではない。話したってどうにかなるものではないし、消化できない何かが胸に引っかかっているような感じがするからだ。

その《終焉》は近い。

私はそれを《傍観者》として迎え撃とう。

「……………」

体育が終わり、着替えも済ませて教室に戻っている最中。

携帯に着信が入った。画面を確認してみると見慣れない番号が点滅していた。いつもの如く出ようか出まいか迷い、結局出る事にした。

『急に悪い。《情報屋》逆誓悟だ』

「……………ああ」

その相手は、誓悟だった。《敵》じゃなかった。少し安堵して続きを促す。

誓悟は同じ口調で続けた。

『奴の事で、少し。私と一緒に《仕事》をしている《俊光》^{スピード}の奏と七星が奴を監視しているんだが』

「ああ……………わざわざそこまでしてくれたのか」

『あんたは危機感というものが殆ど無いようだったからな。で、その二人から《情報》が入った。奴の鎖が増えた。奴はそろそろ動く。恐らく今日中に』

「……………」

やっぱりそうか。私は溜め息をついた。溜め息をつくくらいしかできなかった。

まあ、逃げられない結末だから今更どうにもしようがないけど。だけど、準備はできる。

《破壊》に備える準備は。

僅かな沈黙のあと、電話の向こう側は一つ息を吐いた。

『一応氷鳥にも様子を見るようには言っているが、気を付けてくれ。』

必ずしも氷鳥が傍に居られる訳じゃない』

「頼んだのか」

『取り敢えずな。あんたの『性質』を知らない訳じゃない。どんな状況や《不穩》もやがては味方にするというあんたの『性質』は本物だ。でもな、それはやるべき事をして初めてその威力が発揮されると思うんだ。あるいは被害を最低限にする事が可能になる。そう思う。迷惑だったか？』

「ではないけど。でも何故ここまでして私の味方をしてくれる？メリットはあるのか？」

『メリットか』

誓悟はそう言うのと、少し沈黙を置いた。返す言葉をゆっくり選ぶように。

そして。

『あまりメリットデメリットは関係ないな。そういう《同盟》もあるんだ。「力になりたい」、そういう思いだ。それがあれば利害は関係ない。あんたも《同居人》や《同類》に対して何か見返りを求める事はないだろう？それと同じだ』

「……………そんなものなのか？」

『ああ。私も少し前まではあんたと同じように思っていた。人間の関係というのは、利害関係だけだと。だけど自分の知らないモノを知った時、衝撃を受けた。自分の全てが覆されたようだった。だからあんたも、それを知る事ができるなら知ってほしいと思う。それはあんたにとって、絶対にマイナスになる事はない』

断言できる程の確信。

誓悟の口調からはそれが伝わってきた。静かに紡がれながら、しかし溢れる程信念に満ち満ちて。

《闇》に居ながらも、それは可能だと。

「あんたは私と同じ『色』が見える」。

そう言った誓悟の表情が蘇った。

以前は私と同じように、知らないモノが多かったという誓悟。そ

んな彼女が少しずつ『感情』を知り、それを『良い』と感じているのなら。それが正しい道なのだとしたら。あるいは、《光》に近付ける道なのだとしたら。

（これでいい）

私はそれを受け入れる事にした。

これで正しいと、いいのだと、今は信じたかった。信じてみようと思った。

今だけでも。

(2)

放課後いつものように図書室に居た私は、そろそろ人間も少なくなっただろうと図書室を出た。

だるい。いつもの如く、すっきりしない気分だ。どこがどうなのかよく分からないが、とにかく身体全体が重い。

「……………はあ」

溜め息をついて見上げた空は鉛色。青が少し雲の隙間から覗いている。雨は降らないだろう。なんだか最近はずれは少ない気がする。正面玄関を抜けて校門まで続く庭園を歩く。このやたらに長い距離もだいぶ慣らされたし、最近は周りの様子を見る余裕も出てきた。咲き誇る無数の花。手入れの行き届いた木々。きっとこれを管理するのにもかなりの金がかかっているのだろう。校内レストランから中庭のサービスからこの庭園から、本当に次元が違う。金持ちの考える事は分からない。

そんな事を考えながら歩いていて、その時だった。

「……………」

感じる。

べったりとまとわりついてくる視線、気配。背中にくっついているあからさまな殺気。

気付かない振りをして足を進めるが、その殺気はぴったり私に固定されている。思い違いや勘違いではない、確かな殺意。あるいは《復讐》。

いよいよか。

(……………誘き寄せるか?)

どうせ来る事だ。先延ばしにする必要なんてない。十分先延ばし

された、さつさと終わらせよう。

私は歩き続けて庭園から離れ、中庭を突っ切った。そのまま進み中庭も抜ける。思惑通りぴったりとその気配はついて来る。

その向こうの、部室が並ぶ部室棟の裏に足を進めた。そこはあまり人目につかない、死角になったスペースが空いている。高い外壁と部室棟の建物の隙間に空間があり、完全に外からの視界をシャットアウトしている。

此処なら心おきなく出来るだろう？

「……………」

ようやく私は立ち止まった。

感じる。背中に強い感情が突き刺さっている。間違いない、濃い《復讐》の感情が。

さあ、出て来い。私は逃げも隠れもしない。そう振り返った。

その時。

じり、と。

アスファルトを踏む音が聞こえて、奴は現れた。

「……………」

《刺客》空風いなさ。高い位置で結ばれた長髪、細い切れ長の目。

その肩や腰には、巻かれた鎖が揺れていた。

その瞳には、疑う余地の無い殺意。心臓を鷲掴みにするように強烈な感情。

「……………」

「……………」

そして私達は睨み合う。私達を隔てるものは一つもない。数歩歩けば手の届く距離を置いて私達は睨み合った。

そして僅かな沈黙も置かないまま、《復讐者》、空風いなさは口を開いた。

「私が誰か分かるよな」

初めて私に直接向けられた言葉。それは殺気だけを帯びて。

その低い問いに、私は目を細めた。

「ああ。私の同居人を《迫害》し私に《破壊》された奴らの妹だろ。《刺客》一族の一人」

「そうだ。私は姉さん達が《破壊》されたあの時から今日まで、お前への《復讐》だけを目的に生きてきた。そして今日それを果たす。私はお前を赦さない」

「お前に赦されなくても私は全然構わないんだがな。お前には認される必要も赦しを求める必要も感じない。まして逆ギレされるなんて心外だ」

「逆ギレ？」

いなさは私の台詞に、怒りに顔を歪め声を発した。不快を露わにし、威嚇するようにじりつと一歩寄る。

「何故私が逆ギレになるんだ？自分の姉妹を《生きる屍》にされたんだ。お前も同じように反応する筈だ。これは正当な《復讐》だ」

「さあどうだか。お前と一緒にするな」

私は短く返して睨み付けるように目を細めた。敢えて嘲るような色を加えて言葉を放つ。私の言の葉がこいつにどう作用しているかを確かめながら。

私との言の葉の掛け合いに、安易に乗ってきてもいいのか？もう既に《破壊》は始まっている。それにいとも簡単に乗せられて、私のペースに飲まれて、それで私に勝利するつもりか？

ナメるな。

お前の武器は殆ど使わせない。その前に終わらせてやる。

「どうしてそんな目してんだよ」

私の挑発的な視線に苛立ちを露わにし、いなさは口調を荒げて表情を歪めた。拳を握りながらももしかはまだ動かない。

私は変わらない口調・表情でそれに答える。

「どうして、ね。お前を恐れていないというだけの事だ。……………私を殺してそれで済むならやればいい。私は抵抗しない。でも、本

当に殺す覚悟はあるのか？」

いなさを揺さぶるように言い、軽く腕を広げる。いなさは不可解なものを見るかのように私を見つめていた。

確かに不可解だろう。自分から殺せと口にして煽るのだ。予想外だったのかもしれない。あるいは私の言の葉に惑わされまいと、言の葉の裏を探っているような表情で私を見つめている。

私の《破壊》の言の葉に裏はない。あるのは『作用』だけだ。紛れもない『結末』だけ。

動かない奴に、私は続ける。

「絶対的な《善》など存在しない。私達は自分の心の赴くままに正邪を判断している。そうだろ。私はお前の姉妹を《破壊》した事を後悔していない。私の《善》という判断のもとに行っただからな、罪悪感など皆無だ。お前にとって私は《悪》かもしれない。だが忘れんな」

私は宣言するように。

「私にとってお前の姉妹は《悪》であり、そして『破壊する側』だったってことをよ。《闇》の人間はいつか自分も攻撃される場合がある、《復讐》を受ける可能性が高いということを明記する必要がある。それは絶対不可欠だ。あいつらは私の同居人を《迫害》した。《被害者》になったところでその事実に変わりはない」

「五月蠅い！」

いなさの怒りはその言の葉で頂点に達し、動き出した。地面を蹴ったと思った次の瞬間、肩にかけてあった鎖が宙を舞い、私の首に巻き付けられた。私は抵抗する間もなく壁に追い込まれ首を絞められる。

「ゆっくり恐怖を味わわせながら殺してやる。あんたは危険過ぎる。あんたを生かしておくわけにはいかない。空風の名にかけて、姉さん達の為にも……………」

「……………」

ゆっくり、ゆっくりきつく絞められる鎖。冷たい感触がぎりぎり

と首に食い込んでいく。

私は抵抗しない。表情も動かさずに只、鎖の両端を引くいなさを見ていた。

どうせ抵抗したところでこの状況は打破出来ないし、力の無駄だ。いつものように、流れるままに任そうと私は動かない。

こいつはだいたい精神的な余裕を失っている。上手く私をコントロール出来なかったので焦っているのが分かった。だから結局力に頼った。こういう奴らの行動パターンは大体決まっている。

所詮、こんなものか。《闇》に進出したばかりとは言っていたが、生ぬるい事この上ない。結局はこんなものなのか。

手応えらしき感触は全くない。

「……………」

みぞおちに、奴の膝が入った。鈍い痛みに呼吸がさらに困難になる。力が抜けそうになる足を無理矢理立たせる。

しかし流石に意識が朦朧としてきた。なんとか気力で意識を繋ぎ留め、目の前の鬼の形相を見つめる。

引きつった、色々な感情が入り交じる複雑な表情をして私を見つめている《復讐者》を。

「なんで抵抗も何もしないんだよ！」

《刺客》は理解不能というように叫んで私の喉を絞め付けていた鎖を緩め、私を突き飛ばした。鎖を両手に構え、得体のしれないものを見ているように私を見つめている。

私は取り敢えず体勢を整え、酸素を確保して溜め息をつく。喉が痛むがそれは無視する。ゆっくり体を真っ直ぐに戻す。

抵抗してほしかったのか。あるのは何らかの反応が欲しかったのだろう。しかし私はこいつの望むものは何も与えるつもりはない。むしろ奪うつもりでいる。

「何故、か」

壁にもたれて私は口を開いた。目眩がする身体はもはや自力では支えられない。壁から離れたらすぐ倒れてしまいそうだ。ちよつと

やられ過ぎたか。

でも私には負けはないという確信があった。

お前のレベルはそんなものか。

「お前、まさかとは思うが、私がどんな《種族》かを知らないで《復讐》を仕掛けてきているのか？」

嘲笑し嘲笑う。

こいつの無力さを、嘲笑う。

「私は《傍観者》だ。私は心理戦ではお前に絶対に負けない。肉弾戦であっても、心理戦にすり替える事ができる。殺せるものなら殺してみろ。私は抵抗しないし、死ぬのは別に怖くない。いつも死は意識しているしな。……お前、私の『性質』を知らないのか？ 《傍観者》の『性質』は《不穩》を引き寄せ、そして自分に有利な方に少しずつ動かす。まるで味方にするように、無意識にな。どんなに不利になってもだ。だからお前が私に《復讐》しようと思った時点でお前の負けは決まっていたんだ。最初から私の手の中だったんだ」

「そんな筈はないっ！ 絶対にお前を殺してやる！」

「じゃあやってみろよ。私は逃げないとさっきから言っている。さあ、殺せ。《復讐》を果たせばいい」

私は返し、手を広げた。

《刺客》は唇を噛み締め、背後から鎖に繋がったナイフを取り出した。一步、また一步と近付いてくる。私はその場所から動かずにそれを迎え待つ。

「あああああああ！」

奴は腕を振り上げその切っ先は私の首に触れるように当たった。スッと軽く皮膚を撫でた感触が伝わる。浅く皮膚を斬られたようだ。しかしそこから動かない。刃を握る手の震えが、切っ先から伝わる。生暖かいものが首を伝うのが分かった。

そして奴は感情を必死に押し殺し、呻くように口を開いた。

「何故姉さん達を《破壊》した………」

「本当に知りたいか」

私は低く尋ねた。

さっき『性質』を簡単にはいえ説明したというのに自分からわざわざ《心理戦》に深く入り込んで来るとは。こいつは馬鹿なのか？それともそれに勝利する自信でもあるのか。後者ではなさそうだが。恐らくもう自分の感情をコントロールできないのだろう。

だからお前が負ける事は明らかだと言っただろう。

私は一つ息を吐き、言葉を晒した。

奴を侵蝕する言の葉を。

「こうなる事が最初から分かっていたからだ」

「……………」

私の抽象的な表現に《刺客》が困惑したのが分かった。

わざと具体的な主要な単語を省いた台詞。何がこうなると分かっていたのかは、こいつの想像次第だ。今の混乱し半ば理性を失ったこいつの頭では、多分考えはまとまらない。色々考えを巡らせて思案した挙げ句の果てにはショートを起こすだろう。何が正しく何が間違いなのか、それすら判断出来なくなる程に混乱するだろう。恐らく自分が何をしたかったのかすら分からなくなる。つまり自爆してくれるわけだ。

これくらい私にとって造作ない事だ。

私は畳み掛けるように続ける。

「お前は自分の姉の為に今生きていると思っっているんだな。それはそれで構わない。でもその姉達はもう二度と戻らない。死よりも冷たい『生きる屍』だ。それで私に《復讐》したところでなんになる。姉達はそれから解放される訳じゃないんだ。お前がしている事は只のエゴイズムだ。お前の感情を満足させる為だけの行為。姉の為に笑わせるな。偽善者が。……………私は《復讐》を否定しているんじゃない。それをするかしないかはそれぞれの決定だからな。でもその

お前の動機が偽善的だと言っているんだ。姉の為にと謳って偽って、自分の感情の為に《復讐》をしているだけだ。『理由』が偽善的で独善的。それを語るだけの意味も価値もない」

「……………いっそ、姉さん達を殺してくれた方がよかった」

「殺す？」

絞り出されるような台詞に、私は無表情にいなさを嘲笑った。

最上級の侮蔑と軽蔑を持って。

くだらない事言ってんじゃないやねえよ。

私は《傍観者》だと言った筈だ。

「馬鹿じゃないか？ そんな生ぬるい事しねえよ。私は私の《敵》に易しい道を歩かせるつもりなど毛頭ない。本当の地獄を味わわせる。《復讐》など出来なくなるまで、徹底的にな。だから徹底的な《破壊》をしたんだ。当然の報い、言い換えれば《復讐》をな。私のした事は当然の事だ」

「……………そんな筈、ない」

「お前が、自分がしているのは正当な《復讐》だと主張するのと同じ。私がお前の兄弟にした事は当然の事だ。そしてお前の兄弟は私に敗北した。それだけだ。その事実是不変ならないし、お前は過去も未来も何も変えられない。それならお前は何の為に此処に、私の前に居る？」

「……………うう」

「お前は自分が絶対的に正しいと思っていたんだろ。そもそも《闇》に正しい答えなんてあるのか？ それぞれ自分が正義なんだ。だからそれぞれがそれぞれの基準で裁き、《復讐》という螺旋が続くんだろ。それを完全に断ち切るには《敵》の一味を一掃するしかないだろうな。そうだろ」

「……………」

「そうだ、言い忘れていたが、どうやら《制裁者》がお前ら一族を《制裁》しに行ったらしい」

「……………！」

私の言の葉に圧されて引きつっていた《刺客》の表情が更に強張った。目は恐怖に怯え見開かれている。私は構わず続ける。

「奴の事だから、生かさず殺さず、だろうな。限りなく死に近い生だ。お前も奴の実力は知っているだろう。もうお前らに勝目は無い。お前だけじゃなく一族諸とも《闇》から『名』を消してやる」

「何故！何故一族をっ」

「お前の姉も全く関係ない人を標的にしたんだ、誰が誰を標的えものとしようが、驚く事でも不思議がる事でもない。しかも《闇》でその問いは愚問だ。言っただろ。くだらない《復讐》の連鎖を切る為には《敵》の一味を根絶やしにする必死があると。私を《敵》にするとはそういう事だ。……なんだよ、そんなに結束しているわけではないんだろ。なら絶滅したってどうって事ないだろ。もし結束していても私は容赦しないがな」

「……………」

「そもそも、《復讐》に絶対的な理由は要らない。兄弟の為とか一族の為とか、お前はくだらない理由付けをし過ぎなんだよ。もし理由付けしたならそれを全うしろ。せめてその理由を根拠に最後までそれを固守しろよ。それも出来ないような中途半端な奴が《復讐》を唱えるんじゃないよ」

「そんな事……………」

「これが《復讐》だ」

私は言い放った。

呆然と立ち尽くす《刺客》は、もうさっきまでの強気のオーラはすっかり消え去っていた。手に握っていたナイフは手をすり抜け、じゃらじゃらと鳴る鎖と共にコンクリートの上に落ちた。こいつの武器は殆ど無意味だった。私の言の葉は、着実に確実に、そして容赦ないまでにこいつの精神を蝕んでいる。

もう少し。あと少しだ。

私は一呼吸置いて息を整えた。

「だから言っただろ。生ぬるいと。《闇》をナメるな。感情に流さ

れるままに自分の力量以上の事をしようとするからこういう事になるんだ。あまりに軽率な行動、その結果がこうなるのは必然だ。勝算のない戦いだという事に気付かず《不穩》をふっかけてきたんだからな」

「……………」

「結局お前は《復讐》を果たすどころか、一族を破滅へ追いやった。お前の無知の代償だ。自分の《復讐》が新たな《復讐》を呼ぶ事は予想していなかったのか？私の後ろに《制裁者》が居る事にも気付かなかったのか？《同盟者》の存在は考えなかったのか？私が《傍観者》であるのを忘れていたのか？その時点でもう勝敗はついている。私には最初からこの結末は見えていたがな」

「ああ……………」

事実と言の葉を突きつけられたいなさはガクガクと体を震わせて後ずさった。その目には怯えと恐怖が色濃く滲んでいた。

私はもたれていた壁から体を離し、腕を広げて口を開いた。

さあ、仕上げだ。

奴に絶望を。

「さあ、それでも私を殺せるのか？」

「……………」

その瞬間確かに奴の心が砕け散る音が聞こえた。

こいつの全てを拒絶し否定する言葉は、一つ残らずこいつの心を侵蝕し、跡形もない程バラバラに。再起不能なまでに粉々に。

「……………」

ただの抜け殻となった《刺客》はゆらゆらと視点の定まらない目を有らぬ方向に向けて、私に背を向けた。そして何かをブツブツ呟きながらフラフラと歩き出す。そのオーラからは正気は全く消えていた。やがて建物の向こうに姿を消した。私は奴が私の視界から完全に失せるまでその背中を見送っていた。

《破壊》完了。奴の後始末は氷鳥に任せよう。その辺はあいつが向いている。

「……………」

私は壁にもう一度もたれ、ズルズルと座り込んだ。酷くなる目眩と頭痛に溜め息をつく。切られた首に手を当てると思ったより出血していた。ポケットからハンカチを出して首に当てる。いつもの事だが、結局怪我はしてしまった。

でも。

終わった。奴の《破壊》は完了した。

この頭痛と目眩さえなかったらもう少しすっきりした筈なのに。ようやく終わったというのに気分悪すぎだ。《破壊》の後だからしょうがないけど。

しかし、終わった。

終わったのだ。今はそれだけでいい。

「……………」

私は小さな空を仰ぎ、目を閉じた。

休もう。

もう少しだけ。

そう思った時だった。

「嘉」

私を呼ぶ声。私は瞼を開いてその主に目をやる。

そこには、氷鳥。早足で私の方に向かっている。タイミングがいんだか悪いんだか、という感じだ。

氷鳥は心配の色の濃い表情で私を見つめ、屈んで視線を合わせた。

「大丈夫か、嘉」

「……………なんとか」

溜め息混じりに答えると、そこで氷鳥は私が抑えている首に気付いた。

「首、どうかしたのか。シャツまで血が滲んでいるぞ」

「まあ」

「見せてみる」

「いい」

「いいから、見せてみる」

「……………」

強く言う氷鳥に押されて私は渋々手をのけた。氷鳥はハンカチを受け取って傷の具合を確かめる。

「良かった。思ったより傷は浅いみたいだな」

「だから大丈夫って言ったのに」

「嘉の『大丈夫』は心配なんだよ」

そんな事を言っただけで溜め息をつく氷鳥。ハンカチを私に返して抑えるように言う。私は氷鳥の『心配』という言葉に眉を顰めて口を開いた。

「なんでしょっちゅう、そんなに私の心配ばかりするんだ」
分からない、というように問う。

その問いに氷鳥は一瞬ドキッとしたような表情を浮かべた。しかし次の瞬間にはそれを隠すように薄く笑った。

敢えて『制裁者』として。

「確かに、ただの『同盟者』なのに心配するのはおかしいかもな。だけど、心配なんだよな。考えないようにしても気になってしょうがないんだ。嘉だから」

「……………」

『嘉だから』。

確か以前に似たような事を尋ねた時、同じように返されたような気がする。あの時も言葉を濁し、曖昧な色の強いこういう返事を聞いた。

何故濁すのか、その理由は分からない。でも今は言えない理由があるのだろう。あるいは聞いても私には理解できないものなのだろう。

今は、聞かなくていい。多分、いずれ分かる事だ。今は。

「そういえば、さっき誓悟から電話があった」

話を変えて氷鳥が口を聞いた。胡座をかいて私と向かい合う。

「今日奴は動くだろうってな。だからできるだけ嘉の近くにいるようにって。本当はもう少し早く来たかったが、ちょっと用があつて離れていたから遅くなった。悪かった」

「ああ、別にいい」

眩暈がする私は適当に相槌を打って目を閉じた。息を深く吐いてゆっくり目を開ける。

そんな私に、氷鳥はにっと笑んだ。

「キツそうだな。……………《情報》提供も兼ねて、逆邸に行こうかと思ったんだが。向こうなら休むスペースもあるし。休むだけなら保健室でもいいけど」

「あー……………《情報》をくれたから何か返さないといけないしな。向こうに行こうかな。案内してくれるんだろ」

「勿論だ。じゃ、迎えを寄越すから」

安心したように笑って氷鳥は携帯を取り出した。立ち上がって少し離れ、何やら二言三言話して携帯をポケットに滑り込ませる。そしてまだ座り込んでいる私に顔を向けた。

「すぐ向かうそうだ。……………相当気分悪そうだな。歩けるか？無理だったら車この近くまで呼ぶぞ」

「車？敷地内にか？」

「ああ。緊急時用に、学園敷地内専用の車があるんだ」

「ああ……………いいかな」

目立ってしょうがないし、そこまでじゃない。そんな恥ずかしい事したくない。

「そうか」

苦笑いして氷鳥は空を見上げた。

アポなしで誓悟を訪ねると、今定期検診中だという事で少し待つ事になった。待っている間にメイドがティーやお菓子を準備してくれた。

私は用意されたティーに口をつける。それが中でじんわりと広がると、なんだか気分が少し楽になった気がした。

「……………ふう」

ソファに身を全く任せて溜め息をつくとき、正面のソファに座る氷鳥が目を見た。穏やかな瞳に私が映る。

「ちよつとは良くなったか？気分は」

「ああ、まあ」

「良かった。さっきよりは顔色がいい」

淡く微笑んで言う氷鳥。私は何故かそれを直視できず、氷鳥から視線を外して誓悟の事に触れた。

「検診、ちゃんと受けるんだな。なんか意外」

「ああ。というより、一義が毎月一回はさせるらしい。誓悟の場合、空腹中枢に少し異常があつてな。全く空腹を感じないらしいから。で、栄養士がちゃんと食事や栄養を管理はしているらしいが、なんせ殆ど食べれないからな。無理矢理食べたら戻してしまいうらしいし。だから一応ちゃんと調べるんだと」

「……………へえ」

頷く。そしてふと浮かんだ質問を投げる。

「それは、あの瞳の色なんかと関係あったりするのかな？」

「そうだな。奏や七星もそうだが、誓悟は俗に言う『変異体』でな。瞳や髪の色が普通じゃない、先天性のものだ。誓悟は瞳だけ鶯色だが、だいたいは奏達のように瞳と髪の方の色が一般的なものじゃない。『変異体』は殆どの場合『才能』と『ハンディ』の両方を持つ

って産まれるんだ。誓悟の場合は、『侵略』と呼ばれる程のハッカ
ーとしての『才能』と、空腹中枢の異常と独りでの移動が出来ない
という『ハンディ』だ」

「……………成る程ね」

「結構『変異体』はいるぞ。一義もそうだし、ほら、あの保健医の
願とか。『最強』もそうらしいし」

「七星もだよー」

その時、此処にいない女の子の声がした。その声のした方に目を
向けると、『俊光』北斗七星がこちらに歩いてくるところだった。
会話を聞いていたらしい。

くるぶしまである水色の髪。眠そうな同色の瞳。確かこの前来た
時は、彼女の兄貴に風呂に連行されていた。

ゆらゆらとゆっくり歩いてきた七星は氷鳥が座るソファの隣の大
理石の床にぺたんと座った。ミニのジーンズなので素肌が床に触れ
ているが寒くはないのだろうか？

そんな私の心の声など届く筈もない。七星は幼い水色の瞳で私と
氷鳥を交互に見つめて口を開いた。

「七星と奏兄ちゃん君はね、動ける時間がすごく限られているの。
特に七星は短いから、ちょっと早めに切り上げてあとは兄ちゃん君
にお願いしたの」

「ん？今奏は『仕事』中』って事か？」

文章的に少し変な台詞に氷鳥が尋ねると、七星はうん、と頷いた。
「七星は、どんなに頑張っても連続五時間が限界。その日によるけ
どー。すごく燃費が悪いんですー……………」

そう言う七星はソファにもたれて目を閉じ、あつと言う間に眠
ってしまっていた。一瞬演技か何かかと思ったが、『すー』と寝息
が聞こえてきた。真剣に眠ったらしい。

いくらなんでも寝付くの速すぎだろ。ていうか、失神に近い……
…？

「『強制終了』させられたな」

氷鳥は苦笑して立ち上がった。七星を抱きかかえて向こう側のソファに寝かせる。その間も起きる様子は全く無かった。まるで死んだように、とはまさにこの事を言うんだろう。

こちらに戻ってきながら氷鳥は続ける。

「多分この様子だと、さっき七星が言った活動可能時間ギリギリまで動いていたんだろうな。それを超えるとああやってぷつぷつ切れたように眠ってしまうんだ。『待った』が効かないって奏が言ってたな。たとえば《仕事》の途中だったとしても限界がきたら『強制終了』させられる。だから気をつけているらしい」

「それが彼らの『ハンディ』ってわけか」

溜め息。なんだかそれもそれで大変そうだな、と思った。『才能』と『ハンディ』。それが二つでセットなら私はそれはいらぬ。そういう『制限』があるくらいなら『才能』は結構だ。

そういう面で、私はまだましな境遇に居るのかもしれない。

「ああ、そうだ」

氷鳥が何かを言いかけた時、ドアが開いて閉まる音がした。こちらに向かって歩いてくる足音が二つ。私達は目を上げてその音が近付くのを聞いていた。

「済まない、待たせた」

そして、《侵略》誓悟が姿を現した。ポーカーフェイスに鶯色の瞳、薄い桃色のちゃんちゃんこ、黒いジーンズ。

その隣には、長身の男性がいた。色素の薄い髪に、同色の穏やかさが滲み出た瞳。初めて会う筈なのにどこかで見たような覚えがある。

その人物は氷鳥を見ると穏やかに微笑んだ。

「やあ、氷鳥。久し振りだね」

「そうだな。今日は休みだったのか？」

「久し振りにオフだったんだ」

「そうか。……紹介しよう。天星織嘉、同級生だ。嘉、彼は俺。顔くらいは知っているんじゃないか？」

「……………ああ」

名前を聞いて思い出した。

滝。月姫が好きなアーティスト『A c t i v e』のリーダーだ。CDか何かの写真で見たことがある。そして、誓悟の恋人という事だった。

滝は、よろしく、と淡く微笑んだ。確かまだ二十歳そこそこだった筈だが、それを感じさせない落ち着いた雰囲気を纏っていた。

滝は氷鳥に目をやった。

「氷鳥が来ているという事は、『闇』関連だね。俺は少し外そうかな。誓悟、下のスタジオにいるから何かあったら電話して」

「分かった、ありがとう」

滝は誓悟の頭を撫でて私達に会釈し、部屋を出て行った。

「どうだった、検診は」

ソファに腰を下ろす誓悟に氷鳥が尋ねた。自分もどっかりと腰を据える。

誓悟は肩を竦めた。

「毎度の如く精密検査が必要らしい。……………面倒くさいな、身体というものは」

「いやいや、大事にしないと。身体あつての命だ」

「面倒くさい身体だよ。『普通』に生まれたかった」

深く溜め息をつく誓悟。持って産まれたものに対する誓悟の胸の内が表れているようだった。

私に目をやり、誓悟は口を開いた。

「どうやら終わったみたいだな。怪我はそれだけで済んだのか？」

「まあ」

「流石だ」

小さな笑みを作って誓悟は私の首のガーゼに視線を移した。さっき車の中で氷鳥が処置したのだ。

再び私に視線を合わせて誓悟は再び尋ねてくる。

「で、あいつはどうした」

「《破壊》した」

「『生きる屍』、か」

問うのではなく呟くように誓悟は言った。私は只頷き、紅茶を喉に流し込む。

僅かな沈黙を置いて誓悟は言葉を晒した。

「《情報》として教えてほしい。《破壊》は楽だったか？」

それは《破壊》を問う言葉。

あくまで《情報》という事で私はそれに答える事にした。

「全く問題は無かった。私の《敵》になるには役不足だ。自分から『心理戦』に突っ込んでくるんだ。多分あいつは自分が自分を追い込んでいる事に気付かなかったんだろうな。半ば自爆したようなものだ」

「成る程ね。どうやって追い込んだんだ？ 具体的な内容を簡潔に」

「あいつの《復讐》の基になっていた感情や理由に疑念を抱かせて否定した。『誰かの為に』というあいつの持論を全て拒絶した。それだけだ」

「完全な存在否定、という訳だ。人格や持論を、というより奴の『全て』を。その場において一字一句漏らさず聞いてみたいものだ。次は奏を張らせてマイクでも付けさせようか」

「…………盗聴か」

「冗談だよ」

ニヤリと唇を歪ませて誓悟。しかしこの人が言うとは本当にやってしまいそうだ。実はもうやっていたりして。

「しかし」

遠くを見つめるように目をあげ、誓悟は口を開いた。

「『言の葉』をそこまで極められるというのはなかなかない。ここまできると、そこらの武器よりよっぽど恐ろしいな。他の武器のように『携帯』する必要もない。しかもそれは進化しているんだろう？ それならそれを警戒して始末してしまおうとする輩が次から次へ現れるだろうな」

「……………やっぱりそうなるか」

最近特にそういう奴らの『気配』を感じてはいたけど。先月の《透視者》も、私に勝利できたら自分の《名》が上がるのかなんとか言っていたか。それはいくら何でも私を過大評価し過ぎだと思うが。誓悟は視線を私に戻した。

「まあ、その都度警戒すればいい。あと、《同盟》も忘れずに。………それで」

話題を変える前置きをし、誓悟は真っ直ぐに私に視線を向けた。一寸のズレさえない、信念の瞳で。そして私に問う。

「『色々』知る心構えはできたか？」

この前此処に來た時の続きを続けるように、一つ問い。

自分と同じ『色』だと私を表現した誓悟。自分の知らない『色々』を知り、それにはそれを受け入れる事が必要だと。

私の答えを待たず誓悟は続ける。

「『覚悟』という言葉は好きじゃないが、この事に関して、最初はそれに似た心が必要だ。決意とでもいうのか。そうでもしなければ出来ない事だからな。それは私も経験しているから分かるつもりだ。あとは、それを受け入れられるかどうか、それを望んでいるかどうか。それにかかっている。……………ああ、答えたくないなら答えなくていい。今までのものを壊していくにはエネルギーが要るものだ」
静かな声はそう言葉を紡いで静寂を続けた。

その答えは、もう定まりつつある。まだ揺れる事もあるが、ほぼ固まってきた。優柔不断であるつもりはないが、この事に関しては柄になく私は慎重になっていた。
でも。

「そうだな」

私は口を開いていた。

「まだ発展途上だけど。少し『色々』考えている。今は細かい事は晒さないが」

今は晒すのは望まない。私の中の不可解で未解決の『感情』は、私がそれを理解し受け入れられるまでは他人には秘しておく。自分の中に浸透した後、晒すかどうか決める。

その頃には、私が口にしなくとも明らかにしているだろう。だから、その時まで。

「そうか。今はそれでいいと思う」

誓悟はそう返し、うつすらと淡く笑んだ。『そういった』ものを知らなかった人物とは思えない程に自然な微笑みだった。

「……………」

私は視線を落とし、ティーを口につけた。

また一步、前進できたような気がした。この道が何処に続いているかはまだ分からないけれど。

《光》に向かってしていると信じたかった。

【終の始まり】（前書き）

答えはまだ
見つからない
けど今は
それでいい

【終の始まり】

(……………なんだ、この騒ぎは)

《刺客》と相対した次の日。

寝過ごしたせいでいつもよりだいぶ遅い時間に登校した私は、教室の騒々しい様に眉を顰めた。

騒がしいのは確かに今に始まった事じゃない。ありふれた光景とも言えるかもしれない。しかし今日はその『騒がしい』というジャンルが違った。

わいわいと会話するような団欒という感じではなく、何か緊急事態が起こっているような緊迫感。そういう感じが教室を満たしている。

取り敢えず席に向かう。私が腰を下ろすと同時にチャイムが鳴り、担任の臨安我哲留りんあんがてつるが入ってきた。この人は本当に、いつもぴったり時間を合わせてくる。

クラスメートは担任が入ってくると同時に席につき、静かになった。そんなクラスメートを見回し担任はいつも通り挨拶をして出席係に出欠の確認をする。

「おはよう。今日の欠席者は」

「いません」

「先生、あのー」

と、一人のクラスメートが手を上げた。担任はその生徒に目を向けて続きを促す。その生徒は担任に尋ねた。

「昨日、河柳の生徒の自殺未遂があったって聞いたんですけど」

「自分で車に突っ込んだとか」

「重体って聞きました」

「一年生なんですよね、噂によると」

クラスメートが口々に言う。

「……………」

私は黙ってその騒ぎの言葉を聞いていた。ふと目を満月の方に向けてみると、満月も意味深な表情を私に向けていた。

まるで昨日の事を知っているかのように。

「静かに」

担任は手を上げてクラスメートを静めた。壇上の（この時代に珍しく、河柳には教壇がある。他の学校にはないらしいけど）テーブルに手を置いてクラスを見回し、一つ溜め息をついた。

「昨日、二組の空風いなさが目の前で車道に飛び出してはねられた。一命は取り留めたが今は集中治療室に居る。自殺未遂か事故かははっきりしていないが……………まあ、今はこれくらいしか言えないな。騒ぐなっていうのは無理だろうが、取り敢えず今は現状報告だけしておく。あとは……………特にない」

「……………」

私は担任の言葉を聞きながら、昨日のあいつの様子を思い出していた。

あの後、か。成る程ね。

一人納得して視線を外に向ける。思った以上にあいつの精神は《破壊》されていたようだ。あるいは、事故に見せかけた《制裁者》の《制裁》なのか。後者である確率は低いと思うが。

そんな事を考えながら私は遠くを見上げていた。

「嘉」

一限目の授業の為に移動をしていた私を担任が呼び止めた。いつ

ものポーカーフェイスで私を見詰めながら私の隣で足を止める。

「何か言ったのか」

何の前置きもない言葉。

しかし私はその問いの意味を理解していた。何故担任がこんな問いを私に投げるのかも分かっていた。だからそんなに驚く事もなかった。

私は肩を竦めて溜め息をついた。

「少し」

「そうか」

担任はそれだけ言って小さく頷いた。

「いや、うわごとで空風いなさがお前の名前を読んでいたからな」

「……………私の？」

「ああ。だから何かあったんだろうなと思った。本当はお前に責任を追求する必要があるんだろうが……………でもそれは『普通』の人間が関われない《世界》での事なんだろう」

「……………」

私は黙って只頷いた。

この人は一体どういう人なのだろう。私とその《世界》に關与する事はないが、その《世界》というものを知っている。たった僅かな情報から全体像を掴む。

この人は只者じゃない。

あるいは。

担任は目を細めて私に目を向けた。

「俺にはこれ以上何も言う言葉はない。『普通』の正邪の基準とお前の《世界》の基準とでは根本的な事から違っているんだろうな。……………これだけは言わせてくれ。何をするにも気を付けてくれ。ある部類の人間にとってはお前は《善》ではないかもしれないが、お前はお前が考えている程どうでもいい存在なんかじゃない」

そう言うとき担任は向こう側に歩いて行ってしまった。その颯爽とした後ろ姿を見送り、私は溜め息をついた。

なんて言うか。

すごく不思議な感覚だ。

「嘉一」

と、私を呼ぶ新しい声。私はそれを無視して歩き続ける。すると後ろから早足で足音が近づいてきた。

その人物は私の隣に並び、苦笑いを浮かべた。

「嘉、ちゃんと聞こえてたでしょ」

「さあ」

「嘉らしいっちゃ嘉らしいけどさ」

そんな事を言って満月は頭を振った。外ハネの髪がさわさわと揺れる。

そして満月は、不意に《傍観者》の表情になった。それは奴の事に触れるという前置きのように。

その声色も《傍観者》で。

「《破壊》、したんだね」

確認するように。只ありのままの事実を確かめるように。

私は頷いた。

考えてみれば、今回の《不穏》に満月は殆ど関わらなかったような気がする。満月は満月で、夜明の事も色々あって学校を休みがちだったし、何かとタイミングが合わなかった。だから結果報告という形になった。

条件が違えば、こんなにも結果が違うのだ。こんなに近くにいないから《不穏》に巻き込まれずに済む場合もあれば、遠く全く接点がなかったにもかかわらず巻き込まれる場合も。先月のような場合も、今回のような場合も。

毎度毎度、私の周りに集まりすぎだ。

「ね、嘉」

満月は僅かな沈黙を挟み、口を開いた。それは何かを思っているような色で。

そして続ける。

「今回あたしは殆ど何も出来なかったけどさ。どうだった？この《不穩》で、答えは出た？」

誰かあるいは何の為に生きるのか。その問題に対する、はっきりとした答えは出せたかと満月は問う。

「まだだな」

私は短く返して目を伏せた。

こんな短時間で出るような問いではないと思っている。これだけの限られた時間で出るなら、私は今こうして此処にいないだろう。何度も試行錯誤し、持論を引っ張り出して整理し、じっくり考察する事はきつとない。これは時間をかけるべき問題。性急に結論を出すものではない。

でも、必ず出してみせる。

その短い答えで私が思った事を大体察したのだろう、満月はそれ以上突っ込んでくる事はなかった。

私は顔を上げた。

「いずれ、明らかになる」

「そうだよね」

私の言葉に頷き、満月はうつすら唇を横に引いた。

(2)

(ああー……………)

私は以前の習慣に則り、図書室でぼうつと時を過ごしていた。最近では中庭に居るのが多かったので久し振りの気がする。あ、昨日も来たっけ。

昨日の酷い頭痛と目眩はだいぶ楽になっていた。《不穏》が終わったのが大きく関係しているのは否定出来ない。頭痛で《不穏》の接近を感知するなんて、天気予報じゃあるまいし。

「……………」

ドリンクバーで淹れたコーヒーを喉に流し込む。暖かいものがじんわりと胸に広がっていった。

何もない、こんな時間を過ごすのも悪くない。《破壊》の後だからこそこういう時間は貴重だ。

もう少しこういうのが続けばいい。

「……………」

そして私は考える。満月が問うた、『生き方』について。

兄弟の為に私に《復讐》を仕掛けた《復讐者》。その結果は悲惨なものになった。自らの破滅を招いた。

この数日の間で『誰かの為に』という生き方自体に対しての否定的な考え方はだいぶ薄くなった。それが悲惨な結果になるのが、それはその人の生きざまなのだ。エゴイズムだろうが、何だろうが。だからそれを否定する意味も理由もない。

かと思えば夜明のように、積極的な方向に向かう場合もある。一時的な苦痛を伴いながらも、結果的には望ましい方向へと向きを変えた。

しかし私がそういう生き方を奨励する事はない。私自身はそういう生き方は今のところやろうとは思わない。

それが良い生き方なのか、その反対なのか。結局はつきりとした答えは出なかった。でも構わない。

今は出なくても、いつかは出る筈だ。あるいは出さなければならなくなる状況に置かれるかもしれない。

出してみせる。誓悟から提起されたものの答えも。そしてそれが揺るぎないものとして確立されたなら、それを受け入れたいと思う。

《傍観者》として。

私という存在として。

「嘉」

と、聞き慣れた声が私を呼んだ。私は目を上げてテーブルに近付いてきた人物に目を向けた。そいつは唇の片方を笑わせて私を見ていた。

「調子はどうだ？」

「……………」

私は答えず、そいつを只見ていた。

《制裁者》、独門氷鳥。

氷鳥はシニカルな笑みを浮かべたまま私の向かいに腰をおろした。左手に持つカプチーノをことりとテーブルに置く。

そして前置きもなく。

「いなさ、ギリギリ生きてるんだってな。昨日の今日なのに学校中大騒ぎだ」

そうカップに唇を付ける氷鳥。私は眉を顰めて返した。

「全くだ。……………お前の《制裁》じゃないのか」

「いや。俺じゃない」

短く言って椅子の背もたれに身を預け、腹部で手を組む氷鳥。

「昨日、《破壊》の後に俺が来ただろう？あの時は騒ぎはなかったから、多分あの後だ。誓悟も何も言っていなかったしな。俺達が誓悟のところに行った時くらいじゃねえかな。それか、その後。通報し

たのは一般人みたいだぜ、病院は青柳じゃねえから。でも俺が思うに……あれは自殺とも事故とも少し違う。《破壊》の作用みたいなものだな。文字通り『生きる屍』か」

「思ったより強く作用したらしいな」

「他人事かよ」

どうでもいい感丸出しの私の切り返しに、氷鳥はいつもの苦笑いを見せた。お前らしい、と溢す。

ぶっちゃけ、あの後あいつがどうなろうとどうでもいいことだ。

《破壊》は間違いなく完了したのだから、その後の経過に興味はない。

「まあ今回はまだ青二才の《敵》だったからまだいいけど。これからは強い奴らも出てくるぞ？ 恐らく」

珈琲カップの縁を親指でなぞりながら、氷鳥はそう言った。私を見つめる視線は只真っ直ぐに私に向かう。

つい、とその視線をかわすように目を床に這わせ、唇を開く。

「分かってる」

それだけ言って一つ息を吐く。

分かってる。

これから、もっともっと《不穩》は深まり、強力になっていくだろうということは。只、それに対抗していくだけの技量と力量があるかは別として。

だけど。

「今でもなんとかしてきた。だからこれからも同じようにしていく」それが通用するかは分からない。

だけど、通用する限り、私は《傍観者》として立ち続ける。そして探し続ける。

私という存在の意味を。

「そうか」

氷鳥はそうとだけ返し、うっすら笑みを浮かべた。
共有する沈黙。

「……………」

私は窓の外に視線を移した。

変わらない景色、変わらない風景。同じように繰り返す時間。その中で私はこれからも生きていく。

《不穏》を生きていく。

あらゆるものの『意味』を模索しながら。

さあ。

始まり続け、終わり続ける明日へ。

【THE END】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796p/>

傍観者-BLACK&WHITE-

2011年1月7日16時10分発行